



『源氏物語』における、明石物語の展望をめぐって

松本, 瑞貴

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2024-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8516号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482264>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

令和四年十二月七日

『源氏物語』における、明石物語の展望をめぐって

神戸大学大学院人文科学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

松本瑞貴

目次

序章	1
第一章 二世源氏の物語	4
第二章 家再興の物語としての明石物語 — 藤原高藤・山陰説話との関連から —	16
第三章 明石物語の構造	26
第四章 女君達の物語 — 明石の君と紫上を中心に —	36
第五章 宇治十帖の女君	48
終章	61
初出一覧	65

序章

『源氏物語』における明石一族の家再興の物語（以下、明石物語）は、光源氏との婚姻に端を発しており、第一部・二部で展開される光源氏・夕霧親子による二世源氏繁栄の物語と密接に関わって、明石姫君の皇子出産、その後の住吉参詣をもって一応の決着を見る。

明石物語の主役、明石の君については、これまで多くの人物論が提出され、作者像を投影した研究が盛んであった。その点において阿部秋生氏による、明石物語に通底する古代伝承世界や、受領階層でありながら再び浮上しようとする元名門一族の意識、明石の君の父入道が一族の浮上のためどのように財を成したかについてを、作者と明石の君を切り離して行った総合的分析は注目される⁽¹⁾。阿部氏は一族の命運に翻弄された明石の君の分析を通じて、登場人物に対する人物論を超え、物語全体の構造分析を行っていると言えよう。

明石の君の人生は父入道の意思の下に決定され、それ故に一族を無視してその人物を考えることは不可能である。そして明石物語は、光源氏との婚姻を足がかりに没落した貴族が浮上していくことになるため、一族及び明石の君は常に、源氏の人生と密接に関わって存在している。明石の君の分析においては、室伏信助氏が指摘するように⁽²⁾、彼女個人の人物論に終始した狭い範囲でのみの分析では、到底収まらないことを念頭に置き、より包括的な研究が求められている。

本論文においては、物語の第一部・第二部世界を牽引する大きなテーマとして明石物語がどのように構成され、いかなる結末を得たのかについて主に光源氏との関わり及び史実における受領階級の婚姻を中心として検討していく。そして、若菜巻に結実した明石一族の悲願達成の後、明石物語が物語の展開に対

し、特に第二部後半から第三部世界にかけて、どのように影響を与えたか、もしくは与え得なかったのか考えたい。

本研究を進めるにあたっては、源氏との関わり及び、明石・按察使大納言家の家再興の論理・方法に関する先行研究をおさえておく必要がある。

明石物語は、明石の君と源氏の婚姻を発端とし、源氏の人生に密着した形で展開されていくため、作品内での位置付けを行う時、源氏の繁栄との関係性の分析は不可欠である。そして、現在までの研究においては、臣下と王者との狭間を生きる源氏の人生史、即ち一度臣籍へと降った皇子が王者に近づき準上天皇に昇る、所謂源氏の王者性との関わりの側面から、明石物語は多く論じられてきた。日向一雅氏による明石一族と、同族・按察使大納言家の家再興の論理について「按察使大納言の遺言」に焦点を当てた研究や⁽³⁾、源氏との関係性に焦点を当てた鈴木日出男氏など⁽⁴⁾、多くの蓄積が存在し、明石物語は王権と不可分の関係にあることが一般的見解と言える。特に明石の君と源氏の王権への道のりの関係性については、前掲阿部論文や、龍女としての明石の君を六条院世界に取り込むことで源氏に海龍王的性格が付与されたとする東原伸明氏の論などが詳しい⁽⁵⁾。

しかし、源氏の王者への道程に対する明石の君の役割への言及が多く見られる一方、管見の限り源氏が我が息子夕霧へとその権力を委譲する、執政者としての側面に明石一族が果たす役割の分析は不十分であるように思われる。物語成立以前の歴史上には見られない、賜姓源氏の二代にわたる繁栄の物語として、源氏・夕霧父子の繁栄は『源氏物語』内部において独自の展開を見せているが、彼らの繁栄に明石一族がどのように関わるかを詳らかにすることは、作品全体における明石物語の位置づけを行う上でも重要であろう。

またこれまで、物語前史、特に桐壺朝下で起きたと示唆されている、桐壺朝左右大臣家の台頭を呼び込んだ政変と、明石・按察使大納言一族との関わりへの分析を通じて、明石入道や按察使大納言が、どのような方法で一族の再生を遂げようとしたかについても、広く検討されてきた。

明石入道は「大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人」(若紫 二〇二頁)であり、入道の父親は大臣であったという。若菜上巻では光源氏によってかつての名門明石一族は「ものの違ひ目」(若菜上 一二八頁)によって「かく末はなきなり」(若菜上 一二八頁)と世間に噂されていたことが知らされる。

この「ものの違ひ目」は、坂本和子氏等の先行論によって、政変ではなからうかという所が一般的な解釈である(6)。助川幸逸郎氏はこの政変により没落したのが、六条大臣家や桐壺更衣の父大納言とその同族明石一族であったのではないかと指摘している(7)。物語内において政変への言及は勿論されてはいないが、物語前史に政変を読み取り、そこに明石一族の関わりを考えることは妥当であろう。明石一族及び彼らの同族按察使大納言の一族は、政変によって急速に零落した一族の起死回生を賭けて、明石入道は源氏に、按察使大納言は桐壺帝に、それぞれ娘を嫁がせたと考えられる。

彼らの家繁栄の論理について日向一雅氏は、按察使・明石一族が皇統譜へ血を注ぐことにより源家として再生を遂げたと述べる。按察使大納言の遺言について(8)

大納言家は後継たるべき男子が出家していたから、更衣の入内をもって消滅するほかないのだが、更衣に皇子の誕生を期待することで、新しい源家としての再生に賭けたというわけではないか。女子を媒介した家の再生の論理ともいべき方策である。

と、桐壺更衣という女系を通して家の再興を図る意図があるとし、明石入道家にも按察使大納言家と同じ家再興の論理が働いていると考えている。跡継ぎとなる男子の存在しない按察使・明石一族の再浮上を考える上で、日向氏の考える皇統譜を通じた女系での家の再興という視点は非常に重要な視点である。しかし、既に助川氏が反論を試みているように(9)、彼らが元源家であるが故に源家としての再生を目指したという指摘の妥当性については、慎重にならなければならない

本稿では、明石一族再興への道程を考えるにあたり、皇統譜への女系による血の継承という論理を重視しつつも、彼らが必ずしも源家である必要がなく、むしろ元は藤氏的な家柄であると想定すべきではないかという立場を取りながら、物語成立前後、明石一族と同じような受領層達が貴顕との婚姻によってどのように一族を浮上させていったのか、実際の事例を参照しながら、明石物語全体の構造を検討する。

具体的には、史実において明石一族のような没落貴族が再興を遂げるための手段として、藤原高藤のように娘を天皇に入内させ、天皇外戚となる高藤型と、藤原山蔭のように権力者と関係を結び、その繁栄に付随する形で浮上していく山蔭型が存在していることを想定し、何故娘を入内させる道を選んだ按察使大納言の思惑は頓挫し、娘を源氏と婚姻させた明石入道の計画のみが達成へと導かれたのか、その要因を探ってゆく。

そして最後に、本稿においては現行あまりされてこなかった第三部世界においての明石物語の影響、つまり明石一族の物語が三部世界においても未だ続いていると言えるか否かを考えていく。

源氏や明石一族の物語は、若菜上巻の明石姫君の皇子出産とその後の住吉参詣において一応の達成を見た後、急速にその存在感が薄れ、その後の世界においては夕霧の繁栄や明石中宮についての話題は、物語の中心にはならない。これに入れ替わる

形で物語世界の主要なテーマとなったのは、若菜以降の女三宮や落葉宮、そして紫上の苦悩の物語や、宇治の八の宮三姉妹の苦難の物語であり、明石一族や夕霧の物語が既に終わっていると考えられることも出来るかもしれない。

しかし一方で中井賢一氏や⁽¹⁰⁾、加藤昌嘉氏は⁽¹¹⁾、宇治の女君達は、夕霧や明石一族に対抗する存在として、薫を京の政治の世界に引き入れる役割を果たしていると考えている。両氏は、明石一族や夕霧、薫を中心とした政治闘争を物語内に読み取る可能性を指摘しており、これは看過できない視点であると思われる。

本稿では女君達の、特に零落してしまつて後ろ盾の頼りない女君達の人生が何故過酷なものとなつてしまふのか、四章では第二部までの世界を牽引する女主人公・明石の君と紫上、五章では宇治の三姉妹の生き様の分析を通して、女君が特に婚姻に際して如何に多くの問題を背負っているかについて論じる。そして、若菜以降におけるこの「女の生き様の物語」の裏側に、明石一族や夕霧の繁栄の物語の胎動を認めることが出来るかについて結論を出したい。

以上、本稿においては、上記にあげた点を中心として、総合的な分析を行うことを目的とし、第一部・第二部を貫く大きなテーマである明石物語を作品上に位置づけたい。

なお、特に断りのない限り、本論文における引用は、小学館『新編日本古典文学全集』による。括弧内の数字は巻名および頁数を示す。

注

(1) 阿部秋生「明石の君の物語の構造」『源氏物語研究序説』東京大学出版会・一九五九年

(2) 室伏伸助「明石君物語の主題」『源氏物語研究集成二』笠間書房・一九九九年

(3) 日向一雅『源氏物語の王権と流離』新典社・一九八九年
(4) 鈴木日出男「明石の君と光源氏」『源氏物語虚構論』東京大学出版会・二〇〇三年

(5) 東原伸明「源氏物語の読み方―明石一族と六条院世界の関わりを例にして」『源氏研究』翰林書房・二〇〇三年

(6) 坂本和子「光源氏の系譜」『國學院雑誌』七六卷・一九七五年十二月、他に、袴田光康「『源氏物語』と『日蔵夢記』―延喜王墮地獄説話の再検討―」『中古文学』六九卷・二〇〇二年、神原勇介「女系繁栄譚としての明石一族物語―「もの」の違ひ目」の再検討を起点に―」『中古文学』一〇二号・二〇〇八年十一月年等がある

(7) 助川幸逸郎「源氏物語の「呪われた部分」―先帝王家と明石・桐壺一族をめぐる―」『源氏物語のことばと身体』株式会社青蘭舎・二〇一〇年

(8) 日向一雅「桐壺院と桐壺更衣―親政の理想と「家」の遺志、そして「長恨」への主題―」『文芸研究』七五号一九九六年

(9) 注へに同じ

(10) 中井賢一「『源氏物語』明石中宮論―明石中宮の機能と権力機構としての宇治―」『中古文学』九一号・二〇一三年五月

(11) 加藤昌嘉「源氏物語 宿木卷の機構―反・明石夕霧の力、浮舟の力―」『詞林』二七号・二〇〇〇年四月

第一章 二世源氏の物語

はじめに

『源氏物語』は、歴史に取材した物語として史実を踏襲しながら、その内部に史実から乖離した新しい歴史の創造を試みている。光源氏、夕霧親子の、源氏二代にわたる繁栄は、その一つであるといえる。

賜姓源氏の創出は嵯峨天皇に遡るが、史上において一世の源氏が大臣になることはあっても、二代にわたり大臣を勤めた人物は、少なくとも物語成立当時までに一人も見受けられない(1)。

しかし『源氏物語』において、源氏は須磨・明石への流離を終えて政界に復帰した後、濡標巻の勘申によって子ども達の運命を知ることとなり、一方では不義の子・冷泉帝を通じて限りなく王者へと近付き、藤裏葉では準太上天皇にまで上り詰める。そしてこの勘申によって明石姫君と夕霧の行く末も知り得た源氏は、夕霧が太政大臣へ昇ることを確信し、二世源氏繁栄への道程はここから始まっていく。

桐壺帝は、後ろ盾のない源氏の処遇に苦慮し、臣籍へと下す決断をした。源氏は、父帝の意向に沿って、「朝廷の御後見」としての人生を歩み、政界復帰の後、絵合巻では頭中将の娘・弘徽殿女御方に勝利し、養女・秋好中宮が冷泉帝の寵愛を得た。続いて、娘・明石姫君が東宮に入内し、皇子の出産を経て源氏の政権は盤石となり、息子・夕霧へとその繁栄は続いていく。

史実で類を見ない、源氏二代の繁栄を成すために、源氏は執政者としてその政権を保つ必要があり、彼がどのように執政への道を進んでいったのかについて検討が必要である。

そもそも源氏の繁栄が困難であるのは、平安中期、藤原北家が天皇外戚として執政権を保持したことが関係しているのだら

う。本来皇后は皇族、内親王から立てられていたが、北家出身の后に独占されていた。

『源氏物語』では桐壺、冷泉、今上(朱雀院の子)三代にわたって源氏の后が立つが、少女・若菜下巻ではそれぞれ

源氏のうちしきり后にみたまはんこと、世の人ゆるしえず、弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかながなど、内々に、こなたかなたに心寄せきこゆる人々、おぼつかながりきこゆ。(少女三〇〜三一頁)

東宮の女御は、御子たちあまた数そひたまひて、いとど御おぼえ並びなし。源氏のうちつづき后にみたまふべきことを、世人飽かず思へるにつけても、冷泉院の后は、ゆるみなくて、あながちにかくしおきたまへる御心を思ふに、いよいよ六条院の御事を、年月にそへて、限りなく思ひきこえたまへり(若菜下 一六六頁)

として、皇族出身の后は異質なものと考えられている。『源氏物語』に限らず『宇津保物語』では、朱雀帝の中宮が左大臣(源正頼)の娘の生んだ皇子立坊に反対しており、

この筋にしつることを、一世の源氏の娘、后になり、子坊に据ゑたることはなかななるを、なかこれしもさるべき(国譲下 二五二頁)

と、源氏の後の立后、皇子の立太子は共に否定的に捉えられている。『栄花物語』にも、後朱雀帝の後宮に、皇后禎子内親王、中宮姫子女王のみで藤氏の后がないことを、伊勢から「藤氏の後おはしまさぬ、悪しきことなり」(暮まつほし 三〇三頁)と託宣が下り、教通の娘生子の入内が決まったという記事があ

り、後は藤氏から輩出されるものと考えられていたことがうかがえる。

後宮を藤氏の後が支配し、彼女たちの生んだ皇子が立太子すること、藤氏は天皇外戚となり執政権を握り続けた。少女巻で源氏が語った教育論における、子が親の官位を超えることの難しさは、源氏に限らず、天皇の外戚となり摂関を世襲する一部の家柄になり得ない当時の貴族が、潜在的に抱え込んでいた問題であったと言える。

このような困難を克服するため、源氏は少女巻において、嫡男夕霧を蔭位の制により四位につけずに六位から始めさせ、大学へ入学させた。学問をさせる理由は、優秀な子であったとしても親の官位を超えることは難しく、学問を修めてこそ親亡き後も世間で侮られずにすむからであったという。

森野正弘氏は源氏が王氏であるが故に藤氏等と違い、血統を通じて行う相承を否定的に捉え、劣化する血統を補填する為の方策として学問を採用したと指摘する(2)。劣化する血統を補う手段として学問を選んだと考えるのは妥当な指摘だが、天皇外戚となり代々摂関を世襲しえない藤氏以外の氏族にも家の零落は必然であり、少女巻の教育論は、源家に限らず広く貴族社会一般を射程に入れていると考える方が自然であろう。

ところで学問は、夕霧の繁栄に実質的な効能を与えたのだろうか。夕霧の大学入学は、大学寮ひいては学問による文治政治の復権(3)、学問の復権を通じた冷泉朝の聖代イメージの創出の面から論じられてきた(4)。

先行論の指摘は尤もで、塚原明弘氏が指摘するように、漣標巻における摂政辞退や致仕左大臣招聘等の事例からみても(5)、源氏は天皇外戚となり一族に権力を集中させるといった所謂摂関家の手法をとらず、夕霧の大学寮入学による大学寮の復権と文治政治の復興という方策をとっており、学問重視の姿勢を一貫しているように思われる。

しかし、「殿にも文作りしげく、博士、才人どもとこころえたり。すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現るる世になむありける」(少女三〇頁)といわれ、学問が隆盛を迎える世が到来しても、実質的な政治の中心にいるのは、源氏・夕霧親子以下、桐壺朝左右大臣家を吸収した頭中将勢力や、東宮の母女御を姉妹に持つ髭黒大将、そして彼らの息子達であった。そして源氏以外、子息を夕霧のように大学寮に入れてもいない。

文治政治を理想とする教育論は、一方では太政官制の復活と学問の復権として肯定的に語られるものの、依然天皇外戚となり得るような高位貴族達の間では効力をもたず、夕霧の繁栄もまた、学問の効果であったとは言いがたい。源氏が自身の政治的基盤を築き、夕霧へと引き継がせてゆく過程は、明らかに史実における藤原北家の方法を踏襲しているように見える。

本章では源氏による親子二代にわたる繁栄の過程について、彼らの婚姻政策及び、作中使用される呼称の問題を通じて検討していく。

一

源氏の盤石な基盤に欠かせないものは、何をおいても天皇との外戚関係である。

物語において源氏が長く繁栄するためには、令制が形骸化して以降の貴族達がそうであったように、後宮に娘を入内させ、男児を設けて立太子させることが不可欠であった。

言うまでもなく、桐壺帝亡後、一時は源氏を須磨へ蟄居させるほどの威勢を右大臣家が誇ったのは、ひとえに弘徽殿女御所生の朱雀帝が即位したことによる。弘徽殿女御は中宮にこそなれなかつたが、天皇生母であるため右大臣家が一時左大臣家を凌ぐ勢力となった。

冷泉朝では、旧右大臣勢力を取り込んだかつての親友頭中将

と光源氏が、帝の寵愛を巡り、絵合を通じて激しく対立する。源氏は六条御息所の遺児秋好を擁し、秋好に思いを寄せていた朱雀院は絵合に際して秘蔵の絵を贈り、藤壺中宮も秋好の入内を積極的に押し進めた。一方、頭中将(当時権中納言)が支援する弘徽殿女御方には、かつての右大臣勢力であった弘徽殿太后や尚侍の君(朧月夜)が手を貸している。頭中将の妻は弘徽殿太后と尚侍の君の同腹の姉妹で、かつての左右大臣家は頭中将と右大臣家の四の君の婚姻によって合併された。故に、太后や尚侍の君は頭中将に助力するが、結果的には頭中将側が敗北し、冷泉朝において二番手に甘んじ、少女巻では頭中将とその母大宮は、弘徽殿女御の立后が叶わなかったことを悔やんでいる。

そして、冷泉朝における権勢を盤石なものとした源氏の次なる手は勿論、自らの実子、明石姫君を次代の中宮・国母とすることである。源氏は冷泉朝での後宮支配に成功したが、秋好中宮は源氏と血の繋がった娘ではないため、冷泉帝との間に子をもうけたとしても外戚になり得ない。また、冷泉帝は源氏の不義の子であるため、子を成せば源氏の血が皇統譜に引き継がれるが、両者の関係は公にはできぬ上、結果的に冷泉と秋好の間に子が出来ることもなかったため、いずれにせよ盤石な体制とは言いがたい。源氏繁栄のためには娘の入内、立后は不可欠で、秋好と冷泉の間に子が出来なかった以上、源氏・夕霧親子の繁栄は、外戚関係の確立にかかり、明石一族はこの点において、光源氏が目指した二世源氏の繁栄になくてはならない。

源氏としては息子夕霧への安全な政権委譲のため、明石姫君を立后させ、皇子を皇太子へと押し上げて外戚としての地位を固める必要がある。宿曜の勘申によって明石姫君以外には娘が生まれないことを知った源氏は、その生母の出自の低さが玉疵となることを避ける目的で、幼い姫を母から引き離し、紫上の養女とした。そうして紫上と協力して后にふさわしい教育を施し、入内への準備を万全に整えていく。

結局、明石姫君の入内の際には源氏の威勢に押され、時の左大臣までもが娘の入内を躊躇する事態になった。これに対し源氏は

いとたいだいしきことなり。宮仕の筋は、あまたある中に、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ。そこらの警策の姫君たち引き籠められなば、世に栄あらし(梅枝四一四頁)

という反応を示し、明石姫君の入内を延期して、他の后達を先んじて入内させる。多くの女性が研鑽してこそ後宮の価値があり、東宮の為にもなるとの考えた処置であるが、明石姫君が寵愛を得ることが出来ると確信していたから出来たことでもある。実際、東宮は明石姫君の入内を心待ちにしており、既に結果は決まっていた。他の貴族達が、「この殿の思しきざすまのいとことなれば、なかなかにてやまじらはん」(梅枝四一四頁)と入内を尻込みしたのも当然のことであった。

そして、源氏の権勢を継いだ嫡男夕霧も、父親の敷いた後宮政策を着実になぞっていく。匂兵部卿巻では、今上帝と明石中宮の間に生まれた皇子が立坊し、第二皇子も立坊予定であること、その皇子たちに夕霧が娘を次々入内させていることが描かれ、宿木巻には、第三皇子匂宮の立坊も示唆されている。

匂兵部卿巻のこの部分は、夕霧と同時に、明石一族の繁栄を示すものでもある。明石一族は源氏との婚姻に一族の命運を賭け、その悲願を達成した。そのためには勿論源氏・夕霧親子が天皇家との外戚関係を構築し、政権を盤石にする必要がある。明石一族と源氏は、この点において運命共同体であった。源氏が入道の夢を知るのは遙か後になってからだが、予言によって姫君立后を知ること明石一族を必要としたために、明石物語と源氏の繁栄は相互に補完し合って成立した。

以上のように、光源氏による後宮政策は冷泉・今上の御代で順調に成功し、息子夕霧がその方針を踏襲することによって、彼らは歴史上に摂関を世襲した家柄と同じ方を用いて権力基盤を築いた。特に、源氏にとっては実子を入内・立后させることが絶対に必要で、明石母子、ひいては明石一族が源氏の目的達成に不可欠な存在であった。

二

物語において、皇女の生き方は二通りに分類される。一方は有力者と結婚して繁栄し、もう一方は宮家の誇りを守り独身を貫く。

独身の皇女としては、男君から求婚を受け、悩みながらも拒み通した朝顔齋院や、宇治八の宮の娘、大君などが存在する。本来皇女は、結婚せず独身を通すことが良いとされ、若菜上巻において朱雀院が女三宮の処遇に苦慮する際、乳母が「皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど」（若菜上 二九頁）と述べており、朱雀院自身も、

皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、(中略)昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる隙のすき者どもに名を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる、言いもてゆけば、みな同じことなり。(若菜上 三二一〜三三三頁)

と、苦悩している。宇治の八の宮も、

わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。おぼろげのよすがならで、人

の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。(椎本 一八五頁)

と、大君と中君に遺言を遺しており、高貴な女性、特に皇族の女性は親亡き後貞節を守って生涯独身を通すのが良しとされていたことがうかがえる。

一方で臣下と結婚する皇女として、桐壺朝の左大臣の妻・大宮、女三の宮、朱雀院の女二の宮(落葉宮)、今上の女二の宮が存在するが、この結婚には、有力な臣下との結婚によって宮家の血を存続させる意図があったと考えられる。

また、『源氏物語』においては、前項で述べたような天皇に娘を入内させることはもちろん、皇族との結婚、姻戚関係を重視する思想が見うけられ、臣下と皇族の婚姻は、双方に利益をもたらしている。

柏木は、若菜上巻において、父内大臣から

この衛門督の、今まで独りのみありて、皇女たちあらずは得じ、と思へるを、かかる御定めども出て来たなるをりに、さやうにもおもむけたてまつりて、召し寄せられたらん時、いかばかりわがためにも面目ありてうれしからむ(若菜上 三七頁)

と言われているように、皇女との結婚に強いこだわりを見せている。また、同じく若菜上巻においては女三宮の乳母が、

その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前齋院なども、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ(若菜上 二八頁)

と言っており、「やむごとなき御願ひ」が皇女であると明言されてはいないが、前斎院の名が出ていることから、光源氏も、皇族に連なる女性との婚姻を望んでいると周囲から捉えられていると思われる。

皇女の結婚については多くの先行研究が存在するが(6)、今井久代氏は(7)、皇女が「皇族集団を他氏から聖別してその王権を保証する役割をもっている」こと、この「皇親の地位(聖別された血)」が藤原氏の望むものであったことを指摘し、藤原氏が皇族との結婚を志向する理由としている。またこの結婚は、藤原氏が権勢を握っていく中で徐々にその地位を落としていった皇族の受け皿ともなったと氏は述べており、歴史上における皇女と臣下の結婚は、両者の「政治的紐帯をもたらす強力な方策」となったと考えられる。

実際史実において、式部の生きた時代、彼女の仕えた彰子の父・道長は源倫子(源雅信女)と源明子(源高明女)を妻としており、道長の息子・頼通も隆姫女王(具平親王女)を正妻としている。道長父子が源氏、特に村上源氏との姻戚関係を重視していたことは度々指摘されている通りである。『栄花物語』巻八「はつはな」では、頼通の結婚相手にそれ相応の家柄をと悩む道長が、具平親王から頼通を婿にと望まれたことに恐縮しつつ、男は妻次第で決まり、高貴な身分に婿取られるのが良いとしており、源氏の女性との結婚を歓迎している。『栄花物語』は、これが中務宮方から持ちかけた結婚であるように描いているが、実際の所『紫式部日記』には(8)、

中務の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして、かたはせたまふも、まことに心のうちは、思ひるたることおほかり(二三 一五〇〜一五一頁)

という叙述があるように、道長側からの積極的要請もあつたに違はなく、臣下側から皇親の地位を望む動きも多分に存在していたはずである。

また、道長は源成信(致平親王息)や源経房(高明息)を、頼通は源師房(具平親王息)や源俊房、仁覚(師房息)、源頭基(源俊賢息)を養子にしており、これもまた、道長父子のみの希望でなく、源氏側からも自身の娘・息子を送り込むことを望んでの縁組み故に成立しているであろう。

源氏の受け皿としての臣下との結婚は『源氏物語』内にも現れている。桐壺帝には女三宮(大宮)と女五宮という姉妹がいるが、彼女たちの盛衰は臣下との婚姻が命運を分けた。

大宮は左大臣と結婚して、子をもうけ、息子・頭中将は右大臣の娘と、娘の葬上は光源氏とそれぞれ結婚している。左大臣家に縁付いた大宮はその子どもが有力者と婚姻関係を結ぶことで繁栄していくが、女五宮はどうだったか。女五宮は桐壺帝やその弟宮・桃園式部卿宮の妹にあたり、斎院を退いた朝顔の同居相手として登場する。光源氏の求婚にも関わらず朝顔は峻拒の姿勢を貫くが、叔母女五宮は源氏に対し、

三の宮うらやましく、さるべき御ゆかりそひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうこそ悔いたまふをりありしか(朝顔 四七二頁)

と述べており、朝顔と源氏の結婚を女五宮だけでなく故式部卿宮も歓迎していたとわかる。大宮の繁栄を女五宮は羨ましく感じ、彼女の繁栄が婚姻から成されたものであつたと認識している。この認識は決して女五宮だけのものではなく、朝顔付きの

女房達も、衰退の一途をたどる宮家を回復するために源氏との結婚を望んでいたようである。物語は、いかに宮家といえども、権力者との結婚無しには家を存続できないという事実を描き出している。

以上を踏まえて『源氏物語』の婚姻を考えてみると、夕霧が彼の「まめ人」と称される人物造形からは考え難いような、落葉宮との結婚を強引に進めるといふ展開も、彼女が皇女であったことが一因として考えられるのではないか。

柏木は、女三宮との結婚は果たせなかったものの、後に朱雀院の女二宮、通称落葉宮を妻にする。落葉宮は劣り腹の皇女ではあるが、柏木は彼女を皇女として遇することを求められ、軽々しく扱うことが出来ない。若菜下巻において、

下藪の更衣腹におはしましければ、心やすき方まじりて
思ひきこえたまへり。人柄も、なべての人に思ひなずら
ふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし
方こそなほ深かりかれ、慰めがたき姥捨にて、人目に咎
めらるまじきばかりにもてなしきこえたまへり(若菜下
二一七頁)

というように柏木は、女三宮と比べると身分の低い更衣から生まれた落葉宮を軽んじる気持ちはあるものの、皇女である以上、世間にとがめられないような扱いをする必要があったことが示される。また、女三宮との間を取り持つように頼む柏木に対し、女三宮付きの女房は、既に皇女との結婚を果たしながらもう一人の皇女を望むのはあまりにおこがましいとあしらい、落葉宮の特別な女君としての立ち位置が示されている。皇女である、という点が落葉宮との結婚において重要な要素であることは否めない。

女三宮降嫁問題に端を発した一連の事件は、当事者達の心情

はさておき、結論だけをみれば嫡男柏木が死亡することで頭中将勢力は大きな打撃を受け、光源氏もまた女三宮を出家という形で失うこととはなるが、柏木との密通が世間に明かされることはない。彼女の出家は産後の日立の悪さが理由とされ、朱雀院が、女三宮の出家を強いて押しとどめようとしないうる源氏の冷淡な態度を恨みつっ、産後の出家であれば、夫婦仲が問題であったように世間に思われることが無いために良い機会だろうと言うところからも、世間一般からみて不自然な出家ではなかったように思われる。

あくまで表面上は、この一件で痛手を受けたのは頭中将勢力であり、光源氏側は夕霧が皇女を得ることで源氏の後継者として、むしろ基盤をより一層確かなものとした。

光源氏、夕霧、薫は結果的に三人とも皇女、しかも内親王との婚姻を果たしている。源氏は、自身だけでなく子孫に至るまでの繁栄を目的としているため、歴史上において藤原氏がとつた方法と同じく、皇女を手に入れ、天皇家との姻戚関係を結ぶことによって家格の安定を図ったものと思われる。

そもそも、源氏に限らず物語内の権力者は、皇族と姻戚関係を積極的に結んでいる。髭黒は、紫上の父・式部卿宮の娘を北の方に迎えているし、二人の間に生まれた真木柱は螢兵部卿宮の後妻として迎えられ、後に頭中将の息子紅梅の妻となっている。

このように次期権力者となりうる人物達は、皇女をもらい受けたら、皇族との姻戚関係を結んでおり、そこには皇族との婚姻によって両者の紐帯を保つ意図があったと考えられる。

三

臣下同士結びつきも重要な要素であった。源氏は正妻とし

て左大臣の娘葵上を迎え、夕霧の正妻は頭中将の娘雲居雁である。賢木巻において源氏と朧月夜の私通が発覚した際、右大臣は源氏と朧月夜との婚姻に好意的な発言をしており、桐壺朝下での政敵である右大臣の四の君と左大臣家の頭中将も結婚している。頭中将は前述の通り、後には右大臣家を吸収する形で勢力を拡大し、臣下同士の結びつきもまた、執政者が政権を安定させるために必要なものであった。

平安期の婚姻について、服藤早苗氏は実資の娘千古の婚姻の経緯を分析し、結婚は男女の父同士の合意で行われること、婚姻直前で破談になる場合があることなど、彼らの婚姻が極めて政治的な思惑の上で行われる家父長制的婚姻決定であったことを指摘する(9)。また服藤氏の、十世紀中頃は撰関家の子息と受領層の娘の婚姻が多かったのが、十世紀末から十一世紀以降では同階層同士のもの主流になったという指摘も注目すべきである。

実資の娘千古の婚姻相手として望まれていた道長の子息長家の例は顕著であろう。長家の婚姻相手とその経緯について検討してみたい。

長家の最初の妻は行成の娘で、彼らはかなり年若い者同士の婚姻であった。長家は明子腹でありながら倫子の養子となり、二人の婚姻は、十五歳になった長家を婿にと考える家も多かったが、行成が「この中将の君を、さてもあらせてたてまつらばやと思しなりて、さべき方より便りして、殿の御気色たまはらせたまへば」(あさみどり 一四八頁)と道長の許しを得て成立したと『栄花物語』には記されている。行成は婿をとっても大切にしていたようで、同じく『栄花物語』には長家の経済的援助の為に太宰大貳の職を得るといふ記述があり、大層熱心な奉仕ぶりであったことがうかがわれるが、結果的には行成の娘が早逝し、この婚姻は四年ほどで幕を下ろした。

行成女の死後半年ほど、今度は斉信が道長に長家を婿へと望

むことになる。『小右記』治安元年十月二十四日条には、「去四月妻亡、一周忌間可無他志」と長家がこの婚姻に消極的で、道長の仲介も失敗に終わったとされるが、二十八日には一転して「一昨中将長家帯刀長範基遣中宮大夫斉信女許」と婚姻がまとまる。『栄花物語』によるとこの斉信女は、

年ころ御子あまたおはしぬべかりしかど、みな失ひたまひて、ただ姫君一人ををぞ、えもいはずかしづきたててもたせたまへる。内にぞと思し心ざして、三条院の宮たちなど、さやうに思ひきこえたまへりしかど、思し絶えたるに、今の帝のいと若うおはしますうへに、中宮またかぎりなくおはしませば、思し絶えたり。また、東宮に督の殿さぶらはせたまふ。かやうなるにはいかでと思すほどに、この大臣殿の三位中将殿一人おはすれば、それにやと思したちて婿どりきこえたまふ。(もとのしづく 二四五頁)

というように、斉信が后がねとして育てた娘であるが、道長の娘が天皇・東宮に入内していたことで、結果的に長家を婿として迎えたとされている。しかしこの結婚も五年ほどで斉信女の死去によって終わりを迎え、鍾愛の娘を失った斉信の哀しみは『栄花物語』にも詳しい。

斉信が行成女の死去半年たため内に道長に婿取りを願ひ出たことを非難した実資であったが、斉信女が死去して三ヶ月ほど後、行成・実資は相次いで道長に婿取りを要請した。『小右記』十一月十八日条には道長が実資女の千古との婚姻を長家に勧めていると記されており、行成の希望が棄却され、実資女との婚姻を道長が望んでいたことがわかる。最終的に千古と長家の婚姻は長家の拒否によって破談となり、長家は養母彰子の女房であった源高雅の娘懿子を妻としている。

長家の事例では、婿取りの際まずは道長に話が持ちかけられ、道長の意向に沿って婚姻が進められている。そして、本来行成や斉信、実資など、娘の入内を視野に入れておかしくない貴族達がこぞって道長の子息との姻戚関係を結んでいることも注目に値するだろう。隆子女王を妻に迎えた頼通は別として、教通もまた公任女を妻に迎えている。公任女と教通の婚姻についても『栄花物語』に

内、東宮にこそは、かかる人の御かしづき女は参りたまふ、例のことなれど、内には皇后宮、年ごろ宮々の御母にておはします、また中宮はたともかくも人の申すべきにあらねば、ずちなし。東宮はた、三四ばかりにおはしまして、御遊びをのみしつ歩かせたまふに、内、東宮はなちては、さはいかが、この殿の君達のことのみこそは、人のいみじきことには思ひためれと思したつ(ひかげのかづら 五二六頁)

とあるように、元々后がねとして育てていた娘の入内を、道長女が存在によって断念した結果であることがわかる。服藤氏は十世紀末から十一世紀以降は同階層同士の婚姻が主流になったと指摘しているが、これは道長父子が撰閥を世襲し、その娘が後宮を席卷してしまったことで、他貴族の娘の嫁ぎ先が失われ、結果として帝・東宮に次ぐ優良の婚姻相手が撰閥の子息となったことに起因するのではないか。藤原氏の子女の入内、立后によって皇女の嫁ぎ先が失われたことと同じ現象が、臣下同士の間でも起こっていたのである。

そして、物語内でも同じ観点から、臣下同士の婚姻関係を考へることが出来る。桐壺朝での左大臣の息子頭中将と右大臣四の君の婚姻や、実現しなかった朧月夜と源氏の婚姻も極めて政

治的な思惑の下で行われた取り決めであろう。源氏が総合巻以降、その権力を確かなものとし、明石姫君入内の際には、時の左大臣ですら娘の入内を躊躇したのは、道長の子女をはばかって入内を諦めた公任達と通じるところがある。左大臣の女は入内したが、頭中将が雲井雁を東宮妃として入内させることを諦め、夕霧との婚姻を認めたのも、ひとえに源氏の執政者としての権勢の為といえる。髭黒も、式部卿宮の娘を北の方にしながら、玉鬘を強引に妻とした背景には、源氏・頭中将のどちらの家とも連帯を強める意図があっただろう。もちろんこれは、頭中将、髭黒側のみを要請から生じた婚姻ではなく、源氏の側からしてもかつての左右大臣家や、東宮の外戚である髭黒との紐帯を図ることに一定の利があることは明らかであろう。

四

ここまで、源氏父子の婚姻の政策から、彼らの繁栄の道程を確認してきた。源氏父子の物語は、源氏が執政となることの困難さを乗り越える為、史実における藤氏の婚姻事情を下敷きに構成されてきたと考えられるが、源氏の執政者としての性格は、呼称面にも表れている。

総合巻では、内大臣となった源氏に対し、「大殿」という呼称が初めて使用される。他にこの呼称が使用される人物としては、桐壺朝の左右大臣、源氏、頭中将、髭黒、夕霧と、当座の左右大臣等が存在しているが、そもそも、「大殿」とはどのような呼称であるのだろうか。

歴史上における「大殿」の研究は豊富とはいえないものの、西山恵子氏の総合的研究を始め(10)、近年では樋口健太郎氏や(11)、海上貴彦氏による研究などが蓄積されてきている(12)。

樋口氏は、「大殿」は従来、漠然と「家長」や、「権門の長」

と考えられ、現任摂関の父親である前摂関を指すとす。道長以降の摂関家特有の呼称で、摂関がその職を生前に辞任することから出来た称号であるとも指摘する。樋口氏の指摘は概ね妥当であり、「大殿」という呼称は、前任摂関もしくは時の第一権力者を指すといえよう。

また、海上氏はこれまでの研究を踏襲しながら、道長、師実を中心に彼らの「大殿」としての特性を論じているが、彼らには「摂関の父親」と「天皇の外戚」、二つの側面があるという。さて、『源氏物語』における「大殿」であるが、摂政になったことが確認出来るのは、頭中将の父、左大臣のみで、その他の人物は誰も該当する地位にいない。

陳斐寧氏は⁽¹³⁾、物語の第一部においては、源氏、左大臣、葵の上、右大臣(弘徽殿太后の父大臣)、頭中将にこの呼称が使用されていることから、「大殿」を、朝廷の執政者を指し示すものであると定義づけた。

陳氏は一部世界の人物のみを分析しているが、匂兵部卿巻で夕霧に、若菜下巻からは髭黒大将に度々使用されることも見逃せない。

髭黒大将は、「故大殿」と呼ばれる匂兵部卿巻において既に死去しているが、玉鬘を通じて源氏、頭中将との姻戚関係を結び、今上の母・承香殿女御の兄でもある。源氏・頭中将の後、夕霧へと執政が移るまでの間、執政者として権勢を振るっていたのだろう。

そして、夕霧が執政者であることは、彼が自らの娘と東宮及び二宮との婚姻を成功させ、大臣に昇っていることから間違いない。

ところで、桐壺朝左大臣は物語の初期から一貫して「大殿」と呼ばれ、源氏は政界復帰後、初めて「大殿」が使用されるのは内大臣となる絵合巻である。そして、少女巻の太政大臣就任後も「大殿」と呼ばれるが、玉鬘以降用例が減少し、藤袴、真

木柱、梅枝巻で一例ずつ、若菜巻以降また増えていく。この間、松風巻で源氏に引き続いて内大臣となる頭中将にも「大殿」が使用され始めるが、場面毎に、どちらが「大殿」と呼ばれるかは変化している。

源氏の内大臣就任は濔標巻のため、「大殿」はこの巻から使用されても良いはずだが、濔標でその呼称が使用されるのは、左大臣の娘、葵上が二例、左大臣が一例のみとなっている。

何故濔標巻において源氏は「大殿」ではないのか。左大臣の摂政就任こそ原因では無いだろうか。源氏は内大臣就任の際、本来「世の政をしたまふべき」(濔標 二八二頁)であったが、源氏本人の「さやうの事しげき職にはたへずなむ」(濔標 二八二頁)という固辞によって、内大臣の座についた。代わりに招聘されたのが致仕の左大臣、つまり葵上の父左大臣であるが、この源氏の摂政辞退については塚原明弘氏などが、太政官制度の再構築を意図するものであったと指摘している⁽¹⁴⁾。氏はこの方策によって、源氏が自家の利益を後回しにし、公正な政治の実現を目指したとも述べているが、執政としての教育を十全に受けていない源氏が、左大臣の補佐なしに政を主導するのは、實際荷の重い話であっただろう。

とすれば、源氏の政策的特徴と言われてきた摂政と内大臣による権力の二分体制及び太政官制の復興策は、執政者として不足する部分を、義父の左大臣に補完させるための体制であるとも受け取れないか。濔標において源氏に「大殿」呼称が用いられないのは、政治を主導する第一の執政者が致仕の左大臣だからである。

そしてまた、致仕左大臣の「大殿」呼称から、葵上との婚姻によって源氏が左大臣の義理の息子となった故の、擬似的な父子関係を読み取ることも出来るかもしれない。史上の「大殿」は、実際の父子関係を基盤におくが、父帝主導の婚姻によって左大臣家と結合した源氏は、葵上を通じた擬制的関係によって

「大殿」致仕左大臣の息子として次代の執政を担う人物として構想されている。

そうして絵合巻では後宮政策の成功により、源氏自らが「大殿」と呼ばれるようになるが、薄雲巻での致仕左大臣逝去の後、少女では太政大臣となり、内大臣の座を頭中将に譲る。源氏の「大殿」呼称は先述の通りこの後減少し、再び若菜以降で見られるようになる。源氏の「大殿」呼称が減少したのは、太政大臣となった源氏が政務から遠のいたことが要因と考えられるが、わずかに使用される藤袴、真木柱、梅枝巻での用例は、何を指しているだろうか。上三例は、源氏の養女玉鬘と髭黒大将の婚姻問題での使用が二例、もう一例が娘、雲居雁の結婚相手に苦慮する内大臣と女房の会話で使用されていることが確認出来る。

共通して言えることは、この三つが婚姻、つまり家同士の政治的な問題に関わって用いられているということである。特に、藤袴巻で髭黒は、「かの大臣も、もて離れても思したらざなり」（藤袴 三四三頁）と内大臣は玉鬘との婚姻に反対でないと考え、「ただ大殿の御おもむけのことにこそはあなれ」（藤袴 三四三頁）と源氏のみが婚姻に難色を示していると語っているが、ここでは既に松風巻で「大殿」の使用される内大臣ではなく、源氏に「大殿」が使われている。表だった政治の世界からは退いたものの、依然婚姻等の政治的問題に対し力を有する源氏の姿が見られる。

ここでも「大殿」と内大臣との関係が継続していると考えて良いだろう。源氏は、滯標以降「大殿」である義父に支えられ内大臣として政務を執り行い、彼の没後は自身が「大殿」となり、公の政務は内大臣に引き継がれていく。少女巻には昇進した内大臣の手柄を語る中に、「学問をたててしたまひければ、韻塞には負けたまひしかど、公事にかしこくなむ」（少女 三二頁）という一文があるがこれは、内大臣が父左大臣と同じく、源

氏の執政を補完する役目を持っているからこそその性格付けであると考えられる。

源氏の執政者としての性格として、「大殿」は非常に重要な役割を果たしている。「大殿」と内大臣の権力分散型の政治は、文治政治の復権以上に、実務的な執政者として源氏に不足するものを補完するために行われていると捉え直すことが出来るだろう。

「大殿」・内大臣制の確立のためには、源氏と左大臣家の中に強力な紐帯、擬似的な父子関係が必要とされ、葵上と源氏の婚姻がそれを支えていたと考えられる。この点において、物語は「大殿」の性質を非常に的確に捉えているだろう。既に述べたように、海上貴彦氏は、道長・師実次代の「大殿」制が「撰関の父親」と「天皇の外戚」という二つの側面で特徴付けられると指摘したが（15）、擬制的な父子関係と後宮政策による天皇外戚としての地位の確立によって地位を確立した源氏は、史実において未だ「大殿」制の確立していない時代でありながら、先取的に「大殿」の本質を突いていたと言える。

そしてこの「大殿」という呼称は、史実を超えて物語内部において大きな役割を果たした。「大殿」は、源氏の実務的側面を左大臣家との紐帯によって補完する役割を持つ為に、その過程で太政官制の復活が成されている。

また、源氏は「大殿」である致仕左大臣無しに執政として成り立たなかった自身の反省故か、実務的な政治能力を息子には身につけさせようという考えから、高位の貴族の息子としては異例の事態として夕霧を大学に入学させるが、結果として大学寮、及び学問の復権を呼び込んだ。

つまり、夕霧が父からその繁栄を受け継ぐ過程では、「大殿」と実務に長じた大臣（逆の場合もある）が権力を分散して統治を行う制度と、夕霧の大学入学によって成された文治政治の復活が確立されている。これらは二つとも、源氏が自力で執政とな

ることの困難さを克服するための制度であったはずだが、この政治体制が、冷泉朝を聖代にし、源氏の執政者としての位置付けを確かなものにしているとも言える。

このように考えれば、少女巻の教育論は、必要から生じた提言であり、先行する諸研究とは逆の発想で捉え直すことが出来ないだろうか。物語は文治政治や学問の復興という理想政治を目指して出発したのではなく、源氏の二代に渡る繁栄のため、源氏であるが故に執政者として源氏に欠けていた実務的側面を補うことを目的として、太政官制を復活させ、文治政治を確立する必要があったのである。

おわりに

源氏親子は極めて現実的な方法、つまり実際繁栄を成し遂げた撰関的な方法によって史実における源家繁栄の困難さを克服する。

物語は、源氏父子を執政の地位へと押し上げるため、まずは藤氏の行った後宮政策や婚姻による他家との紐帯を取り入れた。源氏・夕霧親子は、娘を通じた後宮の掌握及び天皇との外戚関係、皇族・他の権力者との婚姻の全てを達成している。

そして、源氏自身の実務的欠落を、「大殿」致仕左大臣を通じた擬制的父子関係によって補い、夕霧には学問を修めさせることで、二代にわたる繁栄を構想したと考えられる。

少女巻の教育論は、理想的なビジョンとしてではなく、現実的に、彼らに欠けている要素を補うために設けられたというべきではないだろうか。一般に、少女巻の教育論や濔標巻の源氏の摂政辞退は、源氏の理想とする文治政治、太政官制の復活として捉えられてき

た。しかし、その射程は理想政治の実現にあるのではなく、源家であるが故に実務的能力に乏しい源氏父子が執政となるためであると捉え直すことが出来るであろう。

そして、源氏が源家繁栄の為に何より必要としていた、天皇との外戚関係の確立には、明石一族の存在が不可欠であった。明石物語は、源氏と婚姻することで物語の表舞台へと姿を現し、源氏の栄華の絶頂と共に一族の再浮上を成し遂げる。二つの物語は相互に干渉し合い、補完されることによって第一部・第二部を牽引し、二部世界において達成されたと言える

注

(1) 史上、二世源氏が大任職についたのは、源師房(具平親王)の息子、俊房・秋房兄弟が最初である。

(2) 森野正弘「組織化される夕霧の浮遊性」『源氏物語の鑑賞と基礎知識 少女』・至文堂、二〇〇三年

(3) 鈴木一雄氏「『源氏物語』に描かれた大学寮」『平安貴族の環境』至文堂・一九九一年二月、塚原明弘「『天の下の有識』夕霧―大学入学と文章経国をめぐる―」『王朝文学史稿』二一号、一九九六年三月等

(4) 松岡智之「冷泉朝の光源氏―秋好立后と夕霧大学寮入学―」『むらさき』一九九七年二月、塚原明弘「光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学―「濔標」巻と「少女」巻の政治的背景―」等

(5) 塚原明弘「光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学―「濔標」巻と「少女」巻に政治的背景―」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』

少女』・至文堂二〇〇三年三月

(6) 後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」『源氏物語の探究』八巻風間書房・一九八三年、森藤侃子「内親王の降嫁―若菜上・下」『源氏物語講座 光る君の物語』三巻・勉誠社・一九九二年、勝亦志織「物語における皇女の〈結婚〉」『うつほ物語』『源氏物語』をめぐって』『むらさき』五〇号・二〇一三年十一月など

(7) 今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」『むらさき』二六号・一九八九年七月

(8) 引用は『新編日本古典文学全集二六』の『紫式部日記』(一五〇〜一五一頁)による

(9) 服藤早苗「平安貴族の婚姻と家・生活―右大臣実資娘千古と婿兼頼の場合」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』五号・二〇〇五年十二月

(10) 西山恵子「大殿考」『史窓』三六号・一九七六年三月

(11) 樋口健太郎「院政期撰関家における大殿について」『日本史研究』四八四号・二〇〇二年十二月

(12) 海上貴彦「大殿の政務参加―藤原道長・師実を事例として」『古代文化』七〇二号・二〇一八年九月

(13) 陳斐寧「大殿」としての光源氏―執政者への方法をめぐって―『国文学研究ノート』四〇・二〇〇六年一月

(14) 注5に同じ

(15) 注12に同じ

第二章 家再興の物語としての明石物語

―藤原高藤・山蔭説話との関連から―

はじめに

『源氏物語』において明石一族は、受領階級に身を落とした没落貴族で、明石の君と光源氏との結婚によって再興を果たす。明石一族の物語は、一貫して明石入道の見た夢を主軸に進んでおり、作中、彼の大望は「おほけなし」という言葉を使われているが、その理由としては、落ちぶれた貴族である彼が、自らの娘・明石の君を都の高貴な身分の人間に縁付かせようという望みを持っていたからである。元は同族でありながら身分に隔たりのある、天皇の皇子・光源氏と受領の娘・明石の君の結婚から始まる明石一族の栄達は、現実離れしているとしか言いようがない。

このように実現不可能に見える、明石一族の家再興の物語はどのように成立したのか。入道が一族の再興を志したのには、明石の君が生まれた時に見た夢の導きがあったことが若菜上巻で記される。

つまり、入道はあらかじめ夢によって一族の繁栄を知り、その実現に向けて突き進んできたのだが、家の再興と言っても明石一族には後継ぎとなる男子がない。これについては、多くの先行研究が問題にされており、明石一族と同族である按察使大納言の遺言と絡めて考えるのが主流である。

按察使大納言といえは作中ほとんど登場しないが、桐壺巻において、

生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはと
なるまで、ただ、『この人の宮仕の本意、かならず遂げさ
せてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほる

な』とかへすがへす諫めおかれはべりしかば、はかばかし
う後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと
思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だ
し立てはべりしを(桐壺三〇頁)

という風に、桐壺更衣の母君が述べているように、大納言亡き後、後見がおらず本来常識的に考えれば入内するべくもない更衣を必ず入内させるようにと、遺言している人物である。この遺言について日向一雅氏は(1)

大納言家は後継たるべき男子が出家していたから、更衣の入内をもって消滅するほかないのだが、更衣に皇子の誕生を期待することで、新しい源家としての再生に賭けたということではないか。女子を媒介した家の再生の論理ともいべき方策である

と述べており、桐壺更衣という女系を通して家の再興を図る意図があると考えられる。この女系による家の再興は、明石家も同じ論理で明石の君と源氏の結婚を進めていると、日向氏は述べる。氏は若菜上巻の光源氏が明石入道に関して語った、

この先祖の大臣は、いと賢くありがたき心ざしを尽くして、朝廷に仕うまつりたまひけるほどに、ものの違い目ありて、その報いにかく末はなきなりなど人言ふめりしを、女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも、そこらの行ひの験にこそはあらめ(若菜上一二八頁)

という内容から、源氏が、明石家が明石の君、明石姫君、若宮を通して源家として再生したことを認めており、明石家にも按察使大納言家と同じ家再興の論理が働いていると考えている。

この明石・按察使大納言家の家再興への論理は、どちらも一族の男子が家を継ぐのでなく女系によって皇統譜に血を組み入れることによって成し遂げるといふ点において特異であると言え、この構想が何に着想を得たものであったのかは考える必要があるだろう。本章では、『源氏物語』が王権と関わる家繁栄の物語を描くために利用した説話として藤原高藤・山蔭説話を想定し、その効果を分析していく。また、日向氏は明石家が皇統譜に一族の血を流し込み一族再興を果たすには、明石一族が元が源家でならなければならぬとも述べているが、その指摘が妥当かどうかも考えていく(2)。

一

本章で取り上げる藤原高藤・山蔭説話が、いったいどのようなものかについて高藤・山蔭の家系と共に確認する。

『今昔物語集』巻第二二第七話「高藤内大臣語」は、まだ年若い藤原高藤と山科の郡司の娘・宮道列子との結婚譚である。若き日の高藤(十五、六歳)が、鷹狩の帰りに暴風雨にあい、雨除けに利用した山階郡司・宮道弥益家の娘・列子と一夜の契りを結ぶが、その後長い年月にわたって離れねばならなくなった。ようやく再会した時、列子は高藤との間にできた娘を出産しており、高藤は母子を家に迎えたのち、娘は天皇の生母に、高藤は外戚となり内大臣になった、という話である。

藤原高藤は、藤原冬嗣の孫にあたり、良家の子息と言えるが、父・良門は若くして没したこともあり、内舎人であった。高藤自身も、後に娘・胤子が宇多天皇に入内し醍醐天皇を設けたことで内大臣へと昇るが、池上洵一氏によると(3)高藤は、宇多天皇の即位と胤子の産んだ淳仁親王(後の醍醐)の立太子によって急激に昇進していっただけで、それ以前の官位は芳しくな

かった。さらに、当時政治の実権を握っていたのは藤原北家の主流基経らで、良門・高藤親子は本来であれば出世を望むべくもない北家主流から外れてしまった没落貴族であったと言えよう。

一方、藤原山蔭は藤原魚名を祖先に持つ、後に山蔭流と呼ばれる一族の祖とされている山蔭の場合も、左大臣まで昇った祖先をもちながら、父・高房の時代には受領階級に身を落としていた没落貴族である。しかし、山蔭の孫の安親は正三位まで昇っており、この昇進の理由には彼の息子・中正の娘が兼家室となったこと。中正の娘・時姫と兼家の間に生まれた詮子が円融天皇に入内し、一条天皇を産んだことがあげられる。これに関わって『大鏡』には、吉田神社が藤原氏の氏神となった経緯の中で「山蔭の宣誓」(4)が記されている。山蔭は吉田明神に向けて、「我御ぞうにみかど・きさいの宮たち給ものならば、おほやけまつりになさん」と誓いを立てたので、一条天皇の治世において吉田祭が公祭となった、という内容である。

高藤・山蔭両説話は、どちらもかつては名門として知られた一族が、主流から外れて没落貴族となっていたところを、天皇家との関わりによって再興するという、家再興の物語(5)として捉えることができるだろう。そして、明石物語が家再興の物語として成立するために、この二つの説話を利用したのではないかと考え、この予測が妥当かどうかを検討していく。

明石物語と高藤説話、所謂勧修寺説話には、その構造に多くの共通点がある。

① 出会いの場所(両者とも男が京から離れた雑の地で女を見出している)

② 暴風雨(高藤が列子の家に宿を借りるきっかけは、「申時許ニ俄搔暗ガリテ 雲降り、大キニ風吹き、雷電霹靂シケレ」(巻二二一一七四頁)という、激しく風雨が吹き乱れたことに

よってであるが、源氏も暴風雨の後、明石入道の迎 えによつて明石の君と出会う)

③娘の立后(高藤も源氏も生まれた娘が後に天皇の 后となり、国母となる)

④男女の離別(どちらの物語も、男と女が離れ離れ になり、年月に違いはあるが、離れている間に女 が女子を出産している)

このように高藤説話と、源氏と明石の結婚には多くの類似点があり、明石物語はこの説話の話型にのっとっていることが推測される。男女の出会いの場として京の周縁の世界が設定され、そのどちらの出会いにも何かしらの神意を思わせる暴風雨が設定されていること。そして、出来た娘が立后となっていることに、注目すべきである。

では、なぜこの説話を源氏と明石の結婚の下敷きとして採用したのだろうか。先に述べたように、作者にとつて高藤の物語が一族の物語として身近であったことも一因である。だが、それ以上に高藤説話は、源氏と明石の身分差のある結婚に説得力を与えるために採用されたと考えられる。池上氏によると高藤が生きた時代には身分差のある結婚は珍しくなかったが、時代が下るにつれて身分差のある結婚は困難になっていったという。(6)

高藤が生きた時代に即してみると、彼と弥益女との結婚はさほど不自然な組合せではなかったからである。ここでは例証として高藤自身の母が西市正高田沙弥磨女春子、つまり正六位上相当官たる西市正を最終官職としたらしい官人の娘であったことを挙げるだけで十分だろう。以来次第に深刻化していった貴族社会内部の階級分裂は、やがて彼等の結婚対象を狭い同一階層に閉じこめていく。

道綱母が辛うじて体験した貴顕との結婚は次の世代の女性たちには夢でしかなく、さらには夢見ること自体が無益ないたづらごとへと変化していったのである。

後半部分に述べられている通り、『源氏物語』の成立した時には、源氏と明石のように、身分に隔たりのある男女の結婚は難しくなり、まして身分の劣る明石の君腹の娘・明石姫君が入内し、国母となるようなことはまず考えられない。

実際須磨巻で、明石入道が源氏に娘の明石の君を嫁がせようと考えていると尼君に相談したところ、

あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻どもいと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかく山がつを心とどめたまひてむや(須磨 二一〇頁)

というように、源氏が明石の君を相手にするはずがないと結婚に否定的であるし、娘の明石の君自身も

高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむとぞ思ひける(須磨 二一二頁)

と、身分格差のある結婚に望みを抱いておらず、この後にもこのような表現は多くみられ、結婚後も身分差を常に気にする描写がある。

明石姫君についても、明石の君が姫を紫上の養女にするか迷う薄雲巻で母の尼君が、

劣りの所には、人も思ひおとし、親の御もてなしもえ等しからぬものなり。ましてこれは、やむごとなき御方々にかかる人出でものしたまはば、こよなく消たれたまひなむ。ほどほどにつけて、親にも一ふしもてかしづかれぬる人こそ、やがておとしめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみじき心を尽くすとも、かかる深山隠れにては何のはえかあらむ。ただまかせきこえたまひて、もてなしきこえたまはむありさまをも聞きたまへ(薄雲 四三〇頁)

といているように、劣り腹の明石の君の娘である明石姫君は他の子どもと比べて劣っているため、本来なら入内し立后することは困難を極める。明石姫君はそれを紫上の養女となることで克服したが、それにしても明石の君腹、つまり劣り腹であることは大きなハンデである。

このような当時の感覚では受け入れ難い設定を可能にするために作者は高藤説話を明石物語のモデルとして選んだのである。高藤説話という、過去実際に不思議を現実とした例を元にする事によって、物語内部においてさえ絵空事のようにだと否定的に見られている、身分差のある男女の結婚から、娘の立后という非現実的な筋書きを、実現可能なものに見せているのだ。多くの先行研究が指摘するように(7)、高藤説話がちょうど宇多、醍醐朝の話で、『源氏物語』が想定する時代と重なっていることも、明石物語のモデルが高藤説話にあることに信憑性を与える。現に、『河海抄』には(8)、若菜上巻の明石姫君出産の場面における「いたくなやみたまふこともなくて、男御子にさへおはすれば、限りなく思すさまにて、大殿の御心落ちゐたまひぬ」(若菜上 一〇八頁)という一文について、「明石中宮 今上后東宮母六条院御女母入道播磨守女 皇太后胤子醍醐天皇御母内大臣高藤女母交野大領弥益女」とあり、他の注釈もこれに倣っている所から見ても、宮道家を明石家の準拠と

考えるのは妥当であろう。

高藤説話が明石物語のモデルとして妥当かどうかについて検討し、高藤説話は話型としては明石物語の準拠として使用されたと考えられるが、明石一族がいかに家の再興を遂げたのかについての答えは依然出せていない。次は按察使大納言の遺言から、明石一族の家復興への意思について、山蔭説話との関わりに焦点を当てて検討を加えていきたい。

二

先に軽く触れたように、明石・按察使大納言両家は元をたどれば同族関係にあり、両家ともに無謀ともいえるほど高貴な人間を娘の結婚相手に選び、家の再興を遂げようとする。桐壺更衣の母によると按察使大納言は、

生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまは
となるまで、ただ、『この人の宮仕の本意、かならず遂げ
させたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづ
ほるな』とかへすがへす諫めおかれはべりしかば、はか
ばかしく後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべ
きことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとば
かりに出だし立てはべりしを(桐壺巻 三十頁)(傍線は
稿者による)

と遺言によって後見のいない桐壺更衣を入内させ、桐壺帝と結婚させるということをし、明石入道も

昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにてただこの人を高き本意かなへたまへとなん念じ

はべる。前の世の契りつたなくてこそかく口惜しき山が
つとなりはべりけめ、親、大臣の位をたちたまへりき。
みづからかく田舎の民となりてはべり。次々さのみ劣
りまからば、何の身にかなりはべらんと悲しく思ひはべ
るを、これは生まれし時より、頼むところなむはべる。

いかにして都の貴き人に奉らんと思ふ心深きにより(明石
二四五頁)(傍線は筆者による)

といて源氏と明石の君を結婚させている。両者とも「生まれ
し時より思ふ／頼む」や「本意」など似たような表現で娘に対
しての期待を語っている。

また、明石入道は、須磨巻において、源氏と明石の君を結婚
させたいと明石尼君に打診する時に「桐壺更衣の御腹の源氏の
光る君こそ」(須磨 二一〇頁)という表現をしており、結婚に反
対する明石尼君に対しても、「いかにものしたまふ君ぞ。故母
御息所は、おのがをぢにもものしたまひし按察使大納言の御むす
めなり」(明石 二二二頁)とはっきり源氏との血縁を意識した発
言をしている。源氏の側には明石一族との同族意識はないもの
の、明石入道にはその意識が明確にあるのである。つまり、明
石・按察使大納言両家には、特に明石側からの同族意識を強く
読み取ることができ、一族の繁栄に対する論理を同じくしてい
てもおかしくない。

明石一族の物語について考えるとき、一族に後継ぎとなる男
子がない状態から、いったい明石入道がどのような論理で家
の繁栄を目指したのかについては考える必要があるだろう。こ
れについて、日向氏の論を引用しながら女系による皇統譜への
血の継承(9)の論理について述べたが、按察使大納言家と明石
一族が同族であることを物語が描いているのは、二つの家が同
族故に同じ論理で家再興を遂げようとしていることを示してい
るからだと考えられる。

日向氏は、若菜上巻で源氏が明石入道について語る「女子の
方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬ」(若
菜上 一二八頁)についての『花鳥余情』の(10)

さて三条院の御むすめに禎子内親王と申は後朱雀院の御
代に入内ありて後三条院をまうけさせおはしましてのち
に陽明門院と申しきその御すゑのおとこかたはたえさせ
給て女のかたより御子孫をのこし給へる事この物語にい
へる明石入道の事に公私のちかひめこそあれによりたる
やうなれはつゐてなからしるしつけ侍りこれは者かたり
つくれるよりはるかにのちの事なれと世のことはりはい
にしへもいまもかはらぬ事なるへきをや

という注釈について、明石の同族、大納言の例で考えると、

三条院―禎子内親王―後三条院という系譜に見合うのは、
大納言―更衣―光源氏ということになるが、その際大納
言の家系は源氏であったと考えるなければならない。藤原
氏の大納言が娘を入内させて、源家として再生したとい
う考え方はありえなかつたであろう。『花鳥余情』の注釈
は男系の系譜観念と同族観念を前提にしていると考えら
れる。(11)

と述べており、明石・按察使大納言家がもとは源氏でなければ
家再興の論理は成立しないとす。そして、按察使大納言の思
惑は、光源氏の源家としての再生であり、桐壺帝が源氏を臣籍
に降下したのは大納言の意になつていたとも述べている。

しかし、明石一族が源氏だと考えれば不都合なことがある。
明石入道の父親は大臣であるが、彼が大臣になれたということ
はその父親もまた、おそらく大臣であつただらうと考えられる。

それは、少女巻で源氏が自身の教育方針について大宮に、

はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いと難きこと
になむはべれば、まして次々伝はりつつ、隔たりゆかむ
ほどの行く先、いとうしろめたきによりなむ思ひたまへ
おきてはべる（少女 二二頁）

と述べていることからわかるように、親の官位を子が越える
ことが普通難しいからだ。

とすると、明石入道は父が大臣、祖父も大臣ということにな
るが、史上一世源氏が大臣に昇ることはあっても、二世源氏が
大臣に昇る例はない。源氏が二代にわたって執政の座につくこ
とは考えられないのである。また、同じ論理で按察使大納言家
がもし源家として再生を遂げたとしても、大臣まで上る可能性
があるのは光源氏までであって、末永く続く栄華を期待するこ
とは難しい。

つまり、按察使大納言・明石一族が元は源氏であり、源家再
生を望むというのは考えにくく、明石一族を藤原氏と考える方
がむしろ納得しやすい。とすると、『花鳥余情』の指摘につい
ても、「その御すゑのみこそいまの世までつたへさせ給へ」（¹
²）とあるように、あくまでも皇統譜に血を注ぎ込み、歴代天皇
にその血脈を受け継がれることを目指したのだと考えるべきで
はないか。つまり、按察使大納言の本意は光源氏が臣籍降下し
たことで、挫折していると考えられる。では按察使大納言家の
悲願は達成されぬまま終わってしまったのかと言えば、彼らの
悲願は明石物語に内包される形で達成されている。

既に阿部秋生氏などが指摘しているように（¹³）、明石入道
は、自身の代から落ちぶれていくであろう明石家の復興を、源
氏との結婚にかけた。源氏は自身の母方の家柄に意識を向けな
いが、前述の通り明石一族側は、かつて名門であった自身と按

察使大納言家のことを常に意識している。源氏は不義の子冷泉
帝の即位によって自らの血を皇統に残すことに成功したが、そ
れは決して表に出ない事実であるし、冷泉には子ができないた
め、按察使大納言家の名が皇統に残ることはない。按察使大納
言家の血筋は、源氏と明石の結婚によってできた娘、明石姫君
によってはじめて皇統に残っていく。明石の君と源氏の結婚に
は、明石一族の再生とともに、源氏を通して、桐壺更衣とその
父按察使大納言の血の再生が結実しているのだ。言い換えれば
按察使大納言家、光源氏は明石姫君が若君を産むことによって、
はじめて正統に自身の血筋を皇統譜に組み入れることに成功し
たのである。

つまり、源氏と明石の結婚は、明石家の再生というテーマの
裏に、按察使大納言家の血の回収が隠されており、いわばかつ
ての名門大臣家の再興物語なのだという意味づけられることがで
きるだろう。

以上より明石・按察使大納言家は同族であるが故に家の再興
に対する意識を同じくしていること、按察使大納言家の悲願は
明石物語において結実していること、明石・按察使
大納言家は藤原氏と捉えることが妥当だろうということは確認
できたと思う。しかし藤氏でありながら、天皇家に血を注ぐこ
とでなぜ一族の再浮上を果たすことができるのか、その答えは
依然出ていない。また、『花鳥余情』の引く三条院の例は、あ
くまでも血筋の絶えようとする旧皇統を新皇統が回収するとい
うものであり、「公私のちかひめ」と言うように明石一族の事
例とはズレが見られる。藤氏が天皇家に血を注ぐことで一族を
繁栄に導く事例としては、三条院よりむしろ山蔭説話に影響を
見ることができないのではないか。

明石入道と按察使大納言の家繁栄への過程には、明確な違いがある。それは、按察使大納言が娘の桐壺更衣を天皇に直接入内させたのに対して、入道は娘・明石の君を天皇でなく光源氏に嫁がせているのだ。明石一族は、光源氏との婚姻関係を利用して皇統譜に自らの血筋を残すという方法をとっており、按察使大納言家の踏んだ手順より一つ多い。

これと同じ手順で一族の繁栄を成し遂げたのが藤原山陰である。山陰は、藤原魚名の子孫であるが、北家の創立者である房前の五男にあたる魚名以来、一族は徐々に衰退をたどっていた。それを山陰の孫・時姫と兼家との間に生まれた娘・詮子が入内し、一条天皇の生母となることで、一族は繁栄し、山陰はその一族におけるいわゆる「中興の祖」という位置づけになった。

山陰が、自身の零落した一族を、当時執政権を握っていた藤原氏と関係し、時姫・詮子という女系を通じて皇統に一族の血を残すことで一族が繁栄したというのは、入道が明石の君・明石姫君を通じて明石一族を復興させたのと一致している。

それだけでなく、若紫巻で明石入道が「近衛中将を棄てて申し賜れりける司なれど」(若紫 二〇二頁)と言われている部分があるが、これについて『細流抄』は(14)、

中将などにて宮中にて近きまもりの官こそねかふ所なるへきを近衛をすて、国の守にならん事は頗無念の事成へしされは世のひか物とはいへり此類あまたあるへし河海実方朝臣の例をひけり又山陰中納言中将を辞して備前守に任して国にくたるよし三代実録に見えたり

と記しており、明石入道の造形に山陰のイメージが付与されていることが窺える。

また、「山陰の誓願」における「我御ぞうにみかど・きさいの宮たち給ものならば」という記述から、藤原氏の血筋を天皇家に注ぎ入れて一族の繁栄を成し遂げるといふ発想も読み取ることができよう。執政権は山陰の一族ではなく、兼家とその子どもたちに受け継がれていくものの、山陰は皇統譜にその血を残していくこととなる。

実質的な権力を握るのは自身の一族ではなくとも、后を輩出し、帝をも輩出した一族として山陰は『大鏡』に描かれることとなり、明石一族の目指した家の繁栄はこの論理を利用していると考えられる。山陰も明石入道も、娘を権力者と結婚させることによって后を輩出し、執政権こそたないものの天皇家にその血が脈々と受け継がれていくことになる。

明石物語は、その大まかな枠組み、人物関係を、高藤説話を元にして構成されているが、明石一族の繁栄を支える論理として利用されているのは山陰説話であり、二つの説話の要素を組み合わせてできたものだと言えよう。

なお、今まで考えた二つの説話が記されている『大鏡』・『今昔物語集』は、ともに『源氏物語』成立よりも時代が下っているので作者・紫式部がこの説話を知っていたかどうか問題になり得る。だが、式部は父為時が、高藤の兄弟利基の孫にあたり、式部の夫宣孝は高藤の玄孫である。また為時は、母が山陰の娘(定方室)と定方間に生まれており、系譜を辿れば、式部自身が高藤・山陰どちらの一族にも属していることとなる。彼女は一族の中興の祖である高藤・山陰について聞き及んでいたであろう。それならば明石物語において彼らの説話を取り入れることも自然ではないか。

また特に、鈴木宏昌氏が指摘しているように(15)、山陰一族が藤原道長一門と、母系としてつながり持っていることは重要な点である。山陰一族が執政者の外戚となることで家の再興を遂げたことを、式部は承知していただろうし、それゆえに、

山陰説話をモデルとしたと考えることができる。

四

最後に、明石物語と、物語が影響を受けたと考えられる二つの説話に、どちらも神の介在が見られることを確認しておきたい。明石一族は住吉神の導きで繁栄へと向かい、山陰説話にも一族の繁栄に吉田神の介在が確認できる。高藤説話は神の名前こそでてこないが、高藤と烈子が暴風雨を契機にして出会っており、烈子が一夜にして子を孕んだことから、十分神話的な要素を窺うことができる。

なぜ家の繁栄には神の存在が必要なのだろうか。それは、明石・高藤・山陰の家繁栄が、全て天皇家との関係によるものであるからだと推測される。

家再興の説話に関わる神には、后・天皇を輩出した一族を守護するとともに、天皇の正統性を保証する役目があるのではないか。

天皇に権威を付随するために神を利用するのは史実上にも例がみられる。平安期に創設された石清水や加茂の臨時祭がその例としては顕著であると思われる。加茂臨時祭は寛平元年に宇多帝の下で、石清水臨時祭は天慶五年に朱雀帝の治世で創設された祭である。

二つの臨時祭は、天皇の正統性の付与、もしくは治世の安定を目的として成立したと考えられる。

賀茂臨時祭は宇多天皇が即位した時、託宣を受けて冬祭として成立している。宇多天皇は、光孝天皇の第七皇子で、母は桓武天皇の皇子・仲野親王の娘・班子女王だが、一度は臣籍に下っている。元は即位するはずのない天皇であり、有力な后腹に産まれて立坊されるような通常の天皇より、その権威が劣ると考えられても仕方ないだろう。この状況を打破すべく創設され

たのが賀茂臨時祭と考えられ、この祭は、天皇家の守護神である賀茂神が託宣を下して祭を創設させたという形をとることによって、宇多天皇の権威を高める効果を狙ったと考えられる。

一方石清水臨時祭は『古事類苑』(16)によると、「此祭ハ朱雀天皇ノ朝ニ、平将門、藤原純友、亂ヲ作シ、時、天皇御祈願アリテ、祭祀ヲ行ハント誓ハセ給ヒ」、天慶五年に成立した祭である。つまり、平将門・藤原純友の乱平定に際してできた祭りである。朱雀天皇は、醍醐天皇第十一皇子で、母は藤原基経の娘・皇后穩子であり、先の宇多天皇とは違い、母親の家柄的にも天皇としての正統性には問題はない。だが、治世中に、祭のできる直接の原因になった承平・天慶の乱以外にも、富士山の噴火などの天変地異も起こるなど、その治世は安定していなかったといえる。

この天皇の権威の保証の為に神を移用するという発想から、明石一族の場合は住吉神が、天皇の権威を保証し、劣り腹の母から生まれた娘が立后することをも可能にしていると言える。高藤説話においても神の介在によって、身分の高くない烈子から生まれた胤子の皇子・醍醐が天皇となることの必然性を示唆しているのだろう。山陰の場合は吉田神が一条天皇の正統性を保証し、彼が山陰の一族から排出されたことを認めていると考えられる。

明石一族は特に、若菜下巻で住吉大社に、願ほどきのために参詣しており、その様子は、

上達部も、大臣二ところをおきてたてまつりては、みな仕うまつりたまふ。舞人は、衛府の次将どもの、容貌きよげに丈だち等しきかぎりを選らせたまふ。この選びに入らぬをば恥に愁へ嘆きたるすき者どもありけり。陪従も、石清水、賀茂の臨時の祭などに召す人々の、道々の

ことにすぐれたるかぎり召したりける。御神楽の方には、いと多く仕うまつれり。内裏、春宮、院の殿上人、方々に分かれて、心寄せ仕うまつる。数も知らず、いろいろに尽くしたる上達部の御馬、鞍、馬副、隨身、小舎人童、次々の舎人などまで、ととのへ飾りたる見物またなきさまなり(若菜下 一六九〜一七〇頁)

というように非常に盛大な参詣となっている。

この場面では、「石清水、賀茂の臨時の祭り」という表現が使われており、先に例を挙げた二つの臨時祭を意識してこの参詣の場面は用意され、明石一族の繁栄を保証していると言えるだろう。

おわりに

本章では、没落貴族の家再興には天皇に直接娘を入内させる高藤のパターンと、権力者と婚姻関係を結び、後に天皇家へ血を注ぎ込む山蔭のパターン、二つがあることを確認した。

明石物語は、その構想と人間関係を高藤説話に着想を得ており、山蔭の説話を元とすることで明石家再興を成し遂げた。作者の生きる時代には困難になっていた身分違いの結婚や、劣り腹の娘の立后・所生皇子の即位を可能にするために、自身一族にまつわる説話を元に、明石一族の家再興の物語を構想している。

また、天皇家と関わって一族が繁栄する、という形の物語においては神の介在を確認することができる。明石物語においては、住吉神が一族を導くことによって家の繁栄は約束されている。

注

(1) 日向一雅「桐壺院と桐壺更衣―親政の理想と「家」の遺志、そして「長恨」への主題―」『文芸研究』七五号・一九九六年二月

(2) 日向一雅「按察使大納言の遺言―明石一門の物語の始発―」『源氏物語の始発 桐壺巻論集』竹林舎・二〇〇六年

(3) 池上洵一「説話の虚構と虚構の説話―藤原高藤説話をめぐって―」『日本文学』三五(二)・一九八六年二月

(4) 『新編日本古典文学全集 大鏡「太政大臣道長」(三四二頁)』

(5) 高藤・山蔭説話の、「始祖神話的」類似性について、池上洵一氏が「家祖神話」という言葉を使って『講座平安文学論 究第四輯』「藤原山影説話の構造と伝流」風間書房(一九八七年)の中で説明している。

(6) 注3に同じ

(7) 『源氏物語』桐壺巻冒頭部「いづれの御時にか」についてはほぼ通説として、「延喜・天曆の御代」であるとされている。清水好子氏は、「源氏物語における準拠」(『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会・一九八〇年六月) 物語が延喜の治世を準拠としているのには、光源氏が一世源氏でなければならず、一世源氏は嵯峨天皇に始まり醍醐天皇で終わっており、主人公を一世源氏にするならばその準拠を醍醐朝に設定するのが、都合がよかったからであると述べている。

(8) 玉上琢彌『紫明抄・河海抄』角川書店(一九六八年六月)『河海抄』(四七四頁)

(9) 注1に同じ

(10) 中野幸一『花鳥余情 源氏物語和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘抄 口伝鈔』武蔵野書院・一九七八年

(1) 注2に同じ

(21) 注10に同じ

(31) 明石入道の名門意識については、阿部秋生氏がすでに、『源氏物語研究所説』上(東京大学出版会・一九五九年四月)に

において、「入道が播磨に下向したのは、一夜の夢といふものが、わが身を捨て、娘をかしづき、田舎の民となり果てることによつて、わが家の零落していく家格を回復できるといふ夢であつたからであり」というように入道が源氏との結婚に固執した理由として取り上げておられる。

(14) 三条西公条『源氏物語古注集成』第七卷『細流抄』桜楓社・一九八〇年

(15) 鈴木氏は『源氏物語と平安朝の信仰 新典社研究叢書一九〇』新典社(二〇〇八年二月)の中で、吉田社が官社に昇格したのは、兼家の氏長者就と同時期であること。山蔭の悲願を達成したのは吉田祭であり、兼家・道長などの氏長者や蚕糸・彰子がこれに奉仕したならば、一門が山蔭の血統を意識しないはずがないということを指摘している。

(16) 『古事類苑』神祇部六六(一三三五頁)

第三章 明石物語の構想

はじめに

『源氏物語』において、明石入道は光源氏の母・桐壺更衣の従兄弟にあたり、父親は大臣でありながら自身の代では播磨の受領へと身を落とした所謂没落貴族である。彼は自身の娘を都の貴顕に縁づかせることを計画して、須磨へと流離してきた光源氏と姻戚関係をなし、光源氏の繁栄に付随して家の再興を成し遂げた。このような明石一族再興の物語（以下、明石物語）の構想に対する研究は阿部秋生氏による総合的研究を始め（1）、光源氏との関係性に焦点を当てた鈴木日出男氏など多くの蓄積があり（2）、特に物語・伝承との関わりについては石川徹氏が詳しい（3）。また、日向一雅氏は明石の君の物語が『宇津保物語』俊蔭女を踏襲していると断じる（4）。稿者は、明石の君と同族、按察使大納言娘・桐壺更衣の婚姻形態に注目することで、史実において明石一族のような没落貴族が再興を遂げるための手段として、藤原高藤のように娘を天皇に入内させ、皇子の外戚となる高藤型と、藤原山蔭のように権力者と関係を結び、その繁栄に付随する形で浮上していく山蔭型が存在していることを指摘した（5）。

平安期、後世に説話化した二つの家再興物語の型が存在する中で、『源氏物語』は何故、高藤型ではなく山蔭型の家再興の物語として明石物語を構想したのか。作中「おほけなし」と評された、明石入道の描いた家繁栄への野望を、光源氏の人生史との関わり及び史実における貴族の婚姻事情を通して分析していく。

一

明石物語の始まりはいつであったのか。明石入道の初出は若紫巻での源氏の従者、良清の話の中であり、実際に登場するのは須磨巻を待つことになるが果たして明石一族の登場を持って明石物語は始まったと言えるだろうか。

明石入道は若紫巻での良清の言によれば「大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人」（若紫 二〇二頁）であり、明石一族は入道の父の代まで大臣家であったという。若菜上巻では光源氏によってかつての名門明石一族は「ものの違ひ目」（若菜上一二八頁）によって「かく末はなきなり」（若菜上一二八頁）と世間に噂されていたことが知らされる。この「ものの違ひ目」の指すものについては既に先行論で多く議論されており（6）、政変ではなからうかという所が一般的な解釈である。望月郁子氏は六条御息所の亡夫「前坊」について詳細な分析を加え、六条御息所の娘、齋宮女御の年立から、「前坊」は廃太子されていたことを指摘し、この事件が後の桐壺帝による桐壺更衣の寵愛や源氏による皇女達との交渉などに繋がりが、桐壺帝は皇統による政治支配を目指していたとの結論を出した（7）。助川幸逸郎氏はこの先帝から桐壺帝へと皇統が移行する要因となったと思われる政変に連座する形で没落したのが、六条大臣家や桐壺更衣の父大納言とその同族明石一族であったのではないかと述べている（8）。物語は直接的に過去の経緯を語ることはない。しかし、左大臣の娘葵上の出産時、彼女に取り憑いた物の怪が六条御息所自身、もしくは彼女の亡くなった父大臣であると噂されており、かつて前坊廃太子事件に関わって六条大臣家が没落し、桐壺朝下の左右大臣家が台頭したという歴史が示唆される。また、葵上や紫上・女三の宮を祟った六条御息所が、明石の君には祟っておらず、明石の君が「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり」（明石 二五七頁）と六条御息所と

似通った雰囲気を持っていると源氏に評されていることから、坂本和子氏が指摘するよう(9)、明石大臣家は桐壺朝下の右大臣四の君と左大臣の嫡男頭中将のような婚姻関係を六条大臣家と持っていたとも考えられる。明石入道の父大臣の兄弟である按察使大納言の一人息子が出家しており、大納言家に男子の後継者が存在していないのも政変の余波であろうか。いずれにせよ、六条大臣家と明石大臣・按察使大納言両家の政変による没落事件が、物語前史に起きたことが随所に示唆される。

明石物語に先行する家再興の物語として、按察使大納言家の物語がまず展開された。桐壺巻では既に死去し、伝聞のみでその存在を伝えられる桐壺更衣の父按察使大納言は、自身の死後必ず桐壺更衣を桐壺帝に入内させるよう遺言した人物である。桐壺帝には既に右大臣を父とする弘徽殿女御腹の第一皇子がいる上、父親不在で後ろ盾のない娘が入内するのは無謀な試みだが、その遺志は固く娘は更衣として入内、第二皇子を出産するほどの寵愛を得た。しかし、按察使大納言の思惑は桐壺巻で既に潰え、光源氏は王者と臣下の狭間を行き来する複雑な人生史を辿っていく。後発的に発信した明石物語の場合どうか。入道は登場に先んじて都を去り、明石に居を構えた。これは後に若菜上巻の入道の遺言によって、娘明石の君の誕生に際して受けた霊夢によるものであったことが明かされている。入道は、

みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、
月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、
山の下に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海
に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕
ぎゆくとなむ見はべし。(若菜上 一一三―一一四頁)

という、娘の産んだ女君が入内し、皇太子を出産して中宮となるといふ予言を信じた。入道には後継となる男子がない。こ

れは按察使大納言家も同じだが、では彼らは何を目的に娘を入内、もしくは貴顕と婚姻させたのか。日向氏は、明石・按察使大納言両家は元々源氏であったため、皇統に回帰する意図があったと考えているが(10)、助川氏はこれを否定し撰閲家がそうであったように、皇統譜に血を残すことで血の聖別を図ったとする(11)。明石一族が源氏であったとは考え難く(12)、明石大臣達が藤氏の一族であったことに異論は無い。しかし、彼らがあくまで皇統譜に血を残すことに拘ったのは、撰閲家的発想というより、消えゆく一族の血を皇統譜に刻みたいという、より切実な没落貴族の願いではないか。

その点において、『大鏡』における藤原山蔭の「我御ぞうにみかど・きさいの宮たち給ものならば」(三四二頁)という宣誓は、明石入道や按察使大納言の思惑と近いところにある。山蔭は女系子孫によって皇統譜にその血を注ぐことで説話化され史上に名を残した。男子の後継者が存在しない、つまりそのまま世に埋もれていくしかない明石・按察使一族にとって、失った名譽を回復し、その名を後世に留める唯一の手段は女系による血の継承のみであった。そして、若菜上巻の光源氏による「女子の方につけたれど、かくていと嗣なしといふべきにはあらぬも」(若菜上 一一八頁)という言葉によって彼らの悲願は肯定されていく。

明石物語は長らく表舞台に出てこなかった。若紫巻で良清が入道の噂話をした時、源氏には彼らと同族の認識はなく、その事実も明石巻で入道によって初めて明かされる。また、この時入道からの同族意識と、按察使大納言と同じく娘の将来に期待をかけて源氏との婚姻を足がかりに家門の名譽回復を望んでいることが確認されるが、依然源氏側には関心がなく、その悲願が按察使大納言家と同じく挫折するのか、達成されるのかを伺うことが出来ないまま物語は進行する。明石物語の展望が初めて読者の前に現れるのは、明石姫君の誕生する濛標巻であろう。

溍標卷には源氏の子ども達に関する予言、所謂「宿曜の勘申」が登場する。姫君誕生に至って初めて、明石の君の娘が中宮となることを確信した源氏は母子を都に迎え、后がねとして大切に養育するようになるが、この時読者には初めて須磨巻での「吾子の御宿縁」(須磨 二一〇頁)や、明石巻「これは生まれし時より頼むところなむはべる」(明石 二四五頁)という言が姫君の立后を狙ったものであったことが明かされる。

勘申の内容を一体いつ源氏が把握したのか物語は明らかにしないが、溍標巻以前にあらかじめ知り得た予言の内容を姫君誕生に際して再確認し、明石の君以外から娘が誕生することはないと確信を得たために明石母子の処遇を丁重なものにする事を決定したことは間違いない。すると明石物語は、勘申を源氏が確信することで初めて入道の思惑が実現される可能性が開かれてくる。裏を返せば、勘申がなければ明石母子は源氏にとってさしたる重要性を持つことはなく、一族の思惑も果たされることは無かったと言える。明石物語は源氏側からの要請を得て初めて成立する物語であった。

ところで入道の狙いが娘を源氏と婚姻させて子を入内、皇子を立太子させることであるならば、源氏は臣下である必要があるだろう。明石物語は、受領の娘が貴顕と婚姻し、彼らの娘を入内させることで夫の上昇に付随して一族の繁栄を獲得する。明石物語に先行した按察使大納言家の物語は娘を直接入内させ、皇子の立太子を目指したが、明石入道はあくまで権力者との婚姻によって主家の上昇に付随する方法を取るため、婚姻相手は臣下しかありえない。

源氏には成人までの間、立太子と臣籍降下、二つの道が存在した。苦悩の末桐壺帝は源氏を臣籍降下させたが、これは明石一族が悲願を叶える起点であり、同時に按察使大納言家の物語の終焉でもあった。源氏が立太子できなければ、按察使大納言の血筋は皇統譜に受け継がれない。結果的に明石物語は、源氏

の臣籍降下と同時に始まり、按察使大納言の物語をも内包することとなっていく。明石物語には、隠された問題として按察使大納言家の悲願でもあった名譽の回復を集約する。

以上、明石物語は源氏の臣籍降下によって初めて展望が開け、また、源氏側が明石母子を必要として初めて達成を約束される非常に不安定な物語であったことを確認した。そのため物語の初期から潜伏しながら、徐々に物語の進行に合わせてその姿を現し、過去を振り返ってその意味付けを行うという構造を取る。結果的にその全貌が明らかにされるのは姫君の出産に際した入道の手紙によってであり、その内容を確認した源氏が彼らの物語を肯定し、彼らの物語を支えた住吉へと参詣することで一応の結実を見た。物語の成就を認めるのが源氏であったことも、明石物語が源氏の臣下としての人生史に常に寄り添ったものであったからであると考えられる。従来、阿部氏を始め明石の君や明石姫君は源氏が準太上天皇、つまり王者へと限りなく近付いていく為の道程に力を貸してきたというのが一般的な見解であった(13)。しかし姫君を入内・立后させて後宮の独占支配を達成するという源氏の方針はむしろ撰関家的な行為であり、明石一族はその達成の為に源氏の臣籍降下を必要とし、対する源氏も執政権の獲得の為に彼らを要したと考えるならば、彼らはむしろ執政者、臣下としての源氏の人生史に深く関わっていると言える。

二二

前項では二つの家再興の物語同士の関係と、そのプロセスの違いを検討したが、何故按察使大納言の計画は失敗し、明石物語のみが達成され得たのか。

按察使大納言は、桐壺更衣を通じて皇子を立太子させ、血脈を皇統譜に残す方法を選んだ。これは「勸修寺説話」と同じプ

ロセスを踏んだ、按察使大納言家にとって起死回生をかけた方策である。

高藤の場合、跡継ぎとなる男子もおり、胤子が後に追贈とはいえ皇太后を得、実際国母となったことが按察使大納言家とは違うが、父親の死後に跡継ぎの男児もない状態で桐壺更衣が入内した背景には、高藤娘・胤子の事例が準拠とされていると考えてよいだろう。

物語の途中まで大納言の思惑は達成されるかのように見えた。それは、桐壺更衣や光源氏の処遇に現れている。光源氏誕生以前、桐壺帝は更衣寵愛するあまり片時も側を離さず、ともすれば軽々しいと思われるような扱いであった。それを皇子誕生後、

あながちに御前さらさずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは（桐壺 一九頁）

というように更衣の扱いを変化させたため、周囲は光源氏立場の可能性を噂している。

また、袴着の際には「御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くしていみじうさせたまふ。」（桐壺 二二頁）と、弘徽殿女御腹の第一皇子（後の朱雀帝）に劣らない儀式となっており、光源氏の扱いを第一皇子より軽くしないように桐壺帝が配慮したことが伺える。少なくとも袴着の頃までは、第一皇子の母弘徽殿女御が危険視するほどに光源氏立場の可能性が残されていたのであろう。

しかしながら母更衣は病没し、桐壺帝は遺された源氏の処遇に苦慮することとなり、倭相・高麗人に我が子の観相をさせる。このような状況にも第一皇子の祖父・右大臣は「いかなること

にか」（桐壺 四〇頁）と孫の立太子を危ぶむが、結果として桐壺帝は

今までこの君を親王にもなさせたまはりざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと思して、無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめることと思し定めて（桐壺 四〇～四一頁）

と、帝位につけるわけにはいかないが、さりとて身寄りのない無品親王として世を過ごさせるのは忍びないと判断し、臣籍に降下させる意思を固めることとなった。ここにおいて按察使大納言家の計画は頓挫したといえる。

こうして光源氏は臣下でありながら限りなく王座に近づいていく複雑な人生を歩んでいくが、後盾のない貴族の娘が生んだ皇子が立坊し天皇になるということが、あまりに現実離れしていたことが光源氏の人生を決定づけた要因としてあげられるだろう。

史実における立后・外戚事情を振り返ればそれは明らかである。

藤原北家は天皇と外戚関係を結び後宮政策に成功したことで、執政権を獲得していった。結果として醍醐帝の御代に藤原穩子が立后して以来、后は藤原北家の娘に限定されるようになり、そのほかの貴族は権力の中核から徐々に閉め出されるようになる。

もちろん皇后位は最初から北家が独占していたのではない。令制によると本来皇后は皇族、しかも内親王から立てられるものとされており⁽¹⁴⁾、醍醐朝までは少数の例外を除いて、それが守られていた。しかし穩子立后以降に『源氏物語』成立以前、内親王立后がなされた例は、冷泉朝の昌子内親王のみに限

られる。

また、聖武天皇以降の立后・立太子状況を一覧すれば、立后した後の父親はほぼ大臣等、高位の職位にある(15)。しかも、特に物語が準拠として設定していると指摘される宇多・醍醐朝以降には(16)、最終官職が大臣以下の者は全くおらず、高藤のように、後の父親が摂関でない例は異例である。

高藤にしても、後に内大臣にまで昇ることが出来たのが、醍醐帝即位の恩恵的な措置であり、実質的な政治的権力が彼に与えられていなかったことはいまでもない。そしてこの胤子の例は先述の通り、当時の立后・立太子事情からしても異例であり、醍醐帝が即位できたのは、彼が第一皇子であったことが主な要因だろう。醍醐帝の生母である胤子は立后することなくその死後贈皇太后となり、代わりに醍醐の准母として藤原基経女の藤原温子が皇太夫人となっていることから見て、醍醐天皇は温子の養子として立太子・即位することによる嫡子相続としての処理をされたと考えられる。

このような背景から、いくら叔父が大臣、父親が大納言であったとしても、娘の入内前に父大納言が死亡している桐壺更衣が入内すること自体物語成立当時にはそもそも考えがたい。まして右大臣の娘・弘徽殿女御の生んだ第一皇子を差し置き、更衣の生んだ皇子が立太子することなど不可能であるといってもよい。物語が宇多・醍醐朝を準拠とする以上、当時の立后・立太子事情からも離れている。ましてや物語成立当時、高藤でさえ既に過去の希有な事例であった中で、一条朝の後宮事情とあまりに隔絶した展開は自ずと除外されてしかるべきであろう。故に没落貴族の娘が天皇に入内し、皇子が即位するという物語は挫折せざるを得なかった。

こうして按察使大納言家の物語は失敗に終わったが、それは、没落貴族達にはどのような方法が残されていたのだろうか。明石一族は没落貴族の家再興におけるもう一つの道を見出し

た。明石一族の物語は、山陰流と同様に権力者との結びつきを経ることで上昇し、明石姫君を入内、立后させることで天皇家との関わり持つことに成功し、家の再興を成し遂げた物語である。

物語は最初、按察使大納言家に高藤型の家再興を試みたが、現実との乖離から劣り腹の皇子・光源氏の立坊を断念し、明石一族による山陰型の物語へと転換したと考えられる。

三

何故山陰型の家再興の論理は達成されうるのか。これは作者の生きた当時、山陰と同じように権力者と結びつくことで力を得た受領層が實際存在していたということ、また鈴木昌宏氏が指摘するように作者の主人・中宮彰子は山陰の血を引いており(17)、式部自身も山陰の血縁であったこと等が関わっていると考えられる。

『源氏物語』において明石の君は己が出自を卑下して「身のほど」を常々意識した忍従の人生を送り、また光源氏を筆頭とした彼女の周囲も二人の婚姻を釣り合わないものとして認識する。しかし本当に、貴顕と受領階層出身の娘との婚姻は全くあり得ないような話であったのだろうか。

池上洵一氏は、高藤の時代には身分差のある結婚は珍しくなかったが、時代が降るにつれて道綱母のように権力者と結ばれることは難しくなったと指摘する(18)。

高藤が生きた時代に即してみると、彼と弥益女との結婚はさほど不自然な組合わせではなかったからである。ここでは例証として高藤自身の母が西市正高田沙弥磨女春子、つまり正六位上相当官たる西市正を最終官職としたらしい官人の娘であったことを挙げるだけで十分だろう。

以来次第に深刻化していった貴族社会内部の階級分裂は、やがて彼等の結婚対象を狭い同一階層に閉じこめていく。道綱母が辛うじて体験した貴顕との結婚は次の世代の女性たちには夢でしかなく、さらには夢見ることも自体が無益ないたづらごとへと変化していったのである。

氏の指摘は妥当であり、実際撰関などの地位に就いた権力者の妻は、時代の流れとともに源氏や皇族、他の権力者にほぼ限定される。しかしそれは道長・頼通の時代の話であって、それ以前は受領階層の父親をもつ女性を妻に迎えることが全くの希有な事例であったとは言いがたいだろう。池上氏の指摘通り、道長より前の世代の妻達は道綱母のように貴顕との婚姻に成功した受領層も多少含まれていたのである。

史実における撰関・大臣等の妻の事例を考えてみる。史上、娘を天皇生母とする事で執政権を握ることに成功し、撰関もしくは大臣を世襲したのは物語成立以前においては藤原北家の他にはおらず、故に二代に渡る執政権の保持を目指した光源氏の姻戚関係のモデルは藤原北家のそれを下敷きとしていると考えて良いだろう。

藤原冬嗣以降の藤原北家において、撰関・もしくは大臣の妻となり、父親が受領層出身者の女性には、藤原美都子(藤原真作女・冬嗣妻)、藤原乙春(藤原総継・長良妻)、宮道烈子(宮道弥益女・高藤妻)、藤原盛子(藤原経邦女・師輔妻)、藤原時姫(藤原中正女・兼家妻)、高階貴子(高階成忠女・道隆妻)等がいる。内、藤原乙春の父は若くして没したものの、光孝天皇の外祖父の為、厳密に言えばこの例に漏れるが、それ以外は全て父親が受領層出身者で占められる。このうち美都子の娘順子、乙春娘の高子、烈子娘の胤子、盛子娘の安子・登子、明子、時姫娘の詮子・超子、貴子の娘定子が入内し順子・高子・胤子・安子・超子が天皇生母となった。また、息子についても美都子の長良

・良房・良相、乙春の基経、烈子の定方、盛子の伊尹・兼通・兼家、時姫の道隆・通兼・道長、貴子の伊周が大臣もしくは撰関に任じられた。

藤原北家主流であっても、その妻は道長・頼通時代になるまで受領階層の女性が存在したのである。もちろん、皇女を妻とした師輔や兼家などの人物はいるが、この結婚が父帝の承認の下行われたものでなかった私通であろうということを今井久代氏は指摘している(19)。そして今井氏はまた、藤原氏が源氏や皇族を妻にすることが出来たのは、彼らが権勢を握っていく中で徐々にその地位を落としていった皇族の受け皿となったからであると言う。家柄の良い妻を娶ることが常識という婚姻が増えたのには、そのような背景があったのだろう。道長にしても、正妻・源倫子の父である源雅信は二人の婚姻に否定的であったことが知られており、撰関家であっても源氏や、まして皇族を妻にすることは一般的ではなく、「男は妻がらなり」などと言われ皇族を妻に迎えることが可能になったのは、頼通以降のことではないか。もちろん、物語成立当時の道長や頼通は既に皇女などと姻戚関係を結び、彼らの子息もまた皇族筋や公任・行成・斉信等、より上位の貴族と婚姻する為に受領階層出身者の娘が執政者と直接夫とすることは困難になっていただろうが、つい一世代前までは実現可能な範囲の望みでもあった。

そのような貴顕と受領階級の娘の婚姻の中でも特に、『源氏物語』成立の直前の出来事である中正女の時姫と、高階成忠女の貴子の事例は、紫式部にとってかなり馴染みのある話であったと考えられる。『大鏡』に記される夕辻占で知られる時姫や、同じく『大鏡』において吉田神への宣誓が知られる時姫の祖父山蔭は先述の通り式部の遠縁であると同時に何よりも彼女の主人彰子・道長親子の祖先である。『大鏡』成立時には説話化していた時姫や山蔭の物語を式部も承知していたであろうし、何より鈴木氏の指摘するように当の道長・彰子も自らが山蔭の血

筋であることを意識していたならば、式部が山蔭の成功譚を下敷きに明石物語を創作したことも自然であろう。

四

式部にとって、もう一つ明石物語の構想のインスピレーションとなったのは、高階一族ではなからうか。主人彰子の従姉妹にして一条帝の寵愛を競う相手であった定子とその一族の事を、式部が知らぬはずはない。定子の生みの母、高階貴子の生家である高階一族は、恬子内親王と在原業平の密通から生まれた血筋と言われ何かにつけて有名であったようであるが、高階成忠はかなり明石入道に影響を与えているように思われる。入道と成忠の類似性については阿部秋生氏(20)の指摘の他、呼称や両者に共通する祈りという行為について述べた熊谷義隆氏の研究や(21)、入道の造型が『栄花物語』に与えた影響を詳細に分析した桜井宏徳氏の研究などが存在するが、物語成立前後の他の物語等に描かれた成忠と、明石入道の造型を問い直したい。

『栄花物語』には、貴子の父成忠は優れた才を持ちながらも、「むくつけき」人物であったと言われ、さして高貴な血筋とも言えない高階一族が、道隆と貴子の結婚によって厚遇されている事を世間が不満に思っていたということが以下のように描かれている。

北の方の御父主、二位になさせたまへれば、高二位とぞ世には言ふめる、年老いたる人の、才かぎりなきが、心ざまいとなべてならずむくつけくかしき人に思はれたり。北の方の一つ腹のは、さべき国々の守どもにただなしになさせたまへり。この人々のいたう世にあひて掟て仕うまつることをぞ、人やすからずもと、やむごとなか

らむ御仲らひを、心ゆかず申し思へり(さまさまのよろこび 一七五〜一七六頁)

また、『大鏡』では、積善寺の供養の日に成忠が道長よりも高い位置に着座したことについて、

今の北の方は、大和守高階成忠のぬしの御娘なり。後には高二位とこそいひはべりしか。さて積善寺の供養の日は、この入道殿の上にさぶらはれしは、いと面倒なりしわざかな。(内大臣道隆 二五五頁)

というような批判がなされている。

成忠は、世間からかなり奇異な存在として描かれ、加えて『栄花物語』には定子の出産、皇子の立太子などのために祈禱などを行う様子や、道長呪詛事件などが紹介されている。

一方、明石入道は、物語内において「ひがもの」と評される人物である。

若紫巻で良清は、大臣の息子でありながら都での栄達を諦め、官職を棄てて播磨の国司となった明石入道のことを「ひがもの」と称している。また明石巻においては、都へ帰る源氏においていかれる形となった明石の君を哀れに思う母尼君が、源氏と明石の君を無理に結婚させた入道のことを「ひがひがし」と評している。実の娘である明石の君にしても薄雲巻において父入道のことを「ひがもの」と称すなど、作中において明石入道が世間一般からはかけ離れた人物として認識されていたことが度々示される。

同じく作中で「ひがもの」として表現されているのは夕霧の師、大内記のみであり、こちらもかなり偏屈な人物として表現されているところを見ると、明石入道の世間における評判もかなり厳しいものだったと言えるだろう。

また、高階成忠と明石入道には、呼称面においての対応も見られる。

『源氏物語』では明石入道のことを度々「新発意」と呼び、『栄花物語』・『大鏡』では成忠にしばしばその呼び方が使われている。桜井氏も指摘するように、成忠に対して『栄花物語』では「新発意」の呼称を使用するが、『権記』や『大鏡』にも同じ呼称が現れており、成忠の呼称として知られていたと考えられる。『栄花物語』や『大鏡』は共に『源氏物語』成立以後の物語であるが、『栄花物語』の成忠が明石入道に影響を受けたと思われることや、呼称の問題を考えると、作者はかなり意識的に入道を成忠に寄せて造型しているのではないだろうか。出家の身でありながら家の繁栄の為に明石の君と光源氏の婚姻に腐心する明石入道から、道隆の繁栄の恩恵を受け、一族の繁栄の為に祈りを捧げる成忠を当時の読者が全く想起しなかったとは考えにくいだろう。

高階一族、特に成忠は、中宮定子の縁者として知られた存在であり、明石入道の偏屈な人物像には、十分成忠のイメージが喚起する効果があるだろう。成忠に限らず、明石家が母方に皇族の祖先をもっていることや、一族が恐らく政権闘争に破れて没落したことなども高階一族の影を思わせ、そう考えるならば明石の君がしばしば「唐めく」という語で評されていることも、内侍職にあり『栄花物語』や『大鏡』にもその漢才を言及された貴子のイメージが重なっているとも考えられる。そして高階一族のイメージが明石物語に付与されることで、明石物語もまた高階一族のように失敗に終わるのではないか、という想像をも掻き立てたのではないか。

彰子の女房として宮中に出仕した式部が、かつて道長のライバルであった中関白家や高階家の事について知らなかったはずもなく、また実際『紫式部日記』から、式部が『枕草子』を目にしていたことも明白である。式部にとって高階家の盛衰は、

明石一族の物語を構想する上で大いに影響を与えたと考えられる。

もちろん成忠や先に触れた山蔭に限らず、明石入道及び明石一族は、物語が執筆された少し前の時代までには確かに存在していた、藤原氏と婚姻関係を結んだ野心的な受領階層を想定して造型されたものであり、彼らの成功や失敗を内包しながら明石物語は展開されていく。

おわりに

本稿では、明石・按察使一族の家再興への道程の相違を、歴史上実際に存在した事例を踏まえて検討してきた。按察使一族の目指した高藤型の物語は、醍醐朝においても特異な事例であり、『源氏物語』内では既に後盾も強力な第一皇子が存在していた為に挫折することとなった。彼らの後を引き継いだ明石物語は、藤原山蔭や高階成忠など物語以前確かに存在した、多くの受領の事蹟を元に、野心的な受領層の再興を賭けた物語として展開されていく。そして明石一族は、光源氏との関わりの中で源氏側の要請によってその価値を見いだされ、無謀にも思われた物語を達成した。

最後に、明石物語が山蔭流の家再興物語を目指したもう一つの要因に触れておきたい。

藤原山蔭は式部の遠い先祖に当たり、何より主人中宮彰子の母系の先祖である。そして道長や彰子達自身が山蔭の血を意識していたことは山本信吉氏の指摘の如く、『大鏡』に残る「山蔭の宣誓」の通り、山蔭が願を掛けた吉田社は、以後藤原氏の氏長者の管理下に置かれ、吉田祭が一条帝の御代に公祭となり、藤原氏出身の后が吉田祭の饗饌を供したということからも明らかだろう(22)。

明石物語において、式部は主人一族の繁栄の歴史を描いたと

も言える。当の道長達自身も明石一族の再興が、山陰流が藤原北家との婚姻を経て繁栄したことを踏まえた展開であったことに気付かぬわけがなく、『源氏物語』とは道長や彰子、そして一条天皇にとって自分たちの血の歴史を確認する物語であったとも言えるだろう。

そのように考えた時、明石物語が住吉神の冥助を受けて成立したことも納得がいく。今昔物語集』巻二十九「亀報山陰中納言恩語」は、山陰の息子・如無が義母に海に落とされた際に如無を助け山陰に送り届けた亀が、実は自分がかつて山陰に助けられたと告げる物語である(23)。「長谷寺験記」ではこの話が長谷観音靈験譚として収録されているが、『今昔』においてはこの亀を住吉参詣の際に助けたとされ、本来住吉靈験譚であったと思わせる名残が伺える。『源氏物語』において、明石物語に住吉信仰が深く関わってくるのはこのためか。詮子や彰子、道長らも住吉参詣を行っており、少なからず山陰と住吉の関わりを了解していたであろう。物語世界に住吉神が導引されたのには、山陰の存在が大きく影響していると考えられる。

以上、明石物語の構想について検討してきた。明石物語は、没落貴族の再興への方策として、執政者との姻戚関係によって皇統譜に血筋を残すという方法を取った。それは、『源氏物語』が藤原高藤のように娘を天皇に縁付かせ、外戚となることがおおよそ不可能となった時代の物語であった反面、受領階層出身の娘が実際に貴顕を夫に持つことは比較的卑近な例が物語以前に多少存在していたことに起因する。

明石物語は野心的な受領層を踏まえ、直近の事例である高階成忠や藤原山陰をモデルに練り上げられていったのである。そしてまた、道長・彰子らの祖先山陰は、物語自体の骨格にも影響を及ぼし、住吉神を物語内に引き込む要因ともなったと考えられる。

注

- (1) 阿部秋生「明石の御方」『源氏物語方法序説』東京大学出版会・一九五九年
- (2) 鈴木日出男「明石の君と光源氏」『源氏物語虚構論』東京大学出版会・二〇〇三年
- (3) 石川徹『平安時代物語文学論』笠間書院・一九七九年
- (4) 日向一雅『源氏物語の主題―「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社・一九八三年
- (5) 拙稿「家再興の物語としての明石物語―藤原高藤・山陰説話との関連から」『国文学研究ノート』五七号・二〇一八年
- (6) 袴田光康「『源氏物語』と『日藏夢記』―延喜王墮地獄説話の再検討―」『中古文学』六九卷・二〇〇二年、神原勇介「女系繁栄譚としての明石一族物語―「もの」の違ひ目」の再検討を起点に―」『中古文学』一〇二卷・二〇一八年、坂本和子「光源氏の系譜」『國學院雑誌』七六卷・一九七五年、等
- (7) 望月郁子「「前坊」廢太子」『二松学舎大学人文論叢』六三号・一九九九年
- (8) 助川幸逸郎「源氏物語の「呪われた部分」―先帝王家と明石・桐壺一族をめぐって」『源氏物語のことばと身体』株式会社青蘭舎・二〇一〇年
- (9) 坂本和子「光源氏の系譜」『國學院雑誌』七六卷・一九七五年
- (10) 注4に同じ
- (11) 注8に同じ
- (12) 注8に同じ
- (13) 明石入道の父大臣は少女巻の源氏による、この官位が親を越えることが難しいという言に即せば、その父親もまた、おそらく大臣あっただろうと考えられる。とすると、明石入道は父が大臣、祖父も大臣ということになるが、史上二世世源氏が大臣に初めて就いたのは物語成立より後のことである。詳しく

は、拙稿「家再興の物語としての明石物語―藤原高藤・山陰説話との関連から」（『国文学研究ノート』五七号・二〇一八年）を参照されたい。

(13) 注一の阿部秋生氏論文に同じ。他に、四方四季の空間として形成された六条院に龍女のイメージを付与された明石の君を取り込むことで源氏に海龍王的性格が付与されたとする東原伸明氏の論（「明石の君―その転換点・二条東院から六条院へ―」『源氏物語講座 物語を織りなす人々』勉誠社・一九九一年）や、八十嶋祭における乳母の役割と明石の君の物語における役割を比較し、姫君を通じて光源氏の潜在王権に貢献したとする竹田誠子氏の論（「住吉詣における明石君登場の意義」『中古文学』四九号・一九九二年）等がある。

(14) 『国史大事典』によると、大宝令制では、天皇の妻室には嫡妻の皇后のほか、妃二員・夫人三員・嬪四員を置くとし、妃以下の出自を定めたが、皇后の出自については特に規定していない。しかし妃を四品以上の内親王とする規定より勘案すると、皇后も内親王より選定されるのを原則としたということである。

(15) 福長進氏は「『栄花物語』に見える立后条件」（『むらさき』四九号・二〇一二年一二月）に、教通女の生子の立后が叶わなかったことに対する「一の人の御女ならぬ人の、御子おはしまさぬがならせたまふ例はまたなきこと」（『日本古典文学全集 三三 栄花物語』「根あはせ」三三三頁～三三四頁）という記述から藤氏の女性の立后条件は「撰関の娘であること」、「皇子を生んでいること」のいずれかを満たすことであつたと指摘する。

(16) 『源氏物語』桐壺巻冒頭部「いづれの御時にか」についてこれまで多くの注釈書や先行研究が指摘してきたが、現在ではほぼ通説として、「延喜・天曆の御代」であるとされている。清水好子氏は、「源氏物語における準拠」（『源氏物語の文体

と方法』東京大学出版会・一九八〇年六月）物語が延喜の治世を準拠としているのには、光源氏が一世源氏でなければならず、一世源氏は嵯峨天皇に始まり醍醐天皇で終わっており、主人公を一世源氏にするならばその準拠を醍醐朝に設定するのが、都合がよかったからであると述べる。

(17) 鈴木昌宏氏は『源氏物語と平安朝の信仰 新典社研究叢書一九〇』新典社（二〇〇八年二月）の中で、吉田社が官社に昇格したのは、兼家の氏長者就と同時期であること。山陰の悲願を達成したのが吉田祭であり、兼家・道長などの氏長者や詮子・彰子がこれに奉仕したならば、一門が山陰の血統を意識しないはずがないことを指摘する。

(18) 池上洵一「説話の虚構と虚構の説話―藤原高藤説話をめぐって」『日本文学』・三五（二）・一九八六年

(19) 今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」『むらさき』二六・一九八九年七月

(20) 注1に同じ

(21) 熊谷義隆「明石母子離別を招いた明石入道の風聞―新発意入道への恐れ―」『論叢源氏物語二 歴史との往還』新典社、二〇〇二年

(22) 山本信吉『撰関政治史論考』吉川弘文館・二〇〇三年

(32) 山陰と亀の話は『今昔物語集』以外にも、『長谷寺験記』、『三国伝記』、『沙石集』等多くの説話集に納められている。当然異伝も多く、亀を助けた人物や、海に突き落とされた人物などのバリエーションも一通りではない。しかし、現在確認できているのは『今昔物語集』が最も古く、記述もかなり古態をとどめているはずである。『長谷寺験記』などの記述では、『今昔』の住吉靈験譚的な要素が長谷観音靈験譚へと置き換わっているものの、本来は住吉靈験譚として広まった話ではないかと考えられる。

第四章 女君達の物語

― 明石の君と紫上を中心にして ―

はじめに

『源氏物語』において、明石一族の再興への過程と、光源氏・夕霧親子による源氏二代にわたる繁栄の物語は、相互に補完し合いながら第一部世界で展開されたが、明石一族は若菜上巻での明石姫君の皇子出産、若菜下巻での住吉参詣などの後は、急速にその存在が希薄になり、第三部世界においてはわずかにその繁栄を知るのみとなる。

また、二世源氏繁栄の物語も、藤裏葉巻で光源氏が準太上天皇となったのを境に、徐々に背景化していき、夕霧繁栄の物語は表面化してこなくなる。

明石姫君の皇子出産以降、明石一族は若菜下巻で、住吉参詣においてのみその存在感を強調されている。

女御殿、対の上は、一つに奉りたり。次の御車には、明石の御方、尼君忍びて乗りたまへり。女御の御乳母、心知りにて乗りたり。方々の副車、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束ありさま言へばさらなり。(若菜下巻 一七〇頁)

住吉参詣では、明石の君・明石尼君母子が光源氏の願ほごきに同行することになる。源氏による参詣は華々しく行われ、特に明石尼君の栄光は「幸ひ人」との評判を世間から受けた。

また、匂兵部卿宮巻においては、夕霧が右大臣となり、今上帝と、中宮になった明石姫君の間に出来た東宮・二の宮に娘を

入内させ、三男匂宮とも同じく娘を婚姻させるであろうと世間は噂している。加えて、明石中宮の皇子達は長男が立太子し、二の宮も次期皇太子として世間に重んじられ、三男である匂宮にも立坊の可能性が示唆される。そして、明石の君は夕霧から、「六条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にののしりし玉の台も、ただ一人の末の御ためなりけりと見えて(匂兵部卿宮二〇頁)」、とまで言われるように、六条院に留まり明石中宮の皇子・皇女達の世話をしているのである。第三部世界において、夕霧、そして明石中宮の繁栄は揺るぎないものとして描かれている。

しかし、第三部世界においては、このような夕霧を主役に据えた二世源氏の繁栄や、明石一族の繁栄は、物語の大きなテーマとしては取り扱われているようには見えない。二部以降において、源氏親子や明石一族に纏わる、所謂物語内での政治的動きは明らかに希薄化していく。

このように二世源氏の繁栄や、明石一族繁栄の物語が背景化した要因には、第三部世界において、桐壺朝における左右大臣の闘争や、冷泉朝の光源氏・頭中将の闘争などのように、夕霧・明石中宮という光源氏の栄華を受け継いだ子ども達の対抗勢力となるべき勢力が出現しえなかった事が一因としてはあげられるだろう。

変わって二部以降の世界で表出してきたのは、女君達の人生の模索の物語であった。特に顕著なものとしては、女三宮降嫁問題に端を発する紫上の苦悩であり、第三部世界で展開される八の宮の娘達の物語である。

本章においては、第一部、二部世界を牽引した二人の女君、紫上と明石の君の物語について、光源氏との関係性を主として検討を進めていきたい。彼女たちは光源氏の栄華に欠かせない女性として物語世界において常に源氏と様々な交際を持ったが、その造形や人生がどのように対比され、女君の人生を物語

がどのように描いたのか考えてゆく。

一

『源氏物語』には、多様な身分・境遇を有した女君が登場する。彼女達は、源氏やその他の男君達との関わりの中で様々な人生を送るが、物語はなぜこのように多様な女君の人生を描いたのか。明石の君・紫上兩名の人物造形とその人生について検討する前に、まず物語において何故、多くの女君達が悩み、人生を模索する姿が描かれたのかについてを考えたい。

一体、物語とは当時の読者達にとって、どのような存在であり得ただろう。特に、女性読者の物語享受の有り様に焦点を当ててみるならば、『源氏物語』内においては、例えば蜚蜚の玉鬘や、その後源氏と紫上の間で交わされた、姫君教育の為の物語の選定等は注目に値する。

蜚蜚の「物語論」は、数多の先行研究の蓄積が存在しており、その解釈も多様である。物語論が玉鬘を懐柔しようとする源氏との会話において展開されている以上、これが作者の物語観を示す、自立的なものであるかどうかには慎重な判断が必要であるという分析にも、勿論注意を払う必要がある(1)。しかし、玉鬘との会話に引き続き、明石姫君の教育に端を発する紫上との間に交わされる物語の功罪論等を考えるにつけても、やはり「物語論」は、作者の物語に対する思想や、当時一般的に物語がどのように享受されていたかを考える一助となるのではあるまいか。

部屋に物語を取り散らして源氏から、「暑かはしき五月雨の、髪は乱るるもし知らで書きたまふよ」(蜚蜚 二二二頁)と言われるほど、他の女性達以上に物語へと没頭する玉鬘は住吉の姫君の数奇な運命に自身の経験を重ねていた。

また、玉鬘との対話に続く、紫上との会話で源氏は、明石姫君に読ませる物語に注意するように紫上に指示し、他にも、養母である紫上の為、姫君に継子いじめの物語を読ませないようにさせようという配慮を見せる。紫上との会話では、物語中の女性達の人物評に絡めて理想的な女君についての議論も交わされておられ、女君の教育に対する物語の影響の大きさを伺うことが出来る。『源氏物語』においては、物語は女性が自身の人生を仮託し、世の中を学ぶ一つの手段であると言える。

そして、『更級日記』においての孝標女も、叔母から物語をもらって、「後の位も何にかはせむ」と言うほどに感激し、書物の世界に耽溺する様が記されている。彼女は自身を、夕顔や浮舟に投影して『源氏物語』を楽しんだ。彼女の興味は自身の身分と隔たりのある女君よりも、同じ受領階級出身者の女性達の方に向けられていたらしい。物語を自身に引きつけて享受するからには、身分や置かれた環境も近い登場人物を選んで読むことが適当なのであろう。

このように、女性達の物語享受の一形態として、物語を通じて世界を学び、自身の人生のロールモデルを模索するような読み方があったと考えられる。陣野英則氏の指摘通り、物語の享受者は多様であり、従ってその享受のされ方も一通りに絞ることは出来ない(2)。

しかし、少なくとも孝標女や物語内における玉鬘のように物語を自身の人生に照らし合わせるような読みや、紫上や源氏の持つ認識のように女君が己のロールモデルを学ぶ一教材としての享受があったことは確認しうる。

そして、物語論に触れ、姫君教育における物語の影響を描いている作者式部が、自身の物語が他の物語同様、そのように読まれる事を想定しなかったとは考えがたい。陣野氏が述べるように、『紫式部日記』内で確認出来る『源氏物語』の享受者だけでなくその階層は様々である。式部が物語を書くに当たって、

読者の享受のあり方に応えて物語には多様な女君が登場し、その生き方も様々に描かれたのであろう。

ところで、第二部では、光源氏の人生史と密接に関わり続けた二人の女君が、相次いで自身の人生を振り返る。明石の君は姫君の皇子出産に際した父入道の遺言を巡る源氏との会話の中で、そして紫上は女三宮降嫁に端を発する源氏との心の乖離、柏木の未亡人朱雀帝女二宮の苦悩を通じて、女の生き辛さを吐露していく。

また、明石の君に続いて、朧月夜の出家、女三宮の苦悩と出家、秋好中宮の出家願望、落葉宮の出家願望というように、第二部世界終盤では、女君の苦悩とそれに端を発する出家願望が表出してくる。そして、彼女たちを締めくくる形で紫上の述懐と死が描かれ、第三部へと物語は続いていく。

勿論、女君達の苦悩の物語は突然表れたわけではない。桐壺更衣を始め、六条御息所や彼女の苦境を目にして源氏を拒む朝顔齋院、身分の違いから源氏を拒み通す空蟬など、物語は随所で婚姻や恋愛における女君の葛藤を描いてきた。この意味では、女君達の人生の模索というテーマは、早くから物語内部に存在していたものが、源氏夕霧親子繁栄の物語や、明石一族浮上の物語に変わって主だったテーマとして表出してきたのだといえるだろう。

源氏が準太上天皇となって、息子夕霧の昇進に道筋をつけ、明石姫君の出産によって更に源氏一族の基盤を固めた。藤裏巻巻で源氏の繁栄が極まり、若菜上巻で明石一族の悲願の達成を見た物語は、一転してその栄華の影で苦渋を強いられた女達の物語を描いてゆくこととなった。二部以降における問題の転換は、物語が、女性が自身を照射し享受する物であるという認識を引き受けた式部の意識的転換であるといえよう。一部世界を取り巻く政治的問題が片付いた段階で、女君の苦悩の物語が次々と表出してくるのには、源氏その他権力者たる貴族男性社会

の裏で犠牲を払わざるを得なかった女君達の物語を描く、という物語構成を意図していたのではあるまいか。

次章では、第一部、二部の女主人公とも言える紫上と明石の君の人生が光源氏と関わることでどのように影響を受け、源氏を巡る三者の関係がどのようなものであったのかを検討し、物語における女君、特に貴顕と婚姻することで所謂「幸ひ人」と言われた女君を取り巻く環境を照射してみたい。

二

明石の君と紫上は共に、光源氏の愛した女性として登場し、第一部から二部にかけてこの二人の女性は光源氏を巡って物語の中心に存在し続けている。

この二人の女君はともに、「幸ひ人」と称されるが、女君達は人生において数々の苦悩を味わい、世間からみた幸運と、女君個人の内面とには、大きな乖離がある。世間から「人笑へ」の対象になることが、平安貴族社会において忌避されるべき事項であることは既に鈴木日出男氏等が指摘する通りであり⁽³⁾、思わぬ幸運を手にした「幸ひ人」の人生は、殊に「人笑へ」の危機と隣り合わせでもあった⁽⁴⁾。

明石の君は分不相応な野望に人生を賭けた父親の意思の下、受領階層でありながら貴顕と結婚し、繁栄を迎えるという荒唐無稽な筋書きの物語を、「神」の冥助によって成し遂げた人物であるが、その人生は忍従と卑下の繰り返しであり、決して手放して幸福な女君としての造形はされていない。

一方、北山で養育され、祖母尼君の死後、父親に引き取られる筈であった紫上は、父宮野正妻から疎まれ、典型的な「継子いじめ」の物語となっていたところを貴公子・光源氏によって救い出され、本来であれば幸福な未来が待っている女君であったはずである。

しかし、紫上はその人生を源氏と共にすることによって数々の苦悩を背負う事となり、彼女もまた幸福な女君の造形とは言いがたい。

共に「幸ひ人」と呼ばれながらも苦悩する二人の女君は、その社会的身分や光との関係において対照的に造形され、この二人を比較することによって女性を取り巻く環境が見えてくるだろう。

具体的には、「家」・「結婚」・「子」において両者は対照的な造形をされていると考えられ、以下この三点を軸に検討を進めていく。

(一) 家の問題

二人の女性は、社会的身分において大きく隔たっているが、その人生が「家」に束縛を受けているかどうかにも違いがある。

明石の君は、受領階級の出身の娘であるが、父・明石入道の無謀に等しい悲願よって、その人生を家の再興に捧げた女性である。父入道は娘が生まれる以前から彼女を貴顕と結婚させ、皇統譜へと血を注ぐことよって没落した家の名誉を回復しようと考えていた⁽⁵⁾。入道は、娘や妻の心配をよそに源氏に近づき、婚姻関係を成立させた為、娘である明石の君は生涯の意思に常に束縛を受け、自然光源氏とも結果的に明石一族として関係していく。最終的に若菜上巻の入道の遺言によって父の目論見を知った明石の君はこの遺言を娘・明石中宮へと伝え、明石一族としての連帯が再度確認される。

明石の君は一族再興の為に奉仕するため、源氏と人生を共にするが、彼女と源氏との間に横たわる身分差は、常に苦しみ的一种となった。明石の君が他の妻妾達、特に紫上に気兼ねし、六条院においても自制して生きなければならなかったのは、偏に一族の為であり、彼女の意思はそこにはない。源氏からの愛も薄く、常に人より下に置かれることに耐えたのは全て父の意思

に導かれた故の行動であり、我が娘の玉疵とならぬために紫上に娘を差しだす選択まで行った。明石の君の人生は彼女個人のものとは言えず、常に家の意思に規制されたものであったといわざるを得ない。

対照的に、家の束縛を受けず、常に個として光源氏との関係を取り結ぶこととなったのが紫上である。紫上は、父・式部卿宮に認知されず、祖母に養育される子どもとして物語に登場し、源氏の保護を受けることによってその人生が始まった女君と言える。

祖母尼君の死後、光が紫上を父親の承認無しに自邸へと連れ帰り、養育、結婚した事は、彼女の苦難の始まりでもあったが、ともかくも紫上は家と引き離された。紫上の人生に「家」の問題が関わってくることはほぼ無いと言っても良い。

初夜の後、紫上は父親王にその存在を知らされ、一時は「父親王も思ふさまに聞こえかはしたまふ」(賢木 一〇三頁)と親しく交際を行っていたが、源氏の須磨退去に際して式部卿宮は右大臣方の怒りを恐れ、疎遠となった。この式部卿宮の対応は源氏にかなりの禍根を残した。濬標巻では政界復帰を果たし、順風満帆の源氏が、かつての仕打ちの為に式部卿宮にのみ冷淡な態度をとっている事が明かされている。

兵部卿の親王、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを大臣はうきものに思しおきて、昔のやうにも睦びきこえたまはず。なべての世にはあまねくめでたき御心なれど、この御あたりは、なかなか情なきふしもうちまぜたまふを、入道の宮は、いとほしう本意なきことに見たてまつりたまへり(濬標 三〇一頁)

このような源氏の態度は長年続き、結局態度が軟化したのは、式部卿宮の五十賀になってからであった。少女巻で行われた五十賀に際して、式部卿宮夫婦が、次のように述懐している。

かくあまたかかづらひたまへる人々多かる中に、とり分きたる御思ひすぐれて、世に心にくくめでたきことに、思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ、わが家まではにほひ来ねど、面目に思すに、またかくこの世にあまるまで、響かし営みたまふは、おぼえぬ齡の末の栄えにもあるべきかなと喜びたまふを、北の方は心ゆかずものしとのみ思したり。女御の御まじらひのほどなどにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし。(少女 七七〜七八頁)(傍線は稿者による)

自らが招いた事ではあるが、式部卿宮は源氏の寵愛を一身に受ける紫上の父親でありながら、彼女の親として源氏達から何の恩恵も被り得なかった。紫上の継母である北の方は、自身の娘である王女御の入内時にも源氏が手を差し伸べなかったことを恨んでおり、源氏がいかに式部卿宮家を冷遇していたか察されよう。

このように徹底して家から切り離され、光の下で養育、成長してからは妻として処遇された紫上と源氏との関係は、家の規制を受けない個としての関係を基盤に置いていた。

他方、明石の君は個としての幸せ、つまり光源氏との愛情関係を諦め、愛娘すら手放し、家の繁栄を第一に考える、忍従・卑下の人生を送った。両者の源氏との関係性は、極めて対照的に構築されている。

(二) 子の問題

平安期の女性の進退にとって、子どもを出産できたか否かが

重要であったことは明白である。

物語内では、明石の君のみに娘一人とはいえず子が生まれ、紫上は生涯子どもを得ないままであったが、代わりに紫上は明石姫君の養母となった。明石の君は実母でありながら我が子と引き裂かれ、入内の際も紫上が常に付き添うことが出来ない為に、後見役として姫君に同行することを許されただけであった。

かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、常にながながしうはえ添ひさぶらひたまはじ、かかるついでに、かの御後見をや添へまし、と思す。(藤裏葉 四四九頁)

実母に代わって姫君の母としての榮譽を得たのは紫上である。入内する姫君に付き添った紫上は、退出の際には明石姫君に劣らぬ扱いを受け、「手車」まで許されることとなる。明石の君は自身の身を振り返り、改めて紫上との隔たりを感じることもなかった。

出でたまふ儀式のいよそほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身のほどなり。(藤裏葉卷 四五 一頁)

明石の君と紫上の関係は、姫君入内以降もその社会的立場を変えることなく続いていく。しかし、紫上が姫君の母親として常に尊重され死んでいった一方、明石の君は実母として表に出ることを諦める代わりに、明石姫君の生んだ皇子達の後見としての役割を担い続けていき、結果的に一族の繁栄をもたらすことにはなった(6)。

子の問題は、家の問題と切り離すことが出来ない関係にあり、明石の君は子どもを産みながらも実母としての立場を諦めるこ

とで一族の繁栄を達成し、子どもを産めなかった紫上は、彼女自身の人生においては榮譽を得るが、存続していく家は存在しない。

(三)結婚の問題

明石の君と紫上の婚姻までの手続きには大きな隔たりがある。

明石の君の父、明石入道は光源氏との明らかな身分差によって、明石の君がただの召人として扱われることのないよう、源氏に縁付させる際には不興を買いながらも、あくまで源氏が明石の君を訪うという正式な結婚の形を遵守させた。

「とかく紛らはして、こち参らせよ」とのたまひて、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを、正身はたさらかに思ひ立つべくもあらず。いと口惜しき際の田舎人こそ、仮に下りたる人のうちとけ言につきて、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ、(後略)(明石 二五三頁)

当初、明石の君を軽んじていた源氏は、自ら赴くことなど考えず、彼女を通わせるよう持ちかけるが、明石の君自身の矜持と父の尽力によって、「こよなうも人めきたるかな(明石卷二五六頁)」とまで思いつつも関係を持つことになる。

結婚後も、明石の君は京に来るようにと呼びかける源氏に対して、母尼君・娘の姫君と共に大堰に居を構え、源氏を大堰まで通わせることによって関係を維持し、彼から軽々しい処遇を受けるとのこないよう常に慎重に身を処していた(7)。

結果として、娘を紫上に差し出してからも明石の君の立場は姫君の生母として軽くならないように常に光源氏が気をつけていかざるをえないようになる。それはもちろん、漣標巻における

る「宿曜の勘申」を受けた光源氏の、明石姫君の将来に対する配慮でもあるが、ともかくも、六条院入りなどに際しても明石の君は決して他の女君と劣らぬ扱いを受けるように考慮された。

大堰の御方は、かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人はいつとなく紛らはさむと思して、神無月になん渡りたまひける。御しつらひ、事のありさま劣らずして、渡したてまつりたまふ。姫君の御ためを思せば、おほかたの作法も、けちめこよなからず、いともものしくもてなさせたまへり。(少女 八三頁)

源氏の他の妻妾達への遠慮から時期をずらして六条院入りした明石の君ではあったが、姫君の実母である故に源氏は丁重に扱っている。明石の君が后がねである唯一の娘の実母であったという事が直接的な理由ではあるが、前提として明石の君が源氏が粗略にできない正式な妻の一人になれたことが、彼女の立場を確立しているとも言えよう。正式に源氏と婚姻の手順を踏んだ明石の君は、その危うい地位を制度によって補完し、娘の出産を経て着実に六条院世界で生活する基盤を固めていくことに成功した。

これに対して、紫上は正当な手順を踏めなかったが故に苦難を抱え込むことになった女君と言っても良いだろう。

北山で祖母に養育され、その祖母亡き後光源氏に略奪されるような形で二条院で庇護された紫上は、通常の結婚とは違い、父親の承認無く裳着の前に初夜を迎えることとなった。

源氏はもちろん、初夜の後、「御皿どもなど、何時の間にかし出でけむ、華足いときよらにして、餅のさまもことさらび、いとをかしうととのへたり。(葵卷 七四頁)」というように三日夜の餅を執り行ったり、

この姫君を、今まで世人もその人とも知りきこえぬものげなきやうなり、父宮に知らせてきこえてむ、と思ほしなりて、御裳着のこと、人にあまねくはのたまはねど、なべてならぬさまに思しまうくる御用意など、いとありがたけれど、(後略)(葵 七六頁)

という風に、裳着の算段などによって紫上との婚姻を正式なものとしようとするが、父宮の承認を経ないまま略奪婚的な形になったしまった紫上は、結婚において大きな欠陥を抱えることになる。

大津直子氏は正式な婚儀を経ず社会的認知も伴わない女君が正妻になった先例の物語として、『落窪物語』をあげる(8)。同じ継子虐めの物語の系譜として先に成立した『落窪物語』の女主人公は、紫上と同じく社会的認知を経る前に少将に引き取られたが、少将の正妻となった。大津氏は葵上と源氏の関係において、葵上の立場を揺るがす存在としての紫上の存在を指摘しているが、『落窪物語』と同じような幸福な婚姻をしたかに見えた紫上が、現実問題としてその後の人生で負わざるを得なかった苦悩にこそ注目すべきではないだろうか。紫上は式部卿宮の正妻腹の子どもではない。故に、父に引き取られ継母からの冷遇を受けることなく育ったことはある側面では幸運だったかもしれない。しかし、継母からの虐めを回避し、正式な手続きを踏まず源氏と結ばれた紫上が果たして先行する継子虐めの物語の主人公達のように幸せになれるのかどうか。『源氏物語』は継子虐めの物語のその後を描いている。

実際、婚姻の失敗が、紫上を曖昧な立場に追い込んだ。彼女は結婚生活に降りかかってきた朝顔齋院との結婚話や、女三宮降嫁問題において大きな不安を覚え、最終的には病を得て死に至る。

若菜上巻で初めて女三宮と対面する紫上は、それまでの源氏との関係から生ずる矜持と、自身の生い立ちから来るその立場の不安定さという相反する感情に苦悩し、以下のように描かれている。

対には、かく出で立ちなどしたまふものから、我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつづけられて、うちながめたまふ。(若菜上巻 八八頁)

父宮に認知されず、結婚に際しても正式な形を取り得なかった紫上は、しばしばその立場の曖昧さから生じる問題に直面せざるを得なかったのである。

以上のように家、子、婚姻という要素から二人の人生を考えた。三つの要素は不可分に関わり合い、女君の人生を社会的・政治的に規制している。紫上と明石の君は、源氏を挟んで対照的な人生を歩んでいる。そして彼女たちは、そのどちらもが源氏の繁栄に大きく貢献し、互いを補完し合うよう造形されているように見える。

一方で、彼女たちは身分の差はあるが互いに皇族の血を引いており、紫上は北山、明石の君は明石という京の周縁の地で見いだされた女君でもある。対極の造形をされているようにも見える女君達だが、背景には同じような共通点を抱えている事も注目すべきであろう。

二部世界までを牽引する二人の女主人公の人生を、婚姻・子、そして家との関わりにおいて検討してきたが、二人は、第二部の終盤にいたり、それぞれその人生を振り返る。源氏との生活において二人が何を思い、どのような結末を得たのか確認したい。

明石の君は、姫君の皇子出産に際して明かされた父入道の遺言を源氏と明石姫君に見せた。この時明かされた入道の計画を源氏は追認し、明石一族の思惑は一応の達成を見るが、源氏は姫君に対し、自身のルーツを知ったとしても、養母紫上への敬意を忘れてはならないことを訓戒する。重ねて明石の君に対しても紫上を尊重し、へりくだった態度で接するようにと伝える源氏の言葉を聞き、彼女は自身の今までの人生を「よくこそ卑下しにけれ」（若菜上 一三二頁）と改めて振り返り肯定する。そして、源氏が紫上を寵愛し、身分上は紫上に勝る女三宮への愛情が薄いことに同情しつつ、「やむごとなきだに思すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし」（若菜上 一三二頁）と、高貴な身分の女でさえ思わぬようにはいかない男女の仲を、低い身分の自分では言うまでもないという思いを抱いた。明石の君は、他の源氏の妻妾と並ぶと自身が劣った身分であることを常に強烈に意識し、そのために我が娘の将来を思って紫上に預け、辛苦に耐えて生きた。この明石の君の述懐は、忍従を貫いた我が身への肯定であり、彼女が一族の繁栄の為に様々な物を犠牲にしてきた証左でもある。彼女の払った犠牲の中には、父入道、我が子との別離は勿論、源氏からの愛情も含まれている。身分の劣る女君として明石の君は、娘の為、一族の為に源氏からの

愛を諦め、その選択が正しかったことを若菜巻において確認した。しかし、「今は、恨めしきふしもなし」という生き方への肯定は、その背後に多くの「恨めしきふし」が存在したことの証でもある。

他方、紫上は周囲から、源氏の愛を一身に受ける女君だと認識されるが、源氏の一歩近くで生きる故に彼の浮沈に合わせて自らも多くの苦悩を抱え、源氏の好色心にも振り回された。須磨流離時、京で一人寂しく源氏を待つ彼女に対して、源氏は明石の君と関係し、明石の君は紫上が望んでも得られなかった子を成した。須磨から帰還すると今度は源氏と朝顔齋院の婚姻が噂され、同じ王女という身分でありながら世間的な名声も高い朝顔齋院と比べ、不安定な己の立場を危ぶむ。齋院との婚姻は未遂に終わるが、源氏四十の年、朱雀院鍾愛の皇女との婚姻という危機を迎え、紫上と源氏との間の齟齬は決定的となっていく。内親王降嫁という事態に際して、内心の動揺を隠しながら対処しようとする紫上に源氏の愛情は益々募るが、紫上は源氏の愛の頼りなさに苦悶する。源氏の間からは、彼女の懊悩はいじらしく映るが、降嫁の相談を受けた時には、己を憎む継母が「いかにいちじるく思ひあはせたまはむ」（若菜上 五四頁）と悩み、三日の夜には他の妻妾や女房達の目を気にして殊更平静を装う紫上は、常に「人笑へ」にならぬよう振る舞い、感情を偏りに押し隠し続けた。しかし、情動を抑え続けた末、紫上は病へと至る。発病の直前、紫上は女房達に物語を聞かせながら、物語の女君達はどうのような苦難があろうとも皆、最後には頼るべき男を見つけたのに、自分はどこまでも安定しない身の上であることを嘆いている。続けて、

げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世ありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらむ、あぢきなくもあるか

というように、自らが幸運に恵まれていたことは認めながらも、その人生において耐えがたく苦しいものがあつたという。

このように人生を振り返る紫上は、柏木の未亡人、朱雀帝女二宮の苦境を耳にして、「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」(夕霧 四五六頁)と、女の一生に思いを馳せる。彼女の思考は女二宮ばかりでなく、「女」という存在の生き辛さを見つめ、どうすればよく身を処して生きていけるのかと悩みながら、愛する女一宮の将来を思う。死期を直前にした紫上の「あしき事よき事を思ひ知りながら、埋もれなむも言ふかひなし」(夕霧 四五七頁)という言葉には、彼女自身の後悔、そして女が主体性を持つことの難しさへの哀しみが端的に表れているだろう。

また、二人の女君の述懐に挟まれる形で、第二部に登場する他の女君達も、それぞれ苦難に見舞われ葛藤する姿が描かれる。そして、中宮生母としての地位を確立し、入道の遺言において「わが身は(明石の君のこと)変化のもの」(若菜上 一一五頁・○内は稿者が補った)である故に、入道が往生を遂げれば「かならずまた対面ははべりなむ」(若菜上 一一五頁)と言われる明石の君以外、苦難に際して一様に出家を望んでいる。

この内出家を遂げるのは隴月夜、女三宮のみで、夕霧に求婚され苦境に陥った落葉宮や、夫が存命の秋好、紫上は出家を許されない。

また隴月夜は、若菜上巻で朱雀院の後を追う形で出家しようとした際には、院自身から「かかる競ひには、慕ふやうに心あわたし」(若菜上 七六頁)と諭される形で一度は断念したが、若菜下で、出家の意思を鈍らせる要因と考えていた源氏との関係振り切り、源氏に告げること無く出家を遂げる。女三宮も、

産後まずは源氏に出家を願ひ出るが、源氏からは許可を得られず、朱雀院の「かかるおりにもて離れなむも、何かは、人笑へに世を恨みたるけしきならで、さもあらざらむ」(柏木 三〇六頁)という考えに従って出家を遂げていく。院は、産後の肥立ちの悪さが原因であれば、愛娘が源氏との不仲から出家をしたように世間から見られないと考えて彼女の出家を認めた。

紫上の道心や女人の出家、女人罪障観に伴う女人往生の難しさ等について先行論は多く存在し、例えば張龍妹氏は、物語内の女君の出家を分析し、夫が健在での出家願望は、男女の関係性からの逃避という側面で受け止められ、否定的に描かれていると指摘する(9)。もう一つ重要なことは、女君が出家する際、配偶者や父親等が健在であれば、彼らの許可を得る必要があること、つまり女君個人の意思で出家を遂げることが困難であるということだ。

実際、配偶者や保護者にあたる男君の意に沿わない形で出家したとして、女君達がその後の安寧を得られる可能性も低かつたであろう。式部は『紫式部日記』において、

世のいとほしきことは、すべてつゆばかり心もとまらず
なりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべら
ず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆ
たふべきやうなむはべるべかなる。それに、やすらひは
べるなり(紫式部日記 二一〇頁)

と、心を決めて出家したとしても迷いが生じることへの不安を吐露しており、まして現世に未練や厄介事を残して行かう出家を推奨することは無かつただろうと思われる。

女君達は周囲の男性に許しを得なければ出家も叶わない。そして、佐藤勢紀子氏が指摘するように、物語内では男性登場人物によって当時における女性観を反映した発言が度々なされて

いるが（10）、このように男性達からただでさえ道心が浅く、五障故に往生も困難であると考えられていた女君達は、その往生のためになされるはずの出家からすら男君達によって遠ざけられてしまう。

このような女君達の物語の最期に位置する紫上は、苦悩の物語の集大成であると言えよう。

述懐の後、自らの死を予感し、出家の意思を見せる彼女を源氏は引き留める。紫上は最後の願いであった出家すら、「御ゆるしなくて、心ひとつに思し立たむも、さまあしく本意なきやうなれば」（御法 四九五頁）と、己の気持ち一つで成し遂げることはできなかつた。男の愛に縋るしかない女の生き辛さを誰より痛感した紫上は、主体的に生きたいと願いながらそれでもやはり愛執に絆されて出家さえ諦めなければならなかつた。

第二部世界までの女君達の物語は、その人生の苦しみを紫上が吐露し、女がより良く生きるにはどのような苦しみならばいいのかという問いを残し、第三部へと続いていく。

明石の君と紫上、二人の女主人公の生き様は対極にあるが、源氏との、つまり貴顕との婚姻という思わぬ幸運がその不幸を招き入れたという点において、根を同じくしている。

小酒井敬子氏は物語が、「幸ひ人」達がいかにして「幸ひ」を守るため努力し、そしてそれがどれだけ辛いものであつたのか、その内面を描く事によって、『蜻蛉日記』作者が「そらごと」として一蹴した古物語を超えたと指摘する（11）。氏の述べられていくように、受領階層でありながら貴顕と婚姻できた明石の君と、継母から逃れて貴顕と結婚できた紫上という二人の幸運な女君が、その人生を本当に幸運のみで切り開けるのか。『源氏物語』は女が生きていく中で決して逃れ得ない問題を二人の女君を中心に据えて描いているのではなからうか。

おわりに

『源氏物語』は、先行する物語のように、幸福な人生を掴んだはずのその先の物語を描いた。そしてそれこそが、蜚巻において源氏や玉鬘の口を通して作者が提示したかった、「物語」とは何かではないだろうか。決して「そらごと」では終わらない、作者の見た現実が、明石の君や紫上の生き様には現れている。

明石の君は一族に縛られて生きる故に、忍従の人生を貫いた。それは結果的に一族の繁栄をもたらすが、我が子を手放し、源氏との愛を諦めた彼女に多くの苦悩があつたことは言うまでも無い。

紫上は、源氏最愛の女君として源氏との間に愛を育んだ。明石の君のように家の為に生きる必要が無いため、源氏との愛情を基盤に成立した関係を営む事が可能であつた。しかし実子には恵まれず、正当な手続きと父の承認を経た結婚ができなかつたことにより、遂には源氏の愛情自体を疑わざるを得なくなつた。

二人の造形の対比は、結局の所、源氏の栄華の為に形作られていると考えられるが、一族の繁栄に献身した明石の君の人生は、源氏との関係性に政治的な色合いが強く表れ、紫上は家の束縛を受けず、愛情のみで源氏と繋がっている故に、極めて政治から遠い位置に造形された女君像であると考えられる。しかし、源氏と人生を同じくするということは、彼の政治的進退をも同じく経験するということと同義である。紫上もまた、光源氏の結婚に起因する政治的な世界から離れて人生を歩む事は不可能であつた。

物語は、女の苦しみを鋭く炙り出している。貴顕との婚姻は必ずしもその人生の幸福を保障し得ない、それが物語の出した結論であろう。そしてこれは、紫上や明石の君などの「幸ひ人」

に限った話では無い。夕霧の正妻として社会的地位を確立していた雲居雁も、髭黒大将の北の方も夫の不実に翻弄され、雲居雁は一時実家に身を寄せ、北の方は離縁にまで発展する。所詮、女の人生は男側の事情に左右されるしかない。

明石の君と紫上の人生、それぞれの述懐は、女君を取り巻く様々な困難を照射し、その他多くの女君達の苦しみを内包して女の理想的な生き方とは何かという問いかけを残していく。

これを引き継いだ宇治の世界は、女君の生き様にどのような答えを出したか。京の政治的動静から離れた宇治という舞台で展開された八の宮の娘達の物語、殊に浮舟の物語はいかなる答えを得たのか。浮舟は、薫の愛した女性、大君の形代として物語に登場し、数奇な人生を生きる女君だが、物語において初めて自分の意思のみで出家する女君である。浮舟が、薫との関わりの中でどのような人生を模索したのか、『源氏物語』の問いかけは、宇治三帖世界へと継承され、彼女の生き様を追っていくことで初めて、物語全体を通して女の生き様を俯瞰することに繋がるだろう。

注

(1) 神野藤昭夫「螢巻物語論場面の論理構造」(『国文学研究』六七・一九七九年三月)や、藤井貞和「雨夜の品定めから「螢巻」の物語論へ」(『共立女子大学紀要』一八・一九七四年)等

(2) 陣野英則「『源氏物語』の多種多様な「読者たち」と享受」『源氏物語論—女房・書かれた言葉・引用』(二〇一六年 勉誠出版)

(3) 鈴木日出男「光源氏の女君たち」『古代文学論叢 第六輯 源氏物語とその影響 研究と資料』一九七八年

(4) 原岡文子「浮舟物語と『人笑へ』」『源氏物語の人物と

表現—その両義的展開」(翰林書房、二〇〇三年五月)、小酒井敬子「『源氏物語』の「幸ひ人」—不幸を抱えた女君たち—」『新大國語』(一九七三年八月)等。

(5) 拙稿「家再興の物語としての明石物語—藤原高藤・山蔭説話との関連から—」(『国文学研究ノート』・五七号・二〇一八年)を参照。拙稿では、没落貴族の家再興には、天皇に直接娘を入内させる高藤のパターンと、権力者と婚姻関係を結び、後に天皇家へ血を注ぎ込む山蔭のパターンの二つがあり、明石物語は、その構想と人間関係の準拠を高藤説話に着想を得、山蔭の説話を元とすることで明石家再興を成し遂げたということを目指した。

(6) 匂兵部卿宮巻では夕霧が、紫上の不在を嘆き、対照的に明石の君が栄えていることを伝えている。「六条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にのしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり(匂兵部卿 二〇頁)」という部分からは、光源氏、紫上亡き後の六条院が実質的に明石一族繁栄の場として機能しているとも読み取れる。

(7) 明石の君が、源氏の誘いに応じて大堰を経ずに京に上っていた場合、明石母子は二条東院に居住することになっていた。その場合には、六条院の造営に際して明石の君はが二条東院に留め置かれた可能性もある。二条東院が、そこに居住する女君達の性質上、明らかに源氏の妻妾の中でも六条院の女性達とは差を付けられていることを考えると、大堰に居を構え、姫君に会うために通ってきた源氏と密接な関係を築くことによって自身の扱いを軽くさせることのなかった明石の君の判断は賢明であったと言える。

(8) 大津直子「光源氏と葵の上との結婚」『源氏物語 煌めくことばの世界』(翰林書房 二〇一八年四月)

(9) 張龍妹『源氏物語の救済』風間書房・二〇〇八年

- (10) 佐藤勢紀子「仏教思想とジェンダー——『源氏物語』を対象に——」『学際日本研究』一号・二〇二一年三月
- (11) 注8に同じ。

第五章 宇治十帖の女君

はじめに

四章では、第一部、二部にかけて展開されてきた源氏父子の繁栄の物語や明石一族の再興の物語など入れ替わる形で物語の表舞台に現れてきた女君の生き様の物語について、紫上と明石の君を比較しながら、女君を取り巻く環境の厳しさを検討した。

女君達は、貴顕との婚姻という幸運を得るが、社会的地位の低さや後ろ盾がないことから様々な困難を呼び込んでしまう。彼女達は決して幸福ばかりの人生であるとは言えず、紫上の夕霧巻における述懐は、彼女自身の人生から、個人的感情を超え、女の生き様全てにおけるより普遍的な哀しみを紡いでいる。

このように、第二部の終盤においては女達の苦悩の物語が展開され、それぞれの苦悩を描いてきたが、紫上の述懐を受け、第三部世界は女の人生にどのような答えを見いだしたのか。本章においては、第三部世界を牽引する宇治の八の宮の三人姉妹達の人生を中心に、宇治十帖が女君達の物語をどのように展開していったかを確認していきたい。

一

物語の二部以前の世界は、紫上の述懐を通して女の生き方そのものへの問いを投げかけたが、これを引き継いだ三部世界の女君達の物語はどのように展開されたのだろうか。

二部以前と三部の大きな共通点として、若菜以降展開される女三宮や落葉宮、そして宇治十帖に登場する八の宮の三姉妹が顕著なように、彼女達が皇族の血を引いているということがあ

げられるだろう。これは、第二部の中心的な女主人である明石の君と紫上にも共通する点でもあるが、物語が高貴な血筋、特に皇族の血を引く女君達の人生を多く描いたのにはどのような理由があるだろう。

一つには、皇女達の生き方の難しさがある。皇族の血を引く女君達は、その血の高貴性故に多くの困難を背負いやすく、人生において規制を受けやすい。

愛娘の処遇に苦慮する朱雀帝が、

皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざまし思ひもおのづからうちまじるわざなめれど(若菜上 三二〜三三頁)

というように、皇女は本来未婚のまま過ごすべきという考えが物語において見受けられる。

院はまた同時に、「さるべき人に立ち後れて、頼む蔭どもに別れぬる後」(若菜上 三三頁)、つまり後見を失った女君が、親兄弟亡き後に男にもてあそばされ、浮名を流して親の面目を失うことを恐れてもいる。そしてこのような一連の不面目な有様を、「なほなほしきただ人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり」(若菜上 三四頁)と、内親王の高貴性故に、その醜聞は普通の臣下以上に避けるべきことであると感じている。

このような皇女不婚という意識は、女三宮の乳母や、宇治の八の宮にも共通しており、当時において一般的な意識とされていたと考えられる。

特に八の宮は、自身の死に際、

わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏に、軽々し

き心ども使ひたまふな。おぼろげのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かふ人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ(椎本 一八五頁)

という風に娘達に遺言している。父宮の面目のみならず、既に死去した母のためにも徒に男性に縁付くことなく宇治に留まって未婚のまま生涯を終えよという父宮の言葉には、その血の高貴性故の面目を娘達に保つように、という厳しい訓戒であり、彼女たちの人生を大きく規制していく。

ここで重要なことは、朱雀院や八の宮等、登場人物達から皇女不婚の原則について度々言及がなされながら、女三宮や落葉宮は父院の意向によって降嫁し、宇治の大君・中君姉妹も父の遺言にかかわらず、否応なしに結婚問題に巻き込まれていってしまうということである。皇女達は、本人の意思が有ろうと無かろうと、婚姻に関する問題に絡め取られていってしまうが、ここには、彼女たちの「後見」、つまり後ろ盾となってくれる親族の不在が関係している。

皇女の結婚については多くの先行研究が蓄積されているが(1)、森一郎氏は特に女三宮の事例において、朱雀院が皇女の結婚を良しとしない立場を取りながらも、結果的に源氏に降嫁させる決定を下した背景には、院自身の病弱による出家、宮の人格の未成熟、母方に後見が無いこと、当今の好色の現実という要素があったと指摘する。そして、このような不幸な条件の積み重ねによる皇女の結婚が引き起こす悲劇は、女三宮故の特例な事例という部分を含みつつも、基底には皇女の結婚の悲劇という問題が横たわっているともいう(2)。

皇女の婚姻は、本来望ましいもので無い故に避けられるべき事態でありながら、やむにやまれぬ事情によって結婚せざるを得なくなった女君にとって、悲劇の始まりでもある。森氏の

指摘の内、特に注目すべきはやはり、女三宮が元々母不在の宮であり、父院の出家に伴い後ろ盾を完全に失ってしまうことによる、「後見」不在の女君であるということだろう。

これは女三宮のみでなく、二部・三部に登場する皇族の血を引く女君にも共通している。紫上は早くに母を亡くし、父宮に認知されず祖母に養育され、朱雀院の第二皇女、落葉宮は父院の承認のもと降嫁するが、夫と死に別れ、その後母とも死別してしまう。八の宮の大君、中君姉妹は母とは幼くして死別し、父宮とも死に別れる。そして浮舟もまた父宮に認知されることのない女君であり、母の出自故に安定した生活を送ることが不可能で、母の再婚相手からも顧みられない存在として物語に登場する。

この「後見」という概念について加藤洋介氏は(3)、「後見」にはまず本来、子に対する親、同母兄妹間での関係、伯父が姪に対して行う母方親族への義務など、家族関係を基盤として行う「後見」や、家族関係と同じく生来の関係性から発する乳母による「後見」があるという。しかし、このような本来的「後見」は、物語世界においては二義的存在にあたり、特に『源氏物語』における人物達は本来的「後見」を欠いた存在として登場し、その本来的「後見」の位置にあるべき親や乳母によって「委託」を受けた「後見」的存在と「後見」される側の人間の間に、新たな人間関係の創造と、新たな展開が開けていると指摘している。

氏の指摘通り物語は、例えば秋好中宮や祖母亡き後の紫上のように、度々「後見」を失った女君が新たな「後見」を得ることにより安定した生活を得る物語を描いた。一方で『源氏物語』とは、源氏以外に寄る辺のない身であったが故に苦悩をその人生に抱え込んだ紫上や、父院の苦慮の末源氏を「後見」としながらも、さしたる愛を受けることなく、柏木との密通の先に出家へ至る女三宮、柏木からの「後見」委託を受け、その遺言を

盾に夕霧から迫られる落葉宮や同じく八の宮の委託を盾に薫から求婚を受ける大君・中君姉妹など、本来的「後見」が欠如した故に「後見」問題に苦慮する女君の物語であるとも言えるだろう。「後見」問題は、物語において様々な意味を伴って女君の前に立ち現れ、物語は展開されている。

物語全体を通し、皇族の血をひく女君達の物語が数多く語られた背景には、本来独身でその生涯を終えることが理想とされる皇女達が、彼女たちにはかばかしい「後見」がないことにより、婚姻に関わる多くの苦難を抱え込みやすいというやむにやまれぬ事情があったと考えられる。

二

では、実際に三部世界の女君達の物語はどのように展開されていたのか。八の宮の三人の娘達の人生を、第二部までの女君達と照らし合わせながら検討していききたい。

(一) 大君

大君は、薫に惹かれつつも、亡父八の宮の遺言を遵守して彼を拒み通した。

薫は、八の宮が死に際して娘達の将来を憂い「亡からむ後、この君たちをさるべきものたよりもとぶらひ、思ひ棄てぬものに数まへたまへ」(椎本 一七九頁)と委託したことを受けて、夫として大君を世話することを望み、その慕情を大君に打ち明けていく。対する大君は父の遺言を持ち出し、薫の求婚をはね除けようとしていくが、薫は薫で「いとあやしき本性にて、世の中に心をしむる方なかりつるを」(総角 二二七頁)、と好色

からの提案ではなく、世間が薫と大君の噂をし始めたようであるから、同じ事ならば夫婦関係にという流れで、あくまで大君への求婚が八の宮の委託を受けた故のものであるとする。

今井久代氏は(4)、このように大君に対応する薫はその意識が「俗」か「聖」か、恋か道心かを巡り自意識を納得させることのみに向けられ、実際の恋情の相手として現実存在する姫君達の内奥に踏み込まないと指摘する。

実際、薫は三度にわたって大君の寝所に踏み込むが、その際一度目は仏前である為に不面目なことはしないと述べ、更に「世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」(総角 二三四頁)と、あくまで大君の嫌がるようなことはしないと言い、薫の意識は専ら自身が他の男とは違う、ということの主張のみにむかっている。

薫はこのように、亡父からの委託を受けて自身を姫君達の「後見」として規定し、そこから大君への求婚へと当然の帰結のように移行していくが、既に先行論もその共通性を指摘するよう(5)、同じような展開は落葉宮に求婚する夕霧の物語において語られている。

夕霧は親友柏木の死の間際、「一条にもものしたまふ宮、事にふれてとぶらひきこえたまへ」(柏木 三一七〜三一八頁)といって落葉宮の世話を頼まれ、ここから二人の関係は出発する。夕霧は柏木の頼み通り、度々落葉宮とその母御息所を訪れるが、落葉宮の手柄に惹かれ、慕情を募らせていった。夕霧は当初、「まめ人」である故に

はじめより懸想びても聞こえたまはざりしに、ひき返し懸想ばみなまめかむもまばゆし、ただ深き心ざしを見えたてまつりて、うちとけたまふをりもあらじや(夕霧 三九五頁)

等のように、女宮に惹かれる気持ちに自制を見せるが、徐々に

惑乱していく。

夕霧巻において遂に落葉宮に強引に迫る前段において、

かう参り来馴れうけたまはることの、年ごろといふばかりになりけるを、こよなうもの遠うもてなさせたまへる恨めしきなむ(夕霧 四〇〇頁)

と自らの年来の落葉宮親子への献身を訴える。そして夕暮れ近くになり、母御息所の看病の為人も少なくなつた落葉宮に、御簾内に入れるよう頼んだことが聞き届けられぬのを見て、自ら御簾の内へ踏み入ってしまった。

落葉宮と大君、両者の物語は多くの共通性を持っている。どちらも「後見」の覚束ない宮であり、男君は本来の「後見」から彼女たちのことを託されて面倒を見る、という形で最初は出会っていく。世話をする内、女君の人柄に惹きつけられていき、夕霧、薫のどちらとも、「まめ人」であることを理由に自らを通常の好色な男達とは違ふと定義付けながら、宮への献身を訴えて彼らの望みを受け入れさせようとしている。女君達は一人は未亡人、一人は亡父の遺言を遵守することに固執するために男君をはね除けようとするが、結果的に彼らの強引な侵入を許してしまい、互いに実事はないものの、酷くその矜持を傷つけられてしまうという点でも酷似している。

彼らは、女宮の居所に踏み込んだ時の言動も良く似ており、夕霧は、最初落葉宮の御簾内へ侵入した時「これより馴れ過ぎたることは、さらに御心ゆるされでは御覧ぜられじ(夕霧 四〇六頁)」と彼女に声をかけ、後に母御息所の死によつていよいよ寄る辺のない彼女を一条宮に移し、彼を拒否して塗籠にこもる宮に対して「あるまじき心のつきそめけむも、心地なく悔しうおぼえはべれど、とり返すものならぬ中に、何のたけき御名に

かはあらむ(夕霧 四七八〜四七九頁)と、いくら実際潔白であろうとも世間はそうは思わないであろうことを言う。同じく薫も、初めて大君の居所に入ったときの様子は先に述べた通りであるし、匂宮が中君と契る手引きをし、自らも大君と結ばれようと考えた三度目の侵入の際には「この障子の固めばかりいと強きも、まことにもの清く推しはかりきこゆる人もはべらじ(総角 二六五頁)と、今更大君の潔白を信じる人間もいるまいという趣旨の発言をしており、このような類似性を鑑みるに、大君と薫の物語とは、二部における落葉宮と夕霧の物語の再演であるといえる。

しかし、彼女達の物語は全てが全く同じではなかった。夫に続いて母宮を失い、父院によつて出家の道も絶たれた落葉宮は、なすすべなく夕霧に引き取られ、彼の望むとおりに結ばれていく。

一方の大君に、物語は全く異なる展開を用意した。大君は薫に惹かれる気持ちを持ちながら、最期まで薫を拒み通し、やがて病を経て死んでいく。

大君の死について、多くは自らの死をもつて完結する薫との愛の「永遠化」の側面から論じられてきたが、高良瞳氏は大君の結婚拒否から死への過程は、当時の貴族社会における一夫多妻制を当然とする慣習によつて苦しめられた女性の、夫に対する依存的立場しか取りえない現実に対する人間らしい生き方への追求であったと考え、紫上の結婚不信を継承しているという(6)。

大君は、薫に惹かれていながら、一方では無理に居所へ侵入したり、彼女の意に反して中君を匂宮に縁付かせてしまった薫や、危惧したとおり中君への訪問が途絶えがちになる匂宮に苦しめられ、男性不信の念が積もり、父宮が危惧したような不面目な事態を引き起こす前に、死んでしまいたいという思念を抱いていく。ここでの大君の死への志向は「我も、世にながらへ

ば、かうやうなること見つべきにこそはあめれ」（総角 三〇〇頁）という感情から発され、このまま長らえていけば、薫を拒みることが出来なくなるだろうという懸念故のものである。

つまり、大君は紫上の述懐が問いかける「女がより良く生きるにはどうすべきか」というテーマを引き継ぎ、既に語られた落葉宮とは違う道を見いだしたが、大君が薫を拒み通すには、彼女自身の命を終えることしか方法はなかった。母を早くに亡くし、父にも先立たれた「後見」の無い大君は、自身の結婚は望まず、妹の親代わりとなって「後見」する人生を選んだために薫を拒否し続けたが、父宮の委託を根拠に自身に迫る薫を拒み通すことは後ろ盾の覚束なさ故に難しく、最終的に死によってその意思を貫徹したと言えるだろう。

(二) 中君

中君は、元々姉の大君が薫に縁付けたいと考えていたが、当の薫は大君と結ばれることを望んでいたため、彼の手引きで匂宮に引き合わされることになる。

中君は始め、姉や薫の意向のままにその人生を決定付けられ、匂宮と結ばれるが、森一郎氏が指摘するように（7）、この受動的生き方は夕顔や女三宮のような受動性ではなく、姉の言うことによく従い、後に姉を失ってからは、自らの境遇を冷静に見つめ、それに対処しうる聡明さがある。

大君の死後、中君は薫の世話を受けながら、匂宮の愛情を頼りに京に迎えられ、そこで生きていくことになるが、彼女の人生には二つの苦境が待ち受けていた。

一つ目は、大君を失ったことでその「形代」を求めだした薫からの求愛である。薫は、大君存命中は妹を自分と認めて大事にして欲しいと訴える大君の要請にも関わらず、中君を妻とすることを考えず、彼女を匂宮に譲ってしまうが、大君を喪えば、

その喪失感から姉宮に瓜二つであった中君を求めていく。

薫は先の大君の時と同じく、中君を「後見」するという立場から彼女に接近していき、匂宮と夕霧の六の君との婚姻によって夜離れが続く中君の居所に踏み込んでしまう。中君は奥に逃げ込もうとするが、これを留めた薫は「うとうとしく思すべきにもあらぬを、心憂の御気色や」（宿木 四二七頁）と、彼女を後見する立場である自身に素っ気なくしないで欲しいと言いつつ、また、

かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし、過ぎにし人の御ゆるしもありしものを。いとこよなく思しけるこそ、なかなかうたてあれ。すぎずきしくめざましき心はあらじと、心やすく思ほせ（宿木 四二八頁）

というふうには、亡き大君の委託でもあったのだから、と再度「後見」の立場を押し出しつつ、中君に心を許すように訴えかける。いかにも薫側の強引な手法と勝手な言い分ではあるものの、実際中君には薫以外頼りとする事の出来る「後見」もおらず、その薫は中君が大臣となった夕霧の娘である六の君の威勢に押されてしまわぬように、何かと世話を焼いてくれているのが事実なので、薫を気強く拒否出来ない。

苦境に立たされた中君の「さすがに、あさはかにもあらぬ御心ばへありさまのあはれを知らぬにはあらず」（宿木 四四三頁）という薫の「後見」への感謝と、同時に「さりとて、心かはし顔にあしらはむも、いとつつましく、いかがはすべからむ」（宿木 四四三頁）という既に匂宮の妻となり子を身籠もった状態で薫を受け入れることも出来ないという苦しい胸の内は、自らの代わりに新たな「形代」となるべき浮舟の登場を物語に呼び込むが、この葛藤こそ、確たる後ろ盾がなく安定した地位を確立できない中君の物語の特性をよく表している。

そして、二つ目の中君にとつての苦しみは、匂宮が夕霧の娘を妻にしてしまったことであろう。夕霧は、父親の権勢を引き継ぎ、宿木巻では大臣となっており、雲居雁との娘を東宮、二宮に入内させ、三宮にあたる匂宮にも落葉宮の養女となつてゐる六の君を縁付かせてしまう。大臣の娘である六の君は、夕霧の度々の要請もあるものの、ゆくゆくは立坊もと将来を期待される匂宮の妻として今上・明石中宮ともに納得の相手であった。

対する中君は、八の宮の遺児ではあつても、既に両親を亡くし、今は薫の善意によつた「後見」しか持ち得ない非常に不安定な女君である。また、匂宮本人は中君を寵愛していても、明石中宮は匂宮に「御心につきて思す人あらば、ここに参らせて、例ざまにのどやかにもてなしたまへ」(総角 三〇三頁)と、明らかに中君を召人として遇するように求めている。中君は、大臣が後ろ盾となつて匂宮と結婚した六の君とは違い、不安定な「後見」を抱えながら、夫の愛情のみを頼りに生きなければならぬ。

このように匂宮と六の君の婚姻により、姉が何故かたくなに薫との婚姻を拒絶したのかを振り返つて理解し、自身の不安定な立場を身に染みて実感していく。このような点においては、中君も紫上と同じく、自身の不安定さを見据え、苦悩する女君であると言えるが、物語は中君に、もう一つの展開を用意している。

はかばかしい後ろ盾の無いまま夫の愛を頼りに生きる女君という点では、中君は紫上に似ているが、子のなかつた紫上と違い、中君は子どもを出産する。中君の子は、匂宮の初めての子どもであり、盛大に祝われることとなり、中君の面目もこれにより保たれた。正妻との立場の違いがありながら子どもが生まれたことで一定の立場を得た女君といえ、明石の君が最たる例かと思われるが、果たして中君はそのまま安泰に過ごしてゆけるのだろうか。

若君を出産し薫の興味を浮舟へと向けることにより一旦は安寧を得た中君は、寄る辺無い妹・浮舟を自邸に引き取つた際、あまりに哀れな浮舟をみて、

世の中はありがたく、むつかしげなるものかな、
わが身のありさまは、飽かぬこと多かる心地すれ
ど、かくものはかなき目も見つべかりける身の、
さははふれずなりにけるにこそ、げにめやすきな
りけれ(東屋 七〇頁)

と、女性一般の生き辛さに言及しながら、相対的に自身はまだ良い方、という認識を持つている。この自己肯定の仕方は、若菜上巻において他の身分の高い女君達と自身を比べて「やむごとなきだに思すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし」(若菜上 一三二頁)という言い方で自身の生き様を肯定した明石の君と非常に似通つている。しかし中君は果たして、決して手放して幸いとは言えない女君ではありながら、中宮の実母であり、後には明石姫君所生の宮達の世話をしながら安泰に暮らしていく明石の君と同じような平穩を得られるだろうか。

そもそも明石の君は、源氏が濬標巻の勘申によつて彼女以外から姫君が生まれぬことを確認しているという点で源氏によつて不可欠な存在であった。そして父入道の周到な用意によつて、身分が低いながら正当な手続きで婚姻しており、娘の為に父入道が無理をしながらも蓄財したために財政的にも十分な後ろ盾がある。もちろん、明石の君の身分の低さは、彼女の人生において大きな玉疵となるが、それ以外は十全に整えられていた女君と、中君のように二親が既におらず、夫の愛のみを頼りに生きていく女君では全く違つて言える。中君は、その立場を夫の愛情と子どもを有したことのみによつて確立しているが、

夫である匂宮は誰もが知る好色人であり、気乗りしていなかったはずの六の君との婚姻も、彼女の美貌を目にし、一転して六の君に傾倒し中君を嘆かせた。物語内では語られてはいないものの、六の君に今後子どもが出来ない保証はない。

また、薫は浮舟の出現により一旦は中君への情動を抑えて振る舞っているが、浮舟巻では薫が未だ中君へ心を寄せていることが記され、浮舟の入水、出家によって再び「形代」を喪った薫が、またしても中君に迫るということも全くないわけではない。

このように中君は宇治の三姉妹の中では、一番安定した生活を送っているように思われるが、実際には実の親の「後見」を受けられず、自身に好意を持つ薫をやむなく「後見」としなればならないことや、匂宮が大臣夕霧の娘と婚姻してしまったことによって、潜在的にその地位を脅かされる危険を常に孕んでいることが了解されよう。中君は「世の中はありがたく、むつかしげなるもの」(東屋 七〇頁)という、紫上の至った認識に近いものを感じており、必ずしも子を有していることがその人生を安泰にするものでもないという点において、明石の君の物語とは違った展開を見せた物語であると言えよう。

(三) 浮舟

浮舟という女性には、興味深いことにその造形的要素において第三部における他の女君以上に、第二部までの女主人公であった紫上や明石の君の物語を受け継いでいる様に見える。父親に承認されない娘であり、義理の親との関係が良くないこと(紫上)、皇族出身でありながら母の出自が低く、暮らしぶりはほぼ受領階層と変わらないということ(明石の君)、正式な結婚をしっておらず、子どもにも恵まれなかったこと(紫上)等の要素が浮舟を構成しており、物語内でも屈指の環境的に恵まれない姫君

であると言える。

既に見てきたように、大君・中君もそれぞれに、第二部世界が投げかけた「女はどのように生きるべきか」という問いを継承しているが、浮舟はより如実にその問題を受け継ぎ、物語を切り開いていく。大君は、紫上も至った結婚への不信から、その意思の貫徹のため死ぬ女君である。一方中君は明石の君と同じく子を成して安寧を得たように見えるが、実際は「後見」の頼りなさにより地位の高い妻の出現によってその立場は如何様にも変化してしまう。姉宮達の人生は、またしても女の生き難さを露呈しており、物語は最後に浮舟という女君を通して、女のより良い生き方を模索していく。

浮舟は姉二人に比べても、苦難の多い人生を歩まざるを得なかった。それは浮舟という女君が聖俗と呼ばれた八の宮の娘でありながら、母の身分の低さ故に父宮に認知されなかったという事実が最たる要因である。既に零落したとはいえず元は立坊の可能性すらあった親王に正當に認知された姉二人とは、浮舟はその出自からして大きく隔たりがある。

浮舟の出自の低さは、彼女の人生全てにおいて不利益をもたらしている。母中将の君は、何とか娘に良縁をと考えて左近少将との縁談を取り付けるが、少将は浮舟が中将の君の再婚相手である常陸介の実子でないことを知って、この縁談を破談にしてしまった。継父の常陸介は、中将の君が浮舟ばかりを大事に気にかけることが気に入らず、結局自身の実の娘に少将を婿として迎えることになり、浮舟の最初の縁談は所謂典型的な継子虐めのような形で終わってしまう。

これを受けて、中将の君は浮舟の姉である中君にその庇護を依頼し、ここから薫との縁が始まっていく。しかし、薫は「後見」として近付いた大君や中君とは違い、浮舟のことは「山里の慰めと思ひおきてし」(浮舟 一〇七頁)、「やむごとなく思ひそめはじめし人ならばこそあらめ」(浮舟 一七五頁)と一貫して

愛人程度としてしか扱ふことはなかつた。

薫は浮舟を見出す直前に、今上帝の女二宮を妻に迎えており、出自の低い浮舟など、妻の地位を望べくもない。東屋巻では、浮舟の処遇に悩む薫が、

この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、ただ今、ものものしげにてかの宮に迎へ据ゑんも音聞き便なかるべし(東屋 九八頁)

ということを考えている。既にこの時権大納言と右大将を兼任し、帝の覚えめでたく妻として女二宮を貰い受けることのできるような薫は、浮舟を世間に対して妻として紹介するつもりは無く、宇治に浮舟を隠してそこに自身が通う方法をとる。薫にとって浮舟は、彼女の姉二人とは全く違い、「後見」して世話をすべき対象ではなく、召人として扱ふことのできる軽い存在であった。

そしてこの、浮舟を宇治に置いておくという判断が、結果的には薫不在の際、匂宮の侵入を許してしまうが、匂宮も薫同様、浮舟を妻として処遇するつもりはなく彼の関心は専ら、如何にして薫を出し抜いて浮舟を手に入れるかのみに向かつている。結果的に男君達は二人とも浮舟をその身分の低さ故に軽んじ、これが彼女を両者の間で板挟みにして追い詰めることになる。

このような男君の間で浮舟は、一方では匂宮の熱情に浮かされながら、これまでの恩義から薫を振り捨てることも出来ない。二人の間で引き裂かれていく浮舟の心は

かかるうきこと聞きつけて思ひ疎みたまひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひまどふ親にも、思はずに心づきなしとこそはもてわづらはれめ、かく心焦られ

たまふ人、はた、いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば、かかるほどこそあらめ(浮舟 一五八頁)

という部分によく表れているように、薫に匂宮との一件が露見し、彼から疎んじられることへの不安と、匂宮に身を任せたとして彼の好色故の自分に対する執心が長続きする保証はないという危惧で揺れている。

そして恐れていたとおり薫に匂宮との関係が露見し、浮舟は惑乱の果てに入水へと至った。

浮舟の不幸は、彼女自身の「おほどか」な性格が引き起こした側面も一部にはあるが、継父に愛されず、身分卑しい母以外には身寄りのない女君が都の貴顕に対しいかなる気強い態度を取りうるかと考えれば、彼女自身の咎とは到底言えまい。結局浮舟の物語は、浮舟という極度に寄る辺ない女君が貴族社会にとって軽んじられてしまう存在であったことがその悲劇の大部分を占めているのだろう。

しかし、物語は浮舟を入水による死で終わらせはしなかつた。宇治川に身を投げた浮舟は奇跡的に命を永らえ、横川の僧都に助けられた浮舟は出家の道を選んでいく。

浮舟の出家に至る過程については先行諸学によって既に様々な論じられてきたが(8)、その心理的過程のみならず、浮舟がこの長い『源氏物語』の中で唯一、誰の許しもえずに自力で出家に至り、死ぬことなく自らの人生を決定した女君であるという点に注目したい。

物語内で出家する、もしくは出家の意思を見せる女君は幾人も存在しているが、張龍妹氏が指摘するように、夫が健在の女君の出家願望は男女の関係性からの逃避という側面で受け止められ否定的に描かれており(9)、浮舟以外に、夫や父親の承諾を得ずに出家した女君は一人もない。四章で既に述べたとおり、二部世界以前の女君達は現世における生き難さ故に出家を

志向しても、その出家ですら彼女たちの庇護者たる男性の許可無しには決して果たせなかった。これは第三部においても同じで、大君が死を目前にして受戒を望んだ際にも、女房達は必死で看病にあたる薫を引き合いに出して彼女の受戒を妨げ、結果的にそのまま死んでいってしまう。

このような女君達の中でただ浮舟だけが、僧都の手助けを経る自らの力で出家を遂げるとするのは、物語にとっても重要ではあるまいか。南波浩氏は、『源氏物語』は、「政略結婚」や「一夫多妻」の世の中で女の「つたない宿世」を見すえた作者による「女の生き方とはどういうものか」という問題の追及を契機としていると説くが(10)、そのような物語作者式部にとって、浮舟物語とは、多くの苦しみを経験しながら悩み続けた先に、初めて主体的生を選び取った女君の、ある種の希望の物語であるといえはしないか。

浮舟は入水に失敗し命を長らえてしまったことを恥じ、僧都に出家を願ひ出る。当初は五戒のみを授けられ、不満足ではあるが「おれおれしき」心の持ち主であるために気強く言い出すことが出来ない。しかし、浮舟を死んだ娘の代わりにと大切に世話し、娘婿であった中将と縁組みしようと考える妹尼の存在、匂宮に耽溺したこと恥じ、薫との生活に未だ未練を残す自身を省みて、男女の情愛の世界から逃れたいと思ひ直した浮舟は再度僧都に尼にしてくれるよう頼み込む。これに対して僧都は「年月経れば、女の御身というもの、いとたいだいしきものになむ」(手習 三三五頁)という文言で彼女の出家を押し留めようとすめるが、浮舟の最早出家の意思を止められず、最終的には彼女の望み通りに出家をさせることにした。

無事、受戒を終えた浮舟は

とみにせさすべくもなく、みな言ひ知らせたまへること
を、うれしくもしつるかなと、これのみぞ生けるしるし

ありておぼえたまひける(手習 三三九〜三四〇頁)

と内心安堵しており、遂に制止を振り切って出家に至ったことだけは、自らの人生において生きてきた甲斐のあったことであると安堵する。

浮舟の出家は、長い物語の中で作者が行き着いた、女の生き様の物語の一つの終着点である。

ただし、浮舟の選択が彼女の今後を全て安泰にするわけではない。出家の後、薫は明石中宮經由で彼女の生存を聞きつけ、出家を導いた僧都に詰める。僧都は薫の恨み言を聞き、

さればよ、ただ人と見えざりし人のさまぞかし、かくま
でのたまふは、軽々しくは思されざりける人にこそあれ
(夢浮橋 三七五頁)

と、今更ながらに浮舟を出家させてしまったことを後悔する。森一郎氏の指摘するとおり(11)、この時僧都は薫によって、浮舟が薫の真摯な愛に背き、許可なく出家したという印象を持たされ、結局浮舟と話し合うことを薫に勧めた。

薫は浮舟の弟を使い立たせ、手紙を運ばせた。懐かしい弟の気配と薫からの手紙に、浮舟も流石に気強くはいられず動揺するが、今更戻れないと小君にも会わず、薫を拒絶する。拒否された薫は得心がゆかず、「人の隠しすゑたるにやあらん」(夢浮橋 三九五頁)等と疑心かられながら小野の地を立ち去り、物語は終わってしまう。

浮舟の出家後の生活は、薫の再びの出現により、現世へと連れ戻される危険性を孕みだしている。そして、薫が浮舟を見つけた出したならば、いくら明石中宮が口止めたとあっても、いづれ匂宮に伝わらぬとも限らない。

浮舟が自力で出家へと至ったのも、入水によって男君達にそ

の生存を知られなかつた故であること等を考えれば、一度その生存を知られてしまえば、その後の出家生活自体を脅かされてしまうことも必然である。

このように出家さえすれば平穩で心清らかに生活できる訳ではないという不安は、作者自身の

世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。それに、やすらひはべるなり(紫式部日記 二一〇頁)

という感情に端的に表れている。

実際浮舟は、物語内においては何とか薫を拒否し、仏の道に進む覚悟を堅持したが、動揺し、心動かされてしまっている。物語は揺れ動く浮舟の情動を非常に生々しく描いるが、出家を果たしても俗世との関係を断ち切れず、迷い悩む浮舟の姿こそ、作者の危惧したものであるとも言える。浮舟はやつとの思いで出家という道を選び取ったが、男君の出現によって再び脅かされる可能性から解放されることなく物語は終わってしまう。

しかし、それでも浮舟の物語は、この物語全体において非常に重要な意味を持つであろう。物語は現世への未練を残し、それでも苦しみながら我が選択を守ろうとする浮舟の姿と、元々は深い道心を持ちながら今や浮舟の選択を理解しえず、自分以外の男性に浮舟が囲われているのではないかという疑念に頭を占められた薫の姿を非常に対照的に描いている。

この夢浮橋巻の浮舟は、御法巻において出家すら許されず、源氏への愛と同情に引きずられながら死んでいった紫上とも対照的である。

浮舟の物語は、物語内で初めて自分の意思だけで出家をした

女君の物語だが、彼女の行く末には未だ多くの困難残り、女が主体的に生きることの難しさをここでも露呈してしまっている。しかし、周囲の意思に流され入水にまで追い込まれた浮舟という女君が、出家を経てなお悩みながらも自らの選択を守り抜く姿は、物語が最後にたどり着いた「女の生き様の物語」の集大成であることは間違いないだろう。

三

ここまで、八の宮の娘達の物語を追いながら宇治十帖がどのようにに第二部から「女の生き様の物語」を引き継いだかを考えてきた。

女君達は、様々な苦難に見舞われながら、自らの主体的生を模索したが、そもそも何故女君達がただ生きる、ということすらそれほど過酷であるのかをもう一度考えてゆきたい。

第三部世界の主な舞台となる宇治は、京から遠く離れた寂しい場所として物語に登場する。故に、第三部世界は一般的に、第一部、第二部の源氏繁栄の物語や、明石一族の再興物語などの多分に政治的背景を含んだ世界ではなく、男女の情愛と仏教的価値観に彩られた世界であると言われてきた。久下裕利氏は、夕霧や薫の恋が語られる宇治や小野は「聖」と「俗」の境界空間であることを指摘しており⁽¹²⁾、宇治及び、浮舟の出家の地である小野は、確かに京の論理の及ばない、所謂周縁の地であると言える。京との地理的隔絶が、政治的背景を持ち込まないことを可能にしているともいえるだろう。

しかし、京から離れ男女の恋愛譚が実際多く語られているとはいえ、本当にそこに政治的読みを導入することは不可能だろ

うか。薫は源氏と先帝の女三宮との息子、今上帝や中宮からも覚えめたい男君であり、匂宮も将来の立場を期待される親王である。彼らと恋愛関係にある女君が、果たして本当に京の政治的状况と無関係でいられるだろうか。

当時の貴族社会にとって、婚姻とは政治的思惑を多分に孕んだ一族安泰のための方策である。第三部世界においても源氏の権勢を引き継いだ夕霧が東宮、二宮には既に娘を入内させていることは匂兵部卿卷に描かれており、匂宮にもしきりに娘を縁付かせようと要請している。しかも、薫の拒否により実現せずには終わったが、夕霧は薫にも縁談を持ちかけている。

好色な匂宮は中君と結ばれるが、度重なる遊び歩きを今上帝や中宮から叱責され、宇治から足が遠のいたことで、大君の不安を掻き立て心労を増し、結果的に彼女に死を思わせるようになる。そして匂宮と六の君の婚姻は実際宿木巻で実現され、中君は悲嘆に暮れることとなった。

薫にしても、大君、中君、浮舟と三人の女君との物語を中心に描かれているが、宿木巻において今上帝女二宮との縁談が成り立っており、彼女を正妻に迎えている。この高貴な正妻をばばかり、自身の身分としても相手として十分な身分を持ち合わせないかと判断されたがために、浮舟は宇治へと囲われ、彼女の悲運の物語は紡がれていく。また、薫は女二宮と婚姻しながらも、明石中宮所生の女一宮にも恋慕している。原陽子氏は(13)、薫の宮に対する恋慕を「薫の女一の宮憧憬が、実父柏木の心を捉えてやまなかった皇統への志向を表し、それ故その中樞に位置する明石一族に対する憧れとその挫折、疎外感というものによって強化されている」とする。女二宮との婚姻を帝から打診された際の「后腹におはせばしも」(宿木三七九頁)という心情からしても、薫の持つ皇女への願望、その先にある権力への志向を読み取ることが可能であろう。

薫や匂宮は貴族社会の上位に位置する人々であり、自然その

恋愛の相手となる女君は、京の論理に絡め取られていってしまう。貴顕と関わりを持つということは、遠く離れた宇治の地においても、京の政治的情動と切り離されて生きることが不可能であるということと同義ではないか。

そしてここに、宇治十帖に政治的目線を導入する意義がある。中井賢一氏は(14)、明石中宮の言動が男君達を動かして浮舟や中君を都の政治世界に引き入れ、女君達は夕霧に対して匂宮・薫の勢力が対抗するための存在であるという。氏は、

明石中宮は、政治と遠く見える宇治の物語を、政治の中樞たる都内部の物語として架橋、吸収することによって、物語の表面には見えづらくなっている都の権力闘争が、第三部世界の世界になお生動していることを示しているのだ。

とも述べており、女君達は第三部世界において表面化はしていない権力闘争のバランスをとるために機能していると考えている。氏の指摘の通り、特に中君は匂宮に初めての子を与えることで、匂宮の立場が実際実現したとき、夕霧の完璧な後宮政策を挫く可能性を孕んでいる。そして、薫が夕霧の娘と結婚せず、女二宮を妻に娶ったことは、将来的に薫が夕霧の政治的ライバルとなる可能性をも示唆しているだろう。彼らは結婚を通じて、自身の立場を固めている。

一部・二部が描いた明石一族や源氏・夕霧親子の物語は未だに終わっていない。明石中宮は我が子匂宮を天皇とするため、身分に劣る中君を召人として処遇するよう匂宮をいさめる一方、権力者夕霧の娘との婚姻を勧め、夕霧は今上の東宮・二宮に飽き足らず、三宮である匂宮の立場の可能性をも視野に入れて娘を差し出す。また、女二宮を妻とし、中君に対し、「後見」

の立場を持つ薫は、夕霧に対抗しうる勢力となる可能性を秘めており、宇治十帖は表立っては見えなくても、新たな人物達による政治的動きを読み取ることが出来る。

宇治が地理的に京と断絶し、いかに周縁の地であったとしても、京に生きる貴顕と関わりを持たずば京の論理に組み込まれてしまう。宇治十帖は、物語の発端となる八の宮自身が権力闘争の敗者として登場し、多分に政治的世界を内包している。八の宮が娘達に宇治の地で人生を終えるようにと言いつつ残さねばならなかったのは、彼自身が一度は立坊すら望まれた皇子でありながら、時勢の移り変わりによって「世に数まへられたまはぬ古宮」(橋姫 一一七頁)となってしまうという経験による、貴族社会の厳しさを知る故ではなかったか。貴族の婚姻とは政治と同じであり、後ろ盾を持たない八の宮の姉妹達は、実際多くの困難を経験した。

女君の苦難を語る第三部世界の根底には、依然として第二部以前を牽引した政治的問題が引き継がれていると言えるだろう。

おわりに

宇治を舞台として展開される第三部世界は、八の宮の三人の娘を通して第二部が投げかけた「女は如何にして生きるべきか」という問題を描いた。大君は紫上の結婚への不信を受け継ぎ、その拒否を貫徹する故に死にむかう。中君は、明石の君と同じく子を成すことで一時の平穏を得たが、より身分の高い妻の存在と「後見」の頼りがたさのために常に不安を覚えながら生きねばならない。この二人の物語を受け継ぎ、大君の「形代」として登場した浮舟は、多くの苦難の果てに自らの意思のみで出家を遂げ、出家後の前途に未だ多くの不安を抱えながらも、主体的生を守り通そうとする女君である。

三人の女君の人生は様々に展開されるが、根底には彼女たちに「後見」がおらず、その為に結婚を巡る問題に対し、後ろ盾のある女君と比べて弱い立場におかれていたことが、苦しみの主たる要因であることでは一致している。

そして八の宮姉妹の苦難の背後には、京に生きる夕霧や明石中宮の権勢を巡る思惑がある。女君達と関係した薫や匂宮は宮の中心で生きる貴顕であり、彼女達は婚姻に起因する政治的な問題に絡め取られてしまう。

そのような観点から見れば、第二部世界において完結し、第三部世界にはわずかにその繁栄が描かれているだけにみえる源氏・夕霧親子や明石一族の物語は、依然として物語の根底で胎動し、女君の生き方に影響を与え続けている。第二部以前の政治的諸物語と、女君達の物語は、表裏をなす問題であると言えるだろう。

注

(1) 皇女の結婚については、今井源衛「女三宮の降嫁」『源氏物語の研究』未來社・一九六二年、今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの」『むらさき』二十六号・一九八九年七月、勝亦志織「物語における皇女の〈結婚〉―『うつほ物語』『源氏物語』をめぐって」『むらさき』五十号・二〇一三年十二月、後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」『源氏物語の探究』八巻・一九八三年六月等が詳しい

(2) 森一郎「皇女の結婚―源氏物語主題論の一節―」『国語教育研究』二十六上号・一九八〇年十一月

(3) 加藤洋介「後見攷―源氏物語論のために―」『名古屋大学国語国文学』六三号・一九八八年十二月

(4) 今井久代「宇治八の宮の遺戒と俗性」『中古文学』六〇

号・一九九七年十一月

(5) 上坂信男「小野の霧・宇治の霧―源氏物語心象研究断章―」『言語と文芸』六一号、一九六八年十一月、久下裕利「夕霧巻と宇治十帖―落葉の宮獲得の要因―」『学苑 文化創造学科紀要』八五三号・二〇一一年十一月、三谷邦明「宇治・小野―源氏物語の「山里」空間」(『源氏物語研究集成』十巻・風間書房・二〇〇二年六月等

(6) 高良瞳「宇治の大君―男性拒否の心情について―」『同志社国文学』七号・一九七二年二月

(7) 森一郎「宇治の大君と中君」『平安文学研究』五五号・一九七六年六月

(8) 鈴木日出男「浮舟の出家をめぐる」『東京学芸大学紀要』二九号・一九七八年二月、増田繁夫「浮舟の出家」『古代文学論叢』四巻・一九七四年四月、森一郎「浮舟の出家―「女の宿世」の窮極」『平安文学研究』五七号・一九七七年六月等

(9) 張龍妹『源氏物語の救済』風間書房・二〇〇八年
(10) 南波浩「物語作家としての紫式部」『源氏物語講座』四巻・一九九二年七月

(11) 森一郎「浮舟の出家―「女の宿世」の窮極」『平安文学研究』五七号・一九七七年六月

(12) 久下裕利「夕霧巻と宇治十帖―落葉の宮獲得の要因―」『学苑 文化創造学科紀要』八五三号・二〇一一年十一月

(13) 原陽子「女―宮物語のゆくえ―蜻蛉巻―」『源氏物語講座』四巻・一九九二年七月

(14) 中井賢一「『源氏物語』明石中宮論―明石中宮の機能と権力機構としての宇治―」『中古文学』九一号・二〇一三年

終章

本稿は、明石一族の家再興の物語がどのように構想・展開され、物語世界全体としてどこまでその影響を窺うことが出来るか否かの考察を行うものであった。

第一章においては明石一族の再浮上に欠かすことの出来ない、光源氏・夕霧親子の二代にわたる繁栄の過程についての分析を行った。明石一族は、明石の君と源氏の婚姻によって、源氏の繁栄に付随する形で浮上していくため、源氏父子の繁栄の過程を考えることは不可欠であると言える。

源氏は臣籍降下の後、濤標巻の勘申によって明石姫君の立后と夕霧の太政大臣就任を知り、自身と息子夕霧の二代にわたる繁栄の為、執政者としての道を歩み始めた。

史実において物語以前に例を見ない、二世の源氏による大臣就任を可能にするために源氏は、歴史上藤氏のとった方法と同じように、自身の娘明石姫君を入内し立后させ、その皇子の立后を経て天皇外戚となる必要があった。

そのためまずは、六条御息所の遺児・秋好を養女として冷泉帝に入内させ、絵合巻では頭中将を押さえて秋好に寵愛を得させることに成功した。そして次代の東宮には自身の実子・明石姫君を入内させ、若菜上巻において明石姫君が皇子を出産することによって、無事後宮支配を成し遂げる。息子夕霧も源氏の方針を受け継いでおり、匂兵部卿宮巻では娘達を東宮・二宮と結婚させ、着実に後宮政策を進めている。

そしてまた、源氏は女三宮、夕霧は柏木の未亡人女二宮を妻として、皇族との姻戚関係を持ち、更に養女玉鬘と髭黒大将や夕霧と雲居雁の婚姻を通じて、臣下同士の紐帯も保っているが、この方策もまた、藤氏の方法を踏襲していることを確認した。

このように源氏は、天皇外戚の地位・皇女との婚姻・臣下と

の紐帯を通じて、自身の権力基盤の確立に努め、息子夕霧へとその権勢を委譲することに成功した。

また、一章では最後に、源氏の執政者としての性格を「大殿」という呼称を中心に分析している。「大殿」は本来道長以降の摂関家特有の呼称であり、先行論では主に「天皇の外戚」と「摂関の父親」、二つの側面から特徴付けられてきた。

史上の「大殿」制は勿論、前任摂関である父親と後任の摂関にあたる息子の血縁を基盤とする政治体制であるが、物語内ではこれを婚姻関係を通じた擬制的親類にずらして使用している。特に致仕左大臣と源氏、源氏と頭中将の関係性において、源氏に欠如した実務的政治能力を補うものとして機能させていることを論じた。

そして、源氏は自身には欠けていた実務的能力を息子夕霧には得させるため、彼を大学へと入学させたが、夕霧の大学入学は結果的に大学寮の復興と文治政治の復権を招いた。この点において、先行論では、理想的政治体制の実現のための布石として理解されてきた夕霧の大学入学という方策において、文治政治の復権は副次的要素であり、本来の目的は夕霧に実務的な能力を過不足無く付けさせる為の執政者教育であったと結論づけた。

このように一章では、源氏が藤氏の方法に学んでその繁栄を達成し、それは「大殿」という藤氏特有の呼称が作中で当座の権勢者達に使用される点からも読み取ることが可能であるということを論じ、同時に源氏の繁栄を下支えする一番重要な後宮政策には、明石姫君を擁する明石一族の存在が不可欠であり、明石物語は源氏繁栄と一体となって展開していると確認した。

二章・三章では、明石物語の構想を、作者が取材したと考えられる二つの説話との影響関係及び、史上実際にあった受領階層と高位貴族の婚姻の事例を中心に検討した。

二章ではまず、明石物語が女系を通じた血の継承という特殊

な論理で一族の再興を遂げていることを確認し、明石一族のよ
うに一度は没落した貴族が再び浮上する方法として、娘を天皇
に入内させる藤原高藤と、直接入内を選ばず、まず一度高位貴
族との婚姻を経て、その貴族に付随して上昇する藤原山蔭、二
つのパターンを想定した。

明石物語全体の展開は、『今昔物語集』等に語られる所謂勸
修寺説話とかなり近い。人物関係や、明石の君と源氏の恋愛譚
は、勸修寺説話を元に構想されていると考えた。

ただし、勸修寺説話は展開や人物関係との影響関係が窺える
ものの、明石物語は没落した貴族が貴顕との婚姻によって浮上
する物語であり、その論理は『大鏡』における「山蔭の宣誓」
の方により近いといえる。

結論として二章では、明石物語はその全体の展開を勸修寺説
話によりつつ、再興の論理としては山蔭説話を元としており、
両説話共に共通する、「神」の介在による不可能の実現、とい
う要素も引き継いでいることを確認した。

三章では、二章で確認した二つの説話の内、何故山蔭説話を
明石物語がその再興の論理として採用したのかについて論じ
た。

まず、明石一族の同族であり、彼らに先行した按察使大納言
の再浮上への道程を検討した。按察使大納言は高藤と同じく桐
壺更衣を入内させ皇子の立坊を目指したが、物語成立当時、後
ろ盾を持たない貴族の娘の皇子が立太子する展開は非現実的で
あった。その為大納言の計画は挫折し、明石物語はこれを引き
継ぐ形で出発している。

物語は、より当時の実情に即した形として、実際物語成立と
比較的近い時期の事例である、山蔭の孫娘・時姫と兼家の婚姻
を下敷きにして考えると考えられる。そして、時姫の例だけでは
なく、同じく貴顕との婚姻により突然上昇した例として、道長
の兄道隆と結ばれた高階貴子及びその親族高階一族の影響が、

特に高階成忠と明石入道の符号という点で明石一族の人物造形
に見受けられることを示した。

以上の通り、第二章・第三章においては、明石物語の構造をそ
の元となったと想定される説話及び、実際の歴史における受領
階層の婚姻を中心に分析した。

明石物語はその展開において勸修寺説話の影響下にあると思
われるが、勸修寺説話の語る没落貴族の娘が入内し、皇子が後
に天皇になるという展開と、物語成立当時の実際の立后・立太
子事情との乖離から、貴顕との婚姻によってその繁栄に浮上す
る形で繁栄した山蔭や、高階一族の例を踏襲し、構想されたも
のであるとの結論を得た。

そして第四・五章では、明石一族や源氏・夕霧親子の繁栄の
物語が一応の決着を見たのに入れ替わる形で物語の表面に表れ
てきた「女はいかに生きるべきか」の物語の分析を行い、女君
達の苦難の背景に、既に完結したはずの明石一族や夕霧の繁栄
の物語の続きを読み取り得るかどうかを論じた。

四章では、明石物語や源氏親子繁栄の物語など、政治的問題
を孕んだ物語が達成された後、何故女君達の苦悩の物語が語ら
れるのか、物語享受の側面から考えた。

『源氏物語』や、『更科日記』の中には、自身を物語の登場
人物に引きつけて楽しむ女君達の姿が描かれている。物語の享
受には女性達が物語を通じて世界を学び、自身のロールモデル
を模索する側面があり、そのために物語は女君の多様な人生を
描いたが、その中心的人物として紫上と明石の君が存在すると
考えた。

明石の君は、正式な手続きを踏んで源氏と結ばれたが、その
身分の低さ故に実子を紫上に養女として差し出し、忍従の人生
を送ることによって一族の繁栄を成し遂げた。

一方の紫上は、父宮に認知されない子どもであり、彼女を養
育していた祖母の死後、源氏に引き取られ父の許しを得ないま

ま妻となった。一族の規制を受けない反面、夫の愛情のみを頼りに生きる人生は後に彼女の苦悩の要因となり、最終的に病を得て死んでいく。

二人の女君は、「家」・「子」・「婚姻」という三つの要素においてその人生が対照的に造形されており、どちらも互いに欠如したものを補完し合って源氏の繁栄に奉仕し、それ故に多くの困難を経験した。

この二人の女君は、第二部の終わりにかけてそれぞれ自らの人生を振り返り、彼女たちに挟まれる形で第二部に登場する女君達の葛藤が語られている。特に注目すべき事柄として、女君達は苦難に際して一様に出家を望むが、彼女たちの苦難が当時の貴族社会一般に通底する男性主義的価値観に起因するものでありながら、そこから脱出するために選り取る出家という手段すら、男君の了承無しには達成できなかったことを確認した。

そして、このような女君の葛藤の最後に位置する紫上の述懐は、個人の感情を超えて女の生き様一般を見据えたその苦しみの吐露として機能している。第二部までの世界は、明石一族や源氏父子の繁栄を描きながらも、その背後に紫上と明石の君を中心にした、多くの女君の苦しみを語っており、紫上の述懐における「女は如何に生きるべきか」という問いは、解決を見ないまま第三部世界へと遺されている。

そして最後に五章は、第三部世界に登場する八の宮の三姉妹の人生を通じて、「女の生き様の物語」がどのような結末を迎え、そして彼女たちの人生の背後に、依然として明石一族や夕霧の政治的動勢を読み取ることが出来るかを考えた。

宇治の三姉妹は、第二部までの女君達の特徴でもあった皇族の血をひく女君達の物語として展開している。皇女達の人生が、物語のテーマとして語られやすい背景には、「後見」のない皇女達の人生は、本来皇女達に求められる理想的人生を著しく困難にするという事情が想定される。

このような「後見」不在の物語として八の宮の遺児達の物語は出発し、三姉妹はそれぞれ、第二部世界の女君達と共通性を持ちながらも、新たな展開を切り開いている。

大君は、亡父の遺言と、自らや妹・中君の婚姻問題を通して、結婚への不信という紫上と同じ認識を獲得し、自らの主体的生を模索し、最後にはその死をもって意思を貫徹した。

中君は姉とは違い、今上帝の第三皇子匂宮を結ばれ、匂宮の最初の子どもを出産する。中君の人生は、この点で明石の君と似通っているが、個を犠牲にして一族に奉仕し繁栄を得た明石の君とはまた違って中君の結婚生活は、大臣となった夕霧の娘・六の君という妻の存在と、家族の「後見」を得られず自身に好意を寄せる男君・薫を「後見」とするしかないという点において、非常に不安定なものになっているといえる。

この二人の後に語られる物語最後の女君・浮舟の人生は、作中登場する多くの女君の中でも一番波乱に満ちたものであったといえるだろう。父宮の認知を得られず、身分の低い母の再婚相手にも大事にされなかった浮舟は、母の必死の奔走によって腹違いの姉・中君を頼って、彼女の手引きで薫に引き合わされた。しかし、薫には正妻として今上帝の女二宮が既におり、浮舟はその身分の低さを理由に宇治に囲われ、歴とした妻としても処遇されることはなかった。そして匂宮との密通が図らずも始まることとなり、二人の男君に挟まれた浮舟は、進退窮まらずに苦悶の末に入水自殺を図る。

浮舟の物語がこれまでの物語と一線を画しているのは、彼女の物語が入水で終わらず、生還して出家へと至る点である。浮舟はこの長い物語の中で、誰の承諾を得ることもなく自分の意思だけで出家を達成した初めての女君である。

ただ、浮舟の出家は彼女のその後の安泰を保証するものではない。出家後まもなく彼女は薫にその生存を知られ、再び俗世に連れ戻される不安に怯える。夢浮橋巻で、浮舟は懊悩

の末なんとか薫を拒否し、自らの選択を堅持するが、将来に依然不安を残したまま、物語は終わってしまった。

浮舟の行く末への不安は完全には払拭されず、出家すら女の人生の困難さを完全に解決する手段とはならなかった。しかし浮舟は、物語の中で初めて主体的生を生きながら選んだ女君であり、この点においてやはり女の苦悩の物語における一つの到達点であると言えるだろう。

このように五章では宇治十帖における女君の生き様を見てきたが、最後に本稿は女君の人生の背後に、未だ京の政治的動勢の余波、つまり夕霧や明石中宮、そして源氏の後を継ぐもう一人の男君である薫の存在が呼び込む政治闘争の影を見るという読みの可能性を指摘した。

女君達は当時の貴族社会においては当然のように許容されていた「一夫多妻」制の下で身分の上下に関わらず少なからず苦しみを味わい、そして貴族の婚姻が家父長制的制度に基づいた極めて政治的な為であったことは、「後見」を持たない女君にとっては更なる苦境と苦悩を招く要因ともなった。「女の生き様の物語」つまり「女は如何に生きるべきか」を問う物語は、婚姻を巡る問題の中で常に弱者であり続け、苦しまざるを得なかった女達の物語であり、彼女たちの物語は源氏・夕霧親子や明石一族の繁栄という華やかな物語と表裏を成した、影の物語である。

これが、本稿の出した最終的結論であり、以上の点において明石物語は、第三部においては既に完結済みの物語であるように見えていても、物語の底流に依然としてその存在を感じるこ

とが出来るだろう。

初出一覧

序章 新稿

第一章 二世源氏の物語
新稿

第二章 家再興の物語としての明石物語 —藤原高藤・山陰説話との関連から—
「家再興の物語としての明石物語 —藤原高藤・山陰説話との関連から—」
(『国文学研究ノート』五七・二〇一八年三月)

第三章 明石物語の構想
「『源氏物語』における明石物語の構想」
(『国文論叢 福長進先生退職記念号』五七・二〇二一年一月)

第四章 女君達の物語 —明石の君と紫上を中心に—
新稿

第五章 宇治十帖の女君
新稿

終章 新稿